983
cG61k
H
00365633

岩波文庫
1505

狂人日記

他一篇

ゴーゴリ作
平井肇譯

岩波書店

岩波文庫

1505

狂人日記

他一篇

ゴーゴリ作
平井肇譯

岩波
国立国会図書館
1905.26

岩波書店

3338

983cG61kH

目次

狂人日記……五
羅馬——斷章——……五一
譯註……一二九
解題……一三五

帝国図書館蔵書
国立国会図書館
30.5.26
365633

狂人日記

十月三日

けふといふ日にはずゐぶん變なことがあつた。朝、起きたのはかなり遲かつたが、マヴラが長靴の磨いたのを持つて來た時、いま何時だと訊いた。すると、もうとつくに十時を打ちましたとの答へに、おれは大急ぎで身じまひをした。正直なところ、役所へなんかてんで行きたくはないのだ。行けば、きつと課長の奴が澁い面をしやがるにきまつてゐる。奴はもうこの間ぢゆうからおれの顏さへ見ればこんなことを言やあがるんだ——『君は一體どうしたといふんだ、まるで頭が混亂してるやうぢやないか？　どうかすると、毒氣にでもあてられたやうにふらふらしてるし、時々、書類の表題に小文字をつかつたり、日附や番號を全然いれなかつたり、何が何やらさつぱり譯のわからないものにしてしまふぢやないか。』なんて。　忌々しい蒼鷺野郎め！　あれあ屹度このおれが局長の官邸でお書齋に坐つて、閣下の鵞筆を削つてゐるのが羨ましいんだらう。なあに、おれはあの會計係に逢つて、あの吝嗇坊野郎を拜みたほして、あはよくば幾何か月給の前借をする期待でもなかつたなら、どうして役所へなんぞ行つてやるものか。ところが、あの會計係がどうしてどうして、一筋縄でゆく代物ぢやあないて！　つひぞあん畜生が一月分だつて月給の前借をさせた例しがあるかい——それよりやあ、最後の審判の來るのを待つた方がましなくらゐだ。

どんなにせがんだつて、こちらがいくら困つてゐたつて――あの白髮頭の惡魔め、前借なんぞさせることぢやない。そのくせ自宅では自分とこの料理女に頰桁を叩かれてゐくさるのだ。それはもう世間で誰ひとり知らぬものがない。まつたく本局勤めなんてどこが好いだらう――うまい儲け口なんか一つとしてありやしない。そこへいくと、縣廳だの、區役所だの、支金庫だのになるとがらりと樣子が變つて來る。例へば、隅つこの方にちぢこまるやうにして、何か書きものをしてゐる穢い安フロックにくるまつた先生だが、その御面相を見れば唾でもひつかけてやりたいくらゐだが、どうしてどうして、あれで素晴らしい別莊を借りたりしてゐるのだ！　こんな先生のところへ金ぴかの陶磁器の茶碗なんぞ持つて行くものではない。『これあ、まるで竹庵先生への手土產だね。』と仰つしやる。まあ持つて行くなら、跑馬を二頭とか、彈機附馬車を一臺とか、それとも三百留もする獵虎の毛皮でも仕入れて行くことだ。見かけは實に物靜かで口のきき方なども誠にやさしく、『鵞筆を削るナイフをちよつと拜借いたしたいのでございますが。』などといふ調子なんだが、これがどうして、何か賴みこんで來る請願人と見れば、きれいに剝いて襤衣一枚にしてしまふのだ。尤もその代りこちらの勤めむきは上品なもので、萬事にかけて淸潔なことは金輪際、縣廳などでは見られたものでなく、卓子は桃花心木製だし、上役だつてみんな、『あなた』言葉だ……。まつたく正直なところ、勤めでもこのとほり上品でなかつたら、おれはとつく

の昔に役所なんか退いてしまつてゐるんだが。

おれは古いマントを着て洋傘をさした。何しろ、ひどい土砂降りなんだ。街には人つ子ひとり通つてゐない。ときたま眼につくのは、着物の裾をまくりあげて頭からかぶつた女房か、洋傘をさした小商人か、使丁ぐらゐが關の山だ。高等な人間では、わづかにこちとら仲間の官吏を一人見かけた位のものだ。その男には四つ辻で出會つたのだが、おれはその男を見ると直ぐにかう獨り呟やいたものだ。『へつ！　措きやあがれ、あん畜生、役所へ行くやうな振りをして、その實あすこへ駈けてゆく女の子の後を追つて、あの娘のおみあし拜見といふ下心なんだ。』どうしてわれわれ役人仲間はかう不良ばかりだらう！　まつたく、どんな士官にだつて、ひけを取りはせん。帽子をかぶつた女が通りさへすれば、必らず、小當りにあたつてみるのだ。こんなことを考へながら、ふと氣がつくと、おれが前へさしかかつてゐた或る商店の店先へ一臺の馬車がぴつたり停つた。おれには直ぐに、その馬車がうちの局長の乘用車だといふことがわかつた。『しかし局長が買物などに出られる筈はない。』さうおれは考へた。『屹度これあ、お孃さんに違ひない。』おれは咄嗟に壁へぴつたりと體を擦りよせた。從僕が扉をあけると、令孃はまるで小鳥のやうに身輕にひらりと馬車から降り立たれた。ちよつと右左を御覽になる、その度ごとにお眉とお眼がちらほらと……ちえつ、なまんだぶ、おれはもう助からん、金輪際、助かりつこない！　それは

さうと、なんだつてまたこんな雨降りにお出ましになつたんだらう！　成程これで、女つてものはどこまで襤褸つ切れに眼がないかつてことがわかる。令孃はおれには氣がつかれないやうだつた。それにおれの方でも故意と、なるべく深くマントにくるまるやうにしてゐたのだ。何しろ、おれのマントはひどく汚れてはゐるし、それに型が至つて舊式だからなあ。今は襟の長い外套がはやつてゐるのに、おれのは襟が短かくてダブルになつてをり、生地だつてまるきり湯熨がしてないんだ。令孃の小犬が店の中へはいりぞこねて往來にまごまごしてゐる。おれはこいつをよく知つてゐる。メッヂイといふ犬だ。さて、ほんの一分もたつかたたないところでおれはふと、とても優しい聲を耳にした――『あら今日は、メッヂイさん！』おや、おや、おや！　いつたい誰の聲だらう？　振りかへつて見ると、洋傘をさして行く二人の婦人が眼についた。一人はお婆さんで、もう一人の方は若い娘だ。その二人はもう行き過ぎてしまつたのに、おれの傍でまた、こんなことをいふ聲がする。『メッヂイさん、あんたひどいわよ！』はつて、面妖な！　見れば、メッヂイが例の婦人たちについて來た小犬と鼻を嗅ぎあつてゐるのだ。『ひえつ！』と、おれは思はず肚の中で驚ろいた。『いや待てよ、おれは醉拂つてるのぢやないかしら！　どうも、こんなことにぶつかるのはめづらしいことだ。』――『ううん、フィデリさん、さうぢやないのよ。』さう言ふのだ――おれはメッヂイがさう言ふのを、この眼でちやんと見屆けたのだ。『あたしね

え、くん、くん、あたしねえ、くん、くん、くん、とつてもひどい病氣だつたのよ！』ひえつ！　こいつめ、犬の癖に！　いや、まつたくのところ、そいつが人間のやうに物をいふのを聽いた時には、おつ魂消てしまつたて。だが、後でよくよく考へて見れば、別に魂消るほどのことでも何でもなかつた。實際、こんなやうなことは世間にはざらにあることなんだ。何でも、英吉利では一尾の魚が浮きあがつて、變挺な言葉で二言ものを言つたのを、學者がもう三年越し一生懸命に研究してゐるさうだが、未だに何のことだかさつぱり分らないといふ話だ。また、これも新聞で讀んだのだが、二匹の牛が店へやつて來て、お茶を一斤くれと言つたといふ話もある。だが正直なところ、メッヂイが次ぎのやうなことを言つた時には、おれもまつたく魂消てしまつた。『あたしねえ、フィデリさん、あんたにお手紙を差しあげたのだけれど、ぢやあ屹度うちのポルカンがあたしの手紙をお屆けしなかつたのねえ！』ちえつ、驚ろいたね！　おれはつひぞこの年になるまで、犬が手紙を書くなんてことは聞いたこともないわい。文章が正確に書けるのは貴族だけの藝當だ。尤も、中には商店の帳つけや、農奴階級のうちにだつて、どうかすると、文章を書く手合がないでもないが、しかしあの手合の書くのは大抵機械的で、句點もなければ、讀點もなく、てんで文體になつてやしないのだ。

これには全く驚いた。だが實を言へば、近頃おれには時々、他人には聞いたり見たり出來ない

やうなことが、よく見えたり聞えたりするのだ。『ようし』とおれは肚の中でうなづいた。『ひとつ後をつけて行つて、あの犬ころの素性を突きとめて、一體あいつがどんなことを考へてゐやがるか、調べあげてくれよう。』そこでおれは洋傘をひろげて、二人の婦人の後について歩き出した。二人はゴローホワヤ街へ通り抜けると、メシチャンスカヤ街へ曲り、そこからストリャールナヤ街へ出て、コクーシュキン橋にかかる手前で、やつと大きな家の前で立ちどまつた。『この家なら知つてるわい』と、おれは口の中で呟やいた。『ズヴェルコフの持家だ。』まつたく素敵もない家だ！　凡そここに住んでゐない種類の人間はない——料理女やお上り連がどのくらゐゐることか！　こちとら仲間の官吏にいたつては、まるで犬ころのやうにうじやうじやと重なりあつて、押しあひへしあひだ。おれの友達が一人ここに住んでゐるが、そいつは喇叭の名人だ。くだんの婦人連は五階へあがつて行つた。『これでよし。』とおれは考へた。『今は入らなくてもかうして居所さへつきとめておけば、いざといふ時には、ちやんと役にたつからなあ。』

十月四日

今日は水曜日だから、局長の官邸の方へ出むいた。故意と早めに行つて、ゆつくり坐りこんで鵞筆を殘らず削りあげた。うちの局長はよほど賢い人に違ひない。書齋ぢゆう、本のぎつしりつ

まつた書棚で一杯だ。二つ三つ、本の表題を讀んでみたが、どれもこれも小難かしいものばかりで、こちとら風情にはてんで寄りつけさうもない——佛蘭西本や獨逸本の原書ばかりだ。何しろ局長は、顔を見ただけでも、ちやんとその眼中に何かしら威嚴がそなはつてゐる。つひぞ局長が無駄口を叩かれたのを聞いたことはないからなあ。書類でも差し出す時に、かう訊ねられるぐらゐのものだ——『天氣はどうだね？』——『は、どうもじめじめしたお天氣でございまして、閣下！』何にしても、われわれ風情の敵ではない！　要路の大官に違ひない。——だが、どうやらこのおれが格別お氣に召してゐるらしいて。もし萬一、御令孃の方もその……ええ、畜生！……いや、なんでもない、なんでもない、內證、內證！　と。——『蜂』を讀む。佛蘭西人つて奴は何といふ馬鹿だらう！　いつたい何をたくらんでるのだらう？　皆んなひつからげて、笞でぴしぴしひつぱたいてくれるといいんだ！　やはりその雜誌で大變面白い舞踏會の記事を讀んだが、何でもクールスカヤ縣の地主の書いたものだつた。クールスカヤ縣の地主連はなかなか味な文章を書きをる。その後でふと氣がつくと、もう十二時半を打つてゐたが、閣下は未だに寢室からお出ましにならない。ところが、一時半ごろ、とても筆紙にはつくし難い大事件が持ちあがつた。扉がぱつと開いたので、そら局長だとばかりに、おれは書類を持つて椅子から跳びあがつたが、それがあの方なんだ、御令孃なのさ！　いや、どうも、その服裝のあでやかさといつたら！　お召

物はまるで白鳥のやうに眞白なやつで――ふう、そのきらびやかさといつたら！　こちらをちらと御覽になつた時には――まるで太陽に射られたやうに眩しかつた！　まつたく太陽に射られたやうにさ！　お孃さんはちよつと會釋を遊ばされて、『あの、父はこちらにをりませんでして？』と仰つしやる。いやはや、どうも！　玉をころばすやうなそのお聲といつたら！　金絲雀だ、まつたく金絲雀そつくりだ！『やれやれ、お孃さま！』さう、おれは言はうと思つたのさ。『どうか、もうそんなに苦しめないで下さいまし。でも、どうしても苦しめようと仰つしやるなら、いつそそのお美しいお手で苦しめて下さいまし。』とさ。ところが、忌々しいことに、舌めがどうしても言ふことをききをらずに、おれはやつと、『いえ、おいでではございません。』と言つたのが精いつぱいだつた。令孃はおれの顏をちらと御覽になつたが、それから書物の方へ視線を移される途端に、手巾を下へお落しになつた。おれはあわてて、泳ぐやうに飛びつきざま、忌々しい嵌木の床でつるりと足を滑らして危なく鼻柱を挫くところだつたが、やつと踏みこたへてその手巾を拾ひあげた。へつ、何といふ素晴らしい手巾だらう！　薄い生地のバチスト麻で、琥珀――まるで琥珀そつくりなんだ！　それに匂ひだつて、お上品な方の持物らしく、實に奥床しい匂ひだ。ちよつとお禮を仰つしやつて、微かににつこりされると、匂やかな朱唇があるかなしに動いただけで、そのまますうつと行つてしまはれた。おれはそれからなほ一時間ばかり坐つてゐたが

不意に從僕が入つて來て、『アクセンチイ・イワーノヴィッチ、もうお引きとり下さい。旦那樣はもうお出ましになりましたよ。』とぬかしやがる。どうもこの從僕風情くらゐ我慢のならぬ手合はない。いつも玄關に頑張つてゐくさるだけで、碌すつぽ挨拶ひとつしやがらない。それだけならまだしも、一度など、あのどつ畜生の一人めが、腰も浮かさないで、喫煙草は一服いかがでなんぞと來やがつたものだ。人を何だと思つてやがるんだ、下種の頓馬野郎め、これでも歴乎とした官吏で、抑も貴樣たちとは身分が違ふぞ！　だがどうも仕方がないから、おれは帽子を手にとり、マントもつひぞこの手合が着せてくれた例しがないから自分で着て、そとへ出た。自宅では大方寢臺の上でごろごろしてゐた。それから非常に美しい詩を一つ寫した。『いとしき人よ、ひとときき見ざるに、はや一年も相見ざる心地こそすれ。わが生を呪ひつつ、そもわれは生くべきや、かくわれは言ひぬ。』これは屹度プーシキンの作だらう。夕方、マントにくるまつて、あの方のお邸の玄關さきまで行つてみた。――ひよつと令孃がお出ましになつて、馬車にお乘りになるところでももう一目をがみたいものと、長いこと待つてみたが、その甲斐もなく、お出ましにはならなかつた。

十一月六日

課長の奴め恐ろしく憤れをつた。おれが役所へ行くと、傍へ呼びつけやがつて、かうぬかすのだ。『さあ、言ひ給へ、君は抑もどういふ料簡でああいふ眞似をするのだ？』――『何がどうしたと言ふのです？　わたくしは何もいたしはしませんよ。』とおれは答へた。『まあ、よくよく考へて見給へ！　君はもう四十の坂を越してるんぢやないか――もう少しは分別がついてもよさうなものだよ。いつたい君は何と心得てゐるんだ？　僕が君のふざけた眞似を何にも知らないとでも思つてるのかね？　君は局長のお嬢さんに附き纏つてるといふぢやないか！　ふん、ちつとは身のほどを考へて見たがよからう。いつたい君はなんだい！　コンマ以下の人間に過ぎないぢやないか。第一、文なしの素寒貧ときてゐる。せめて、鏡とでも相談してみ給へ――その面でしやあしやあとよくもそんな眞似が出來たものだ！』ちえつ、箆棒め、顏はといへば、膀胱の氷嚢みたいで、縮れた一つまみきりの前髪を頭の天邊へ持つて行つて、油で變な渦巻型に固めつけてゐれあ、それでいつぱしのど偉い人間のやうなつもりでゐやあがるんだ。へん、分つてるよ、何故あいつがおれに當りちらすのか、おれにはちやんと分つてるよ。おほかた、おれが格別な好意を寄せられてゐるのに氣がついて、妬ましいんだらう。ふん、あんな奴、唾でもひつかけてやらあ！　七等官がどれだけ偉いんだ！　時計に金鎖をぶらさげたり、三十留もする長靴を注文したからつて、それがなんだい！　おれがどこぞの平民の出だとでもいふのかい？　おれは仕立屋

の出でもなければ、下士官の小伜でもない。かう見えても貴族だぞ。なあに、おれだつて今に出世して見せる。年だつてまだ四十二だ――勤めの方も本當はこれからといふものだ。今に見ろ！　おれだつて大佐相當官ぐらゐにはなつて見せるぞ、あはよくばもつと偉くなるかも知れん。さうなつたら、住ひだつて手前なんかよりぐつと立派なのを構へてやるから。へん、自分より他には歴乎とした人間は一人もないとでも自惚れてやがるんだらう？　なんの、おれにだつてルチェフ仕立の流行の燕尾服を着せて、手前のしてゐるやうなネクタイでもつけさせてみろ、どうして、手前なんぞ足もとへだつて寄りつけるこつちやないぞ！　ただ、それだけ懐ろに餘裕のないのが不仕合せといふものさ。

十一月八日

芝居へ行つた。露西亞馬鹿『フィラートカ』を演つてゐた。可笑しくて腹の皮を撚つた。それにもう一つ小喜劇があつて、その中で宮内官をあてこすつた面白い小唄をうたつたが、殊に、一人の十四等官をさんざんにやつつけたのがあつて、實に遠慮會釋なく歌はれてゐるので、どうしてあんなものが檢閲を通つたのかと、おれには不思議で堪らなかつた。商人たちのことだつて、彼奴らはみんな詐欺師で、その伴どもは放蕩無賴で身のほど知らずだ、などと露骨にやつつけてゐ

る。新聞雜誌關係者についても、やはりとても面白い諷刺詩をうたつて——記者はくさしてばかりをり、作者は讀者に加勢を賴む、などとやつてゐた。近頃は作者もなかなか面白な脚本を書く。おれは芝居にゆくのが好きだ。ほんの少しでも懷ろに小錢があれば、どうしても行かずにはゐられないのだ。ところが、われわれ役人仲間には實に度し難い手合があつて、田吾作どもめ、芝居へなんぞてんで足踏みもしをらないのだ——尤も切符をただで貰つた場合は別だが。ひとり女優に歌の非常にうまいのがあつた。おれは、あの方のことを想ひ出したて……おつと、畜生！……何でもなし、何でもなし……內證々々と。

十一月九日

八時に役所へ出かける。課長の奴、おれの出勤したのをまるで氣がつかないやうな顏をしてうせる。おれも負けずに、何處を風が吹くといふやうな顏ですましてゐてやつた。書類を調べたり照し合はせたりする。四時に退廳。局長の邸のそばを通つたが、誰の姿も見えなかつた。晚飯の後はおほかた寢臺のうへでごろごろして過した。

十一月十一日

けふは局長邸へ伺候して、お書齋で鵞筆を閣下のは二十三本、そしてあの方……ひやあつ！……御令孃のも四本、削つて差しあげた……。閣下は鵞筆が一本でもよけいに削つてあるのがひどくお好きだ。何にしてもお偉い方に違ひない！　いつも默つておいでになるが、察するに、肚の中では始終いろんなことを考へていらつしやるのだらう。主にどんなことを考へていらつしやるのか、あの頭の中でどんなことが目論まれてゐるのか、それがひとつ知りたいものだて。かういふ方たちの生活や、あのさつぱり譯の分らぬ繁文褥禮や、宮中むきの作法などを、まのあたり覗いてみたいものだ。いつたい御自分たちのあひだで不斷どんなことをしたり言つたりしていらつしやるのか——そいつがおれには知りたいのだ！　おれは何遍も閣下に話しかけてみようと思つたことはあるのだけれど、ただ忌々しいことには、舌めがどうにも言ふことを聽きをらん。戸外はお寒うございますとか、お暖かでございますとだけは言へても、それから先きが頓とつづかないのだ。客間も覗いて見たいのだけれど、ただ時たま扉があいてゐることがあるだけで、客間のむかふにもまだ一つお部屋があるやうだ。いやはや、何といふ豪勢な飾りつけだらう！　鏡にしても陶磁器にしても、素晴らしいものばかりだ！　令孃のお居間になつてゐる、あの奥のお部屋——おれは、あれが覗いて見たいのだ！　奥の婦人室、そこには屹度いろんな小瓶だの玻璃器だのが並べてあるだらうし、息をかけるのも氣がとがめるやうな花などもあるだらうし、また、そ

こにはあの方の衣裳なども脱ぎすててあつて、それが衣裳といふよりは空氣みたいにふんはりと散らばつてゐることだらう。寢室も覗いて見たい……そこは屹度、不思議の國だ、いや、天國にだつてないやうな樂園に違ひないと思ふ。あの方が臥所からお起きになつて、雪のやうに白い靴下をお穿きになるため、あの可愛らしいおみ足をおのせになる足臺も見たい……。おつと、いけない！　いけない！　いけない！　何も言ふまいぞ……內證々々。

だが今日は、あのネフスキイ街で耳にはさんだ、くだんの小犬の立話を思ひ出したので、急に夜が明けたやうな氣持になつた。『ようし、』と、おれは心にうなづいた。『今こそ何もかも突きとめてくれるぞ。それには先づ第一に、あのやくざな犬どもが取り交はしたといふ手紙を押收しなければならない。それさへ見れば、何か手がかりを摑むことが出來よう。』ありやうを言へばおれは一度メッヂイを手もとへ呼んで、奴にかう言はうとしたのだ。『なあ、メッヂイや、そらかうして今はおれとお前と二人きりだが、それでもまだ氣づかひなら、扉を閉めもしようさ、さうすれあ誰にも見つかりつこないといふものだよ。そこで一つ、お孃さんのことでお前が知つてることを洗ひざらひ何もかもぶちまけて話して呉れないか――一體お孃さんはどんな樣子で、何をしてござるんだい？　おれは誓つて、他人に洩らしはしないからね。』つてさ。ところが狡い犬ころめ、尻尾を捲いて、いやに身を縮こめやがつて、何も聞えないやうな振りをして、こそこ

そと部屋を出て行つてしまつた。おれは疾うから、犬といふ奴は人間よりぐつと賢いものだと思つてゐた。そればかりか、物をいふことだつて出來るやうだが、ただどうも、かう、片意地なところがあるらしい。あれでなかなかの策士で、なんでも見てとり、人間の技巧などはちやんと見拔いてしまふ。いや、明日はどんなことがあつてもズヴェルコフの持家へ出向いて、フィデリをとつちめて、まんがよければ、メッヂイの書いた手紙を殘らず押收してこまさにやならん。

十一月十二日

なんでもかんでもけふはフィデリに會つて詰問してやらねばと、午後の二時に家を出た。おれには甘藍といふやつがどうにも鼻もちがならぬのに、メシチャンスカヤ街の小つぽけな店といふ店から、あれの臭ひがぷんぷんとするのだ。搗てて加へて、どの家の門口からもおつそろしく不快な惡臭が流れて來るので、おれは鼻を押へて大急ぎに駈け拔けた。それに下賤な職人どもめがやたらにてんでの仕事場から煤や煙を吐き出させくさるので、上品な人間にはとてもこの邊を散歩するなんて氣持にはなれない。こつそり例の六階へ登つて、おれが呼鈴をならすと、ちよつと雀斑のある、大して見苦しくもない娘つ子が顏を出した。よく見れば、いつかお婆さんと一緒に歩いてゐた例の娘なんだ。それがぽつと顏を赧らめたので、へつ、こいつ、もう男がほしいんだ

なと、おれはすぐに見てとつた。『なんの御用ですかしら？』とおいでなすつたから、『實は、こちらのお飼犬にちよつと話がありましてね。』と言つてやつた。ところが、てつきりこの娘は馬鹿に違ひない！　おれには馬鹿だつてことが直ぐにわかつた！　そこへ、くだんの小犬の奴がワンワン吠えながら駈けつけたから、おれはそいつを取つつかまへようとしたのだが、畜生め、すんでのことにおれの鼻へ咬みつきくさるところだつた。だが、おれは逸はやく、部屋の隅つこに奴の寢箱のあるのに氣がついた。これだ、おれに用のあるのはこれなんだ！　早速それに近づいて箱の中の敷藁をひつ掻きまはすと、やれやれ嬉しや、出て來たのは小さな紙束だ。畜生犬め、それと見るなり、初めはおれの脹脛に咬みつきをつたが、紙束をおれに取りあげられてしまつたと感づくと、いやに哀れつぽい金切聲をたてたり、おべつかを使つたりしはじめたけれど、おれは構はず、『へん、お氣の毒さま、あばよ！』とばかり、一目散に駈け出してしまつた。定めしあの娘つ子はおれを狂人だと思つたに違ひない。何しろ、ひどくおつ魂消てゐたやうだからなあ。家へ歸ると、何はさて措き、さつそくその手紙の吟味にとりかからうと思つた――それといふのもおれはどうも蠟燭のあかりでは字がよく讀めないからだ。ところが、マヴラの奴めが飛んでもない時に床を洗ひはじめたものさ。どうも芬蘭女といふ奴は馬鹿が多くて、とかく清潔ずきも場違ひで困りものだ。しかたがないから、散歩でもしながら一つとつくりとこの經緯を考へて見よ

うと思つて、おれは戸外へ出た。今度といふ今度こそは、いろんな事情や、思惑や、その動機がすつかり分つて、いよいよ、すべてが明るみへ出るといふものだ。あの手紙でおれには何もかもが明瞭になるのだ。犬といふ奴はなかなか利發な動物で、政治關係のことなら何でも辨まへてゐるから、屹度あの手紙にはうちの局長のことが細大もらさず書いてあるだらう――閣下の人柄から行狀まで詳細に認めてあるに違ひない。それに何か少しはあの方のことだつて……　おつと、あぶない、内證々々！　夕方になつて家へ歸つた。おほかたは寢臺でごろごろして過した。

十一月十三日

さあ、ひとつ讀んでやらう！　なかなか明瞭に書いてあるが、それでも何となく書體に犬らしいところがある。ええと、――

『お懷かしいフィデリ様！　と、かうは言つても、あんたの名前があんまり下種つぽいので、あたし何だかそれに馴染まれないの。何とか、もう少し好い名前がつけられなかつたものでせうかねえ？　だつて、フィデリだの、ローザだのつて――俗つぽいぢやないの！　でもまあ、それはそれとして、あたしとても嬉しいわ、お互ひにかうしてお手紙の往復をするやうになつたことがさ。』

この手紙はなかなかきちんと書けてゐる。句切りも當を得てをれば、假名づかひだつて正確だ。あの課長などは、何處かの大學を出たなどと法螺を吹いてゐるけれど、なかなかどうして、これだけには書けやしない。ええと、それから――

『めいめいの思想だの、感情だの、印象だのをお互ひに語りあふつてことは、世の中で何より幸福なことの一つだと、あたし思ふわ。』

ふむ！……これは獨逸語から飜譯した、或る論文の中から引用した意見だな。表題はいま憶えてゐないけれど。

『あたし、これ經驗から言つてるのよ、尤も世の中なんて言つても、邸の門より外へは出たこともないんだけれど。だつて、あたしは先づまづ幸福な身の上といへるでしよ？　お父さまからソフィーつて呼ばれていらつしやる、うちのお嬢さんが、それはそれは、あたしを夢中で可愛がつて下さるのよ。』

うへつ、畜生！……いや、何でもない、何でもない！　內證々々と！

『お父さまだつて、よく頭を撫でたりなんかして可愛がつて下さるわ。あたし、お紅茶だつて珈琲だつて、クリームを入れたのを戴くのよ。あ、それからね、ma chère（いとし）（いかた）、あたし、あの大きなしやぶりからしの骨なんか、ちつとも美味しいなんて思へないのに、うち

のポルカンなんぞはいつもお臺所でガリガリ嚙つてるの。骨で美味しいのは野禽のだけよ、それも髓をまだ誰も吸ひ取らないのでなくつちや駄目だわ。いろんなソースを混ぜあはせたのも、とても美味しいけれど、續隨子や青ものを入れたのは不味くつてよ。でもね、何よりいけない習慣といへば、あの麵麭をひねりかためたのを犬に拋つてよこすことだわ。だつて食卓についてゐる、ひとかどの紳士だからつて、どうせ手ではいろんな汚ならしいものも持つでせう、その手で麵麭をこねまはしてさ、こちとらを呼びつけて、その玉を否應なしに口の中へ押しこむんですもの。吐き出すのも何だか惡いやうに思ふから――眼をつぶつて、まあ、嫌々ながら食べはするもののさ……。』

一體これあ何だ！　ちえつ、くだらない！　せめて、もう少し氣のきいたことが書けさうなものだ。他の頁を讀んでみよう、何かめぼしいことが書いてあるかも知れん。

『……あたし、邸うちの出來事を何もかもお知らせしようと思つて、とても乘氣になつてるのよ。ソフィーさまがパパつて仰つしやつてゐる旦那樣のことは、もうちよつとお話しましたわねえ。とても變な方なの……。』

そら、おいでなすつたぞ！　おれはちやあんと知つてゐたんだ。犬つて奴は何を見るにも政治的な眼で觀察しをる。ふむ、そのパパがどうしたんだつて？　ええと、――

『……とても變な方なの。いつもは大抵しんねりむつつりで、めつたに口をおききにならないのよ。それが一週間ぐらゐ前から、《おれも貰へるかな、それとも貰へないかしら?》つて、しよつちゆう獨りごとを仰つしやるぢやないの。片手に何か書きつけを持つて、片手は空のままで握りしめてさ、《おれも貰へるかな、それとも貰へないかしらん?》だつて。一度なんか、あたしをつかまへて、《なあ、メッヂイ、お前はどう思ふ、おれも貰へようかなあ? それとも貰へないだらうかなあ?》つてお訊ねになるのよ。だつて、あたしには何のことやらさつぱり分らないから、旦那樣の長靴をちよつと嗅いでおいて引き退つたわ。それからさつていらしたことがあつたの。そして午前ちゆうはひつきりなしに、禮服をつけた方たちがあとからあとからとお越しになつては、何かお祝ひを述べていらしたやうだわ。お食事のあひだも、いろんな逸話なんかなすつてさ、これまでにつひぞお見受けしたこともないくらゐそれはそれは上々の御機嫌だつたわ。お食事の後で、あたしを御自分の頸のところへお抱きあげになつて、《そうら、メッヂイ、これを御覽。》つて仰つしやるぢやないの。見れば、何だかリボンみたいなものなの。あたし嗅いでみたけれど、ちつとも好い匂ひなんかしなかつたわ。しまひに、そつと舐めて見たら、ちよつぴり鹽からかつたけれど。』

ふむ! この狆ころめ、どうやら少し圖に乘りくさつたな……笞でぶん毆られなきやよいが! それはさうと、ぢやあ、あの局長はなかなかの野心家なんだな。こいつはよく憶えておかにやあならんて。

『では、ちよつと失禮、ma chère(マ シエール)! (愛する友よ!)、あたし、ちよつとそこいらまで一走り行つて來るから中座してよ……。でも、あとは明日すつかり書くわ。——今日は! さあ、またお手紙に取りかかりませうね。あの、今日うちのソフィーお嬢さまつたらねえ……。』

そうら! おいでなすつたぞ。ええと、お嬢さんがどうしたんだつて? ちえ、畜生め! ……おつと、大丈夫、大丈夫……さあ、あとを讀まう。

『……ソフィーお嬢さまつたらね、今日はとても大騒ぎだつたのよ。舞踏會へいらつしやるつていふのでさ、でも、そのお留守にお手紙が書けると思つて、あたし嬉しくなつてしまつたわ。うちのソフィーさまつたら、いつでも舞踏會とさへいへば、とても大はしやぎなの、尤もお召しかへの折にはきまつてぷりぷり八つ當りをなさるけどさ。あたしには人間つてどうしてあんな着物なんてものを着るのか、さつぱり譯がわからないの。何だつて、あたしたちみたいに、裸かで出歩かないのでせうね? その方が便利で、氣持も樂でせうにさ。ねえma chère(マ シエール)(親愛なる友よ)、どうして舞踏會へ行くのがあんなに嬉しいのか、さつぱり分らないわ。

ソフィーさまが舞踏會からお歸りになるのは、いつも朝の六時ごろで、たいてい蒼白めて寢れきつた顏をしていらつしやるところを見ると、お可哀さうに、きつと舞踏會では何んにも召しあがらないらしいのよ。正直なところ、そんな苦しい眞似は迚もあたしには出來ないわ。だつてさ、蝦夷山鳥の入つたソースとか、鷄肉の翼下のローストでも食べさせて貰へなかつたら……それこそ、あたし、どうなるか分らないと思つてよ。お粥にソースをかけたのだつて美味しいわ。でも人參だの、蕪だの、食用蘚なんてものは——ちつとも美味しいものぢやないわ。』

おつそろしく斑のある文章だ！　一目で人間の書いたものでないことが分つてしまふ——初手はちやんとまとまつてゐたが、末の方で犬式に足を出してしまつてゐらあ。どれ、もう一つの方のを讀んで見よう。ちと長つたらしいな。ふむ！　日附がないや。

『まあ、ちよいとフィデリさん、何となく春めいて來たわねえ！　あたし何だか胸がどきどきして、まるでしよつちゆう誰かを待つてるやうな氣持なの。しつきりなしに耳の中でわんわん音がするので、あたしよく片足をあげては立ちどまつて扉の外に聽耳をたてるのよ。あたしね、あんただから打明けるのだけれど、ずゐぶん、いろんな牡犬につけまはされてゐるの。よくあたし窓の上へあがつては、品さだめをしてやるわ。中にはほんとにいやな醜犬

もゐるのよ！　一匹なんか、とても不恰好な番犬で、お話にならない馬鹿でさ、その馬鹿だつてことがちやんと顏に書いてある癖に、いやに勿體らしくのそりのそりと往來を歩きながら、自分をひとかどの偉さまだと自惚れて、さも皆んなが惚れ惚れと眺めでもするやうに思つてゐるのよ。ちよつ、お生憎さま！　あたしなんか、てんで見向きもしてやらないわ——なんの、そんな奴は眼中にもないといつた調子にさ。それから時々、お部屋の窓さきへ、とても怖いグレート・デンが一匹やつてくるのよ！　どうせあんな不器用な奴にそんな氣のきいた眞似は出來つこないけれど、もし後足で立ちあがつたなら、ソフィーさまのお父さまより、まるまる首だけは高いだらうと思ふわ——そのお父さまだつてずゐぶんお背が高く、でつぷりした御恰幅なんだけれどさ。この木偶坊はよつぽど圖々しい奴に違ひないわ。だつてあたしが唸つてやつても、知らん顏の半兵衞で、顰めつ面ひとつ見せないのよ！　舌をべろりと出して、大きな耳をだらりと垂れたまま、窓をじろじろ覗きこむんですもの——ほんとに田吾作つたらないわ！　でもね、Ma chère（いとし）、かうして、やいのやいのと寄つて來る求愛者たちのうち、どれにもあたしの心臟が平氣だとあんた思つて？　ところがどうして、さうぢやないの……。ほんとに、あんたが見てくれたらと思ふのだけれど、一匹ね、お隣りの垣根を越えてやつて來る騎士があるのよ、トレゾールつて名前なんだけれど……。まあ、

ほんとに ma chère（いとしいかた）、その犬の好いたらしい顔つきといつたら！』

ちえつ！　くそ面白くもない！……頓痴氣め、よくもぬけぬけとこんなくだらないことばかり書けたものだ！　人間のことが知らして貰ひたいや！　おれは人間のことが知りたいのさ、おれには精神的な糧がほしいんだ――それでもつて魂を養ひ、心を慰めてもらはうと思へば、何だい、こんな馬鹿々々しいことばかり……。何かもう少しましなことでも書いてないか、一枚とばしてやれい！

『……ソフィーさまは小卓に向つて、何やら縫物をしていらつしやる。あたしはまた往來の人どほりを眺めるのが好きで、窓の外をじつと見てゐると、そこへひよつこり從僕が入つて來て、（チェプロフ様のお越しでございます！）つて言ふの。（お通しして頂戴！）と、ソフィーさまは彈んだ聲で仰つしやるなり、矢庭にあたしをお抱きあげになつたわ。（まあ、メッヂイや、ね、メッヂイ！　ここへ今いらつしやる方がどんな方だか、お前に分つてゐたらねえ――栗色髪で、侍從武官でさ、そのお眼といつたら！　黑目がちの、まるで瑪瑙のやうなお眼なんだよ！）さう仰つしやるなり、ソフィーさまはお居間へ駈けこんでおしまひになつたの。ほんのちよつと間をおいて、そこへ侍從武官が入つていらしつたが、黑い頬髯を生やした、なるほど若いお方で、つかつかと鏡のそばへ近寄つて、ちよつと髪を撫でつけて

から、お部屋をぐるりと見まはしなすつたわ。あたしはちよつと唸つておいて、自分の居場所にすわつてゐたの。すると間もなくソフィーさまがお出ましになつて、とても嬉しさうにその方の氣取つた足擦りの御挨拶にお會釋をなさるのよ。あたしはそれを見て見ない振りで何くはぬ顔をして、やはり窓の外へ眼をやつてゐたけれど、それでも首を少し曲げて、一體どんなお話をなさるだらうと、一心に聽耳をたててゐたわ。そしたらさ、どうでせう、ma chère（あんた！）、まるで他愛もないことばかり話してるのよ！　どこかの奥さんが舞踏の何とかいふ型を他の型と間違へただの、ボボフとかいふ男は襟飾をつけた恰好が鶴そつくりだつたが、その人がもう少しでころげるところだつただの、リディナとかいふ女は綠いろの眼をしてゐる癖に自分では碧い眼だと思つてゐるだのと、そんなやうなつまらない話ばかりなの。あたし心の中でさう思つたわ――（まあ、この方のどこがそんなに好いんだちう、トレゾールと並べたら、こんな侍從武官なんか、てんで比べものにもならないぢやないか！　ほんとにさ！　まるでお月さまと鼈ほどの違ひだわ！　第一この侍從武官はおそろしくのつぺりした、だだつ廣い顔でさ、その顔のぐるりにまるで黑い手巾でも卷きつけたやうな頬髯を生やしてゐるだけなんだけれど、あのトレゾールの方は、顔から口もとがほんとに尋常で、額のまんなかに白い斑があるんだもの。それに腰つきなんかもトレゾールと侍從武官では比べ

ものにも何にもなりはしないわ。眼つきにしたつて、應對ぶりや手練手管にしたつて、まるであんなんぢやないわ。ほんたうに大違ひなの！　ねえ、ma chère（マ シエール）（いとしいかた）、あたしチェプロフ様の何處がそんなに好いのか、さつぱり譯がわからないわ。あんな方にどうしてお嬢さまはああも夢中になつていらつしやるんでせうねえ？』

さうともさうとも、おれだつてそいつあ少し變だと思ふぞ。なんの、チェプロフなんぞにさう易々あの方を首つたけにさせることが出來て堪るもんか。ええと、それから——

『こんな侍從武官がお氣に召すくらゐなら、いつそ旦那さまのお書齋に坐つてゐる、あのへつぽこ官吏だつてお氣に召していい筈だと思ふわ。まあ、そのへつぽこ役人といつたらさ ma chère（マ シエール）（いとしいかた）、そりやあ甚い醜男（ひどいみそとこ）なの！　まるで龜（かめのこ）が袋をかぶつたみたい……。』

一體そのへつぽこ役人てえなあ誰のことかな？

『それが苗字からして變なのよ。いつもお書齋に坐つて、鵞筆（ペン）ばかり削つてるの。髪の毛がまるで乾草みたいだわ。且那さまに時々、下男がはりに走り使ひをさせられたりしてゐるの……。』

おやおや、この忌々しい狆ころめが、どうやらおれのことを當てこすつてやがるのだな。何でまた、おれの髪の毛を乾草みたいだなんて吐かすのだらう？

『ソフィーさまはこの人の顏を見るとどうしても噴を出さずにはゐられないんだつて。』

嘘をつけ、この胸くその惡い狆ころめが！　忌々しいことを吐かしやがつて！　なあに、これといふのもみんな傍妬（おかやき）からさ。どいつの差金だか、このおれが知らないとでも言ふのかい？　みんな課長の仕業（しわざ）にきまつてゐる。あいつと來たら、このおれを不倶戴天の仇として恨んでやがるんだ——だもんだから事ごとに、おれを陷れようにかかつてゐくさるのさ。それは兎も角、まだ一通ここに手紙があるから讀んでみよう。多分これを見たら事情（ことわけ）がはつきりするかも知れん。

『ma chère（マ シエール）（愛する友）、フィデリ様、ずゐぶん御無沙汰したけれど許して頂戴ね。あたしこの頃すつかり有頂天になつてたのよ。何とかいふ小説家が、戀は命から二番目のものだつて言つてるの本當に至言だと思ふわ。それにねえ、今お邸の様子がすつかり變つてしまつたの。この頃は例の侍從武官が毎日いりつぴたりなのよ。ソフィーさまつたら、あの侍從武官に首つたけなんですもの。お父さまも上々の御機嫌なのよ。お邸にグリゴーリイといつて、床（ゆか）を掃きながら大抵いつでも獨言（ひとりごと）をいつてる下男がゐるの、それの口裏から推量したんだけれど、どうやら近いうちに御婚禮がありさうだわ——何しろ旦那さまは常々、是が非でもソフィーさまを將官か、侍從武官か、それとも大佐くらゐのところへお輿入がさせたい御意向だつた

のだからさ……。』

えい、勝手にしやがれ！　おれはもう、とてもこんなものは讀む氣がしない……。何かといへば、やれ侍從だの、やれ將官だのと、聞きたくもないや。ちよつと好ささうなものは何から何まで、みんな侍從武官か將官の懷ろへころげこんでしまふのさ。こちとらが何かちよつぴり幸福を見つけて、それを手に入れようと思ふと、すぐに侍從だの將官だのが横合から搔つぱらつてしまやがる。忌々しいつたらありやしない！　おれも將官になりたい、將官になつて聟の口にありつかうなんて、そんなさもしい下心からでは更々ないが、ただ、おれが將官になつたら、さぞかしあの連中が寄つてたかつて世辭追從や繁文褥禮の限りをつくすだらうから、その醜態が見てやりたいのと、へん、吾輩は君たちなんぞに鼻汁もひつかけんぞと反りくり返つてやりたいだけのことさ。それにしても、ええ、忌々しいつたらない！　そこでおれはこの馬鹿げた犬の手紙をずたずたに引き裂いてしまつた。

十二月三日

馬鹿な！　そんなことつてあるものか。結婚などさせて堪るかい！　侍從が何だい？　ただの官職に過ぎないぢやないか――手に取つて見られる代物でもなしさ。なにも侍從だからつて額に

もう一つ餘分に眼玉がくつついてゐる譯でもあるまい。まさか鼻だつて金製でもあるまい。おれの鼻だつて誰の鼻だつて鼻に變りはない筈だ、侍從だからつて鼻で匂ひは嗅ぐだらうが、まさか飯は食ふまいし、鼻で嚏みはしても咳は出來まい。おれはこれまでにももう何度も、どうして人間にはかう身分に差別があるのか、ひとつ究明したいと思つたものだ。なるほど、おれは九等官だが、どういふ理由で九等官なのだらう？　もしかしたらおれは全然九等官なんかぢやないかも知れん。ひよつとすると、おれは伯爵とか將官とかいふ身分でありながら、ただこんな風に九等官に見えてゐるだけかも知れない。ひよつとすると、おれは自分がどういふ者だか、自分でも知らずにゐるのかも知れん。人の傳記にもずゐぶんとさういふ例はあるもので、士族ならまだしも、つまらない素町人とか、いやそれどころか、たかが水呑百姓といつた賤しい人間が、何かの彈みで素性がわかると、思ひもよらぬやんごとない貴人だとか、男爵だとか、さういつた素敵もない身分の人間だつたりすることがある……。水呑百姓でさへさうなんだもの、士族のおれからはどんな偉いものが飛び出すか分つたものぢやない。それで、もしこのおれが將官の禮裝でもつけてあの邸へやつて行くとする――そのおれの右の肩にも肩章、左の肩にも肩章、肩からは藍色の大綬章が斜に掛かつてゐようといふ、りうとした扮裝だつたらどうだらう？　あの別嬪がその時どんな音をあげるだらうなあ？　あの父親は、うちの局長は、いつたい何と言ふかしらん？　なか

なかどうして、大變な食はせものだからなあ！　あいつはマッソンなのさ、正眞正銘のマッソンにきまつてらあ。なんのかんのと、しらばくれてはゐるけれど、大將がマッソンなことは一眼でちやんと睨んでゐらあ——だつて、その證據には、挨拶のために手を差し出す時、指を二本しか出さないぢやないか。なあに、このおれだつて、直ぐにも、總督に任命されるやら、主計局長に轉補されるやら、それともどんなど偉い官職を授かるやら知れたものぢやないさ。おれは九等官でしかあり得ないなんていふ理由が何處にあるんだ？

十二月五日

今日は午前中ずつと新聞ばかり讀んで過した。西班牙では妙な事件が起つてゐる。おれにはどうもそれがよく會得めない。記事によれば何でも、王樣が雲がくれになつたため、王位の繼承者を選ぶことで臣下のものが難局に逢着し、ひいては一般に不穩の空氣が釀成しつつあるといふのだ。どうも奇態きはまる話さ。王樣が雲がくれになるなんて、これは一體どうしたことだらう？何でもさる婦人貴族が王位を繼承する順序になつてゐるさうだが、女が王位に卽くなんて、そんな法つてあるもんぢやない。王位には王樣が坐らなきや嘘だ。『ところが、その王樣になる者がない』といふのだ。けれど、王樣がないままでは濟まされない。一國に國王がゐないなんて法はない。王樣はゐるのだが、何處かに人知れず隱れてゐるだけの話さ。恐らく國のうちにゐるんだが、何か御一門に紛紜があつてか、それとも隣りあひの强國、たとへば佛蘭西か何處かが怖くて餘儀なく姿を隱してゐるのに違ひない。それとも何か他に仔細があるのかも知れん。

十二月八日

よほど役所へ行かうかと思つたが、いろんなことで屈託してゐたため出そびれてしまつた。どうも西班牙の一件がおれの頭から離れない。女が王樣になるなんて法があるものか？　斷じていけない。それに第一、英吉利が默つてゐない。のみならず、これは歐羅巴全體の國際問題だから墺太利の皇帝にしろ、わが國の陛下にしろ……。いやどうも、この一件が妙に氣になつて氣になつて、一日ぢゆうまるきり仕事に手がつかなかつた。マヴラの話では、おれは食事ちゆうもひどくぼんやりしてゐたさうだ。成程さういへば、うつかり皿を二枚、床の上へおつことして、粉微塵にしてしまつたやうだ。食後、山の方へぶらぶら行つてみたが、何の得るところもなかつた。大方は寢臺の上でごろごろしながら、西班牙問題についていろいろと考へた。

二千年　四月　四十三日

けふは大變お日出たい日だ！　西班牙の王様がゐたのだ。見つかつたんだ。その王様といふのは――おれなんだ。それもけふ初めて氣がついたといふ譯さ。實際、まるで稻妻のやうに突然それに氣がついたのだ。一體どうしてこれまで自分を九等官だなんて思つてゐられたものか了解に苦しむ。まつたくどうしてあんな狂人じみた途轍もない空想が頭に浮んでゐたのだらう？　まだ誰ひとり、おれを瘋癲病院へ入れようと思ひつかないうちで仕合せだつた。今や眼の前のことが何もかもはつきりした。今のおれには何でも掌へ載せたやうによく分る。ところが不思議なことにこれまでは眼の前のことがまるで霧にでもつつまれたやうに茫としてゐた。それといふのも人間が腦髄は頭の中にあるなどと考へてゐるからのことだが、飛んでもない勘違ひで、腦髄つてものは裏海の方角から風に乘つてやつて來るのさ。おれが先づ皮切りに、マヴラに自分の正體を打ち明けたところ、奴はそれを聞いて、このおれが西班牙の王様だと分ると吃驚仰天して、怖れおののきながら、魂も身に添はぬ爲體さ――なるほど愚昧な女のこととて、西班牙の王様なんてまだ一度も見たことがないのだから無理もない譯だ。だが、おれは努めて奴の驚愕を鎭めて、これまでも長靴の掃除がともすれば不行屆であつたりはしたけれど、そんなことは決して咎めはせぬと言つて、どこまでもこちらの寛仁大度に信賴するやうにと慰めておいた。何にしても相手は無智蒙昧の民だから、高尙なことを言つたつて分りはしない。マヴラは西班牙の王様といへば、

どれもこれもフィリップ二世のやうな暴君ばかりだと思ひこんでゐればこそ、あんなに吃驚したのだから、おれはフィリップなどとは似ても似つかぬ仁君で、カプシン僧など一人だつて寄せつけはしないからと、よく言ひ聽かせてやつたものだ。役所へは行かなかつた。役所なんか糞くらへだ！　ううん、もうその手には乘らないぞ――あんな穢ならしい書類なんか、もう寫してやるもんか！

三十月八十六日　晝と夜の境

けふ役所の庶務がやつて來て、もう三週間の餘もサボつてゐるから、いい加減に役所へ出たらどうだと吐かしやがる。

だが、週間制度などといふ、くだらないものを採用した野郎が間違つてるのさ。あれは猶太の坊主が七日目に一度づつ行水をしなければならないので、猶奴が發明したものだ。それは兎も角ちよつと洒落に役所へ顏を出した。課長の奴め、定めしおれがペコペコお辭儀をして詫びごとを言ふものと思つてゐたらうが、おれは平氣の平左で、別に怒つてもゐなければ、さうかといつてあまり機嫌のいい顏もしないで、奴を尻眼にかけたまま、まるで誰にも氣がつかないやうな素振りで自分の席にどつかり腰をおろした。それから一通りへぼ役人たちを見渡して肚の中で考へた

ものだ――『知らぬが佛だけれど、貴樣たちのあひだに坐つてゐる、このおれの身分が分つたものなら？……』さぞかし、どえらい騷ぎが持ちあがらうて！　まづ第一に課長からして、常づね局長の前でやるやうにおれに向つて平身低頭するだらうなあ。そんなことを思つてゐると、拔萃をつくれと言つて何か書類を鼻の前へ突きつけやがつたけれど、おれは指も觸れなかつた。そのうちに一同があたふたとざわつき出して、局長の御出勤だといふ。へぼ役人どもはみんな、局長のお眼鏡にとまりたさが一杯で先を爭つて駈け出して行つたが、おれは一寸も席を動かなかつた。局長がおれたちの事務室を通り拔ける時も、みんなは衣紋を正したけれど、おれは平氣な顏でましてゐたつけ！　局長が何だい？　あんな奴の前で起立するなんて眞平御免さ！　あんなものがどうして局長なもんか！　奴あ局長ぢやなくつて、コロップさ。ありふれた、普通のコロップで、壜の栓になるより他には何の役にも立たない代物さ！　何より面白かつたのは、おれに署名をさせようとして書類を差しだしやあがつた時だ。奴等はおれが紙面の端つこに主任、何某と型の如く記名するものと思つてゐたらしいが――さうは問屋が卸さないや！　おれは局長がいつも署名することになつてゐる肝腎かなめなところへ持つて行つて、(フェルヂナンド八世)と書きなぐつてやつたものさ。さうするとどうだらう、あたりがしいんとしづまつて、どいつもこいつも鞠躬如として鳴りをひそめてしまつたぢやないか。そこでおれはちよつと手を擧げて、『いやなに、警

蹕には及ばん！』と言つて、さつさと戸外へ出てしまつた。おれはその足で眞直に局長の邸へ廻つた。局長は不在だつた。取次に出た下男め、はじめは通すまいとしたけれど、おれが一言たしなめると恐れ入つてしまつたから、その隙にずんずん化粧室へ闖入してやつた。局長の娘は姿見の前に坐つてゐたが、矢庭に跳びあがつて、おれの前で後ずさりをし始めた。だがおれは、西班牙の國王だといふことは明さないで、ただ、かう言つて聞かせただけだ――卿は思ひもかけぬ幸福な身になれますぞ、そして邪魔だてをする惡人どもがどのやうによからぬことを企らまうとも必らず末は妹と背ぢや。――これ以上は何も言ふまいと思つて、おれはそのまま外へ飛び出してしまつた。それにしても、女といふ奴は油斷のならぬ代物だわい！　おれは今、やつと女の正體を突きとめたぞ。まだ今日まで只の一人も、女がぞつこん血道をあげる相手は何ものか、はつきり見拔くだけの炯眼の士がなかつた――初めてそれを發見したのはおれだ。女が血道をあげる相手は惡魔なんだ。いや、決して冗談ぢやない。物理學者は、ああだかうだと愚にもつかぬことを鹿爪らしく書いてゐるけれど――女の惚れる相手は惡魔きりだ。そうら、あの第一列のボックスから一人の女が柄附眼鏡を向けてゐるでせう。あれは大方、あの、勳章をさげた肥大漢を見てゐるのだとお考へになるでせう？　ところが大違ひで、あの女は肥大漢の後ろに立つてゐる惡魔を見てゐるのです。おや、惡魔めがあの男の燕尾服の中へ隱れをつた。ほら、あすこから指で女に

おいでおいでをしてやがる！　あれで女はみすみす、あいつの妻になつてしまふのだ。ところで、身分の高いあいつらの父親どもといへば、そろひもそろつて八方美人で、宮廷への出入を狙ふ手合だが、あれでゐて自分免許に、愛國者だの何だのと納まりかへつてゐるものの、どつこいこの愛國者先生、利權漁りに憂身をやつしてばかりござる！　どうせ虚榮坊で背信的な先生がただから、金錢のためなら親だらうが神だらうが見境なしに賣り飛ばす！　これもみんな虚榮心のさせる業だが、その虚榮心はどこから生まれるかといへば舌の根元に小さな腫物があるからで、その腫物の中にはピンの頭ほどの小蟲がゐる。それといふのも、ゴローホワヤ街に住んでゐる何とかいふ理髪師の小細工さ。そやつの名前はつい忘れて思ひ出せないが、何でもある産婆と共謀になつて、マホメット教を世界ぢゆうにひろめようと目論んでゐることだけは紛れもない事實で、そのお蔭で佛蘭西では國民の大半が既にマホメット教に歸依してゐるといふ評判だ。

幾日でもない　日數にはいらぬ日であつた

ネフスキイ街りを微行で歩く。今上陛下がお通りになつた。市ぢゆうの者が帽子を脱つたのでおれも同じやうにしたけれど、おれが西班牙の王様だといふことは氣振りにも見せなかつた。まだ宮中への參内も濟まさぬうちに、こんな大勢の人混のなかで正體を暴露しては具合が悪いと思

つたからさ。おれが參内を躊躇してゐるのも、まだ今のところ西班牙式の禮裝が手許にないからだ。せめてガウンのやうなものでも手に入れることが出來たらなあ。裁縫師に誂らへてやらうかとも思つたのだが、どいつもこいつも鈍物ばかりで、こちらの話がから分らないのだ。それに頓と商賣に不熱心で、相場なんかに陷りこんでゐたり、大方の奴が鋪道のうへでのらくらしてゐくさる。そこでおれは、拵らへてからまだ、たつた二度しか手を通したことのない、あの新らしい通常禮服をつぶして、あれでガウンを作つてやらうと、肚をきめた。しかし、あんな悪黨どもの手にかけて折角のものを臺なしにされては堪らないと思つたので、人目につかぬやうにぴつたり扉を閉めきつて、自分の手で縫ふことにした。何しろ裁ち方がすつかり異つてゐるので、おれはそれを鋏でずたずたに切りこまざいてしまつた。

日も想ひ出せない　月といふものも矢張りない
何が何だかさつぱり分らない

ガウンはすつかり下拵らへも出來て、立派に縫ひあがつた。おれがそれを着たらマヴラの奴がわつと驚ろきの聲をあげた。だが、おれはまだ參内を躊躇つてゐる――今だに西班牙から使節がやつて來ないのだ。使節も從へないでは體裁が悪い。第一、おれの身分にいつかう威嚴が添はぬ。

おれは今か今かと使節の到來を待ちあぐねてゐるのだ。

一日

使節の悠長さ加減にも呆れかへる。一體どんな故障があつて、かう遲れてるのだらう？　また佛蘭西が邪魔だてをしてるのかな？　何しろ一番仲の悪い國だからなあ。郵便局まで出掛けて行つて、まだ西班牙から使節は到着してゐないかと訊いてみたが、郵便局長つたら話にならん間抜野郎で、何んにも知りやあがらない。その言ひ草がかうだ。『西班牙の使節なんてものは來てゐませんねえ。しかし手紙が出したいのなら、規定の料金で受けつけますがね。』と。馬鹿にしてやがる！　手紙がなんだい？　手紙なんて、全くくだらないものさ。手紙は藥劑師の書くもので、それも豫め酢で舌を濡してから書かないと、顏ぢゆうに疱瘡が出て堪つたものぢやないて。

マドリッドにて二月三十日

さて、おれは西班牙へ來てしまつた。それがまた、あんまり出し抜けだつたので、おれは夢に夢みる心持だ。けさ西班牙の使節がやつて來たので、いつしよに馬車に乘り込んだが、そのまた速力がいやどうも、なみ大抵のものではなかつた。疾風迅雷のやうに走つたので、三十分ばかり

の後にはもう西班牙の國境へ到着してゐた。尤も當今は歐羅巴ぢゆうに鐵道が敷設されて、汽船なども途轍もない速力で走る世の中だからなあ。それはさうと、西班牙つて實に不思議なところだ！　ひよいと取つつきの部屋へ入ると、頭を毬栗坊主にした人間がうじやうじやゐるんだ。はは、これは西班牙の大公か兵士なんだなと、おれは推察した。――でなきや、頭を剃つてゐる筈がない。總理大臣がおれの手を執つて案内したが、その扱ひが甚だ怪しからんと思つた。奴はこのおれを小つぽけな部屋へ押し込んでからに、その言ひ草がどうだらう――『さあ、そこにおとなしく坐つとるんだ。これからはフェルヂナンド王だなんて名乘ると、懲らしめのために毆ちのめされるぞ。』だが、それは試しに過ぎないことを知つてゐたので、おれが奴に逆らふと、總理大臣め棍棒で二度おれの背中を毆りつけをつた。あまりの痛さに危なく悲鳴をあげるところだつたが、いやいや、西班牙といふ國には今だに騎士道が行はれてゐるのだから、屹度これは至高の位に登る際に受ける騎士の作法に違ひないと思つて、じつと押しこらへた。一人になると、おれは政務を親裁することにした。ふと發見したことだが、支那と西班牙とはまつたく同國なのに無學なばかりに誰でもそれを別々の國のやうに思つてゐるのだ。論より證據、紙の上に西班牙と書いてみるがよい――西班牙と書いたのが、いつの間にやら支那となつてゐるから。だが、それよりも明日に迫つてゐる大事件が頭痛の種だ。明日の七時に奇怪な現象が起る――地球が月に乘

つかかるのだ。これに就いては既に英吉利の有名な化學者ウエリントンも書いてゐる。まつたくの話か、おれは月の至つて軟らかで脆いことを想像すると、ほんとに心配で心配でたまらない。大抵、月は漢堡(ハンブルグ)でこしらへてゐるが、どうも出來がよくない。英吉利がそれに目をつけないのがおれには不思議でならん。跛(びつこ)の桶屋が拵らへてゐるのだが、こいつが馬鹿で、てんで月に就いての知識を辨まへてゐないらしい。材料に樹脂(やに)をひいた綱を用ひ、木油も少しはまぜるので、地球全體におそろしく惡臭が漂ひ、鼻の孔に栓をする必要が起る。そのために出來た月が至つて軟らかな球體で、とても人間には住まはれなくて、今あすこには鼻だけが住んでゐる。だから人間は自分の鼻を見ることが出來ないのだ。それといふのも鼻が月の世界へ行つてゐるからさ。地球は重い物體だから、こいつが乘つかつた日には、われわれの鼻は粉微塵に潰れてしまふと考へるとおれはもう居ても立つてもゐられなくなつたので、靴下をはき、半靴をつつかけざま、大急ぎで參議院の議事堂へ駈けつけた——警察に命じて、月に乘つからせないやうに地球を取り押へさせようと思つたからだ。議事堂には、毬栗頭の大公たちがわんさとゐたが、この連中は物の道理をよく辨まへてゐたから、おれが、『皆の者よく承はれ、地球が月に乘つからうとしてゐるのぢや、月を救つてとらせようぞ！』といふと、一同は言下におれの君命を果さうとて馳せ集まり、多くの者は壁へ攀ぢのぼつて月をつかまへようとしたが、丁度その時、例の總理大臣が入つて來た。

それを見ると、一同は四方八方へと逃げ散つたが、おれは王のこととて一人あとに殘つてゐると驚ろいたことに總理大臣め、おれを棍棒でひつぱたきながら、もとの部屋へと追ひこんでしまつた。西班牙ではこのとほり民風に權威があるのだ！

如月の後に改まつた同じ年の一月

今だに西班牙といふ國の正體が摑めない。民風といひ、宮廷の儀禮といひ、まるで尋常一樣のものではない。分らない、どうも分らない、何もかもがさつぱり分らない。今日なども、坊主になんかなるのは厭だといつて、おれが一生懸命に喚いたけれど、たうとう頭を剃つてしまやがつた。しかし、冷たい水を頭にぶつかけられた時の氣持は、どうも憶えがない。兎に角あんな厭な想ひをしたのは生れて初めてだ。おれは狂人(きちがひ)のやうに暴れだすところだつたが、大勢の者に抑へつけられてしまつた。まつたく奇態な風習で、何のことやらさつぱり譯が分らん。愚にもつかぬ無意味な風習さ！　こんな惡風をこれまで廢(よ)させなかつた歷代の王の無分別さ加減が分らない。かれこれ思ひ合はせると、どうもおれは宗教裁判の手にひつかかつたのぢやないかと思ふ。だがさうすると、おれが總理大臣だと思つてゐたのが、さしづめ大審問官といふところだ。それにしても、王樣が宗教裁判にかけられるといふのは、どうも腑に落ちないことだ。しかし佛蘭西がは

殊にポリニヤックが絲をひいてをれば、何ともいへん。第一あのポリニヤックといふ奴が曲者なんだ！　あいつはおれに死ぬまで祟つて、邪魔だてをしようと誓ひを立ててやがるんだ！　それでかう、後から後からと迫害をしやがるんだが、へん、おれはちやんと知つてるぞ、貴様は英吉利人のからくりで踊つてるのぢやないか。英吉利人つて奴は大の策士だからなあ。奴は到るところへ首を突つこむのさ。英吉利が煙草を嗅げば佛蘭西が嚏めをするくらゐのことは、もう世界ぢゆうに知れ渡つてらあな。

二十五日

今日また大審問官がおれの部屋へやつて來たが、遠くの方でその跫音が聞えるなり、おれは椅子の下へ身を隱してしまつた。彼奴はおれの姿が見えないものだから、呼びにかかつた。初めに『ポプリーシチン！』と大聲で呼んだが、おれは返辭をしなかつた。すると今度は、『アクセンチイ・イワーノフ！　士族の九等官！』と呼んだが、おれはやはり默つてるた。すると、『フェルヂナンド八世、西班牙の王様！』とおいでなすつた。おれは思はず首を出さうとしたが、『どつこいその手は食はないぞ！　分つてらあ、また人の頭へ冷水をぶつかけるつもりだらう。』と、すぐに思ひとどまつた。しかし彼奴は間もなくおれを見つけると、棍棒で椅子の下からおれを小突き

出した。呪はしい棍棒だ、そいつで毆されると堪らなく痛い。とはいへ、さうした苦しみも忘れて嬉しかつたのは、けふの發見だ――雄鷄にはどの雄鷄にもそれぞれ西班牙があつて、それは尾に近い羽交の下に隱れてゐることをおれは發見したのだ。かんかんに憤つた大審問官は、おれに何らかの懲罰を加へると言つて威しておいて出て行つた。しかし彼奴なんか幾ら憤つたつて高が知れてるから、おれはすつかり輕蔑してゐる。なあに、あいつは英吉利人の手先に使はれて機械のやうに動いてゐるだけさ。

三百四十九年、甘一、三十四日

いや、おれはもうどうにも我慢が出來ない。噫、あ！　なんて酷いことをしやがるのだ！　頭からは冷水をぶつかけやがる！　奴らは情けもなければ、容赦もなく、てんでおれの言ふことなんか取りあげないのだ。おれが奴らに何か惡いことでもしただらうか？　どうしてかう虐めるのだらう？　おれのやうな貧乏人から何を取らうといふのだらう！　いつたい何かやれるとでも思ふのだらうか？　おれは何ひとつ持つてやしない。これではもうもうとても堪らん、かう酷い目にあはされては我慢が出來ん。頭がかつと燃えるやうで、眼の前の物がぐるぐる廻る。助けてくれい！　連れてつてくれい！　疾風のやうによく走る三頭立の馬をつけてくれい！　さあさ馭者

も乘つたり、鈴も鳴れ、馬も元氣に跳ねあがり、世界の果てまで連れ出してくれ！　何もかも見えなくなるまでどんどん走れ。さあさ、もつと遠くへとつとと駈けろ。あれあれ、空があすこへ舞ひあがり、遠くの方では星がきらきら光つてる。森が黑い樹と飛びや月も走る。足もとには銀鼠の霧が棚びき、霧の中では絃の音がする。片方には海がひろがり、片方には伊太利が見える。あれ、向ふの方に露西亞の百姓家が見えてゐる。あの青ずんで見えるのはおれの生家ではないか？　窓に坐つてゐるのはお袋ではないか？　お母さん、この哀れな伜を助けて下さい！　惱める頭にせめて涙でも一滴くそそいで下さい！　これ、このやうに酷い目にあはされてゐるのです！　その胸に可哀さうなこの孤兒を抱きしめて下さい！　廣い世の中に身の置きどころもなく、みんなから虐めつけられてゐるのです！……お母さん、この病氣の息子を憐れんで下さい！……ええと*アルジェリアの總督の鼻の下に瘤のあるのを御存じかね？

——一八三四年作——

羅馬

——斷章——

たとへばあの稻妻が、摺墨をながしたやうに眞黑な雨雲をつらぬき、閃光の洪水となつて、眼もくらむばかりにきらめきわたる光景を想像するがよい――アルバノ女、アンヌンツャータは恰かもそれに似た瞑眸をもつてゐた。彼女の相貌のすべてには、古代羅馬の彫刻師の鑿が燦然たる光りをはなち、大理石に生命の吹きこまれた、あの往昔を偲ばせる面影があつた。射干玉の黑髮はおもたげな編髮を二つの蠶にして頭にのせられ、四たばの長い捲毛がうなじへ垂れてゐた。彼女がその輝やく雪の面をたとへどのやうな向きにかへようとも――その各樣の顏容がいちいち見るものの胸に强い感銘を刻みつけずには措かなかつた。彼女が横を向けば――その横顏が得もいはれぬ氣高さをもつて息づき、如何なる繪筆をもつてしてもつひに及び難い曲線美を描きだす。また彼女がその輝やかしい襟足や、地上ではつひぞこれまで見られたことのない美しい兩の肩を惜氣もなく露はしながら、高々と見事な黑髮を結ひあげた後頭部をこちらへ向けて背らをかへす時――これはまた、何といふあでやかさであらう！　しかしそれにも優して素晴らしいのは、眞面から彼女に視すゑられて、こちらの胸がぞつと震へ、ほとんど息も詰まりさうな思ひのされる時である。彼女の豐かな音聲は玉をころばすやうに響きわたり、その擧措の速さと健かさと奔放さに於ては、如何に身のしなやかな豹といへどもたうてい彼女の敵ではなかつた。その肩をはじ

め、古代の匂ひをもつて息づく足、その足の最後の指先にいたるまで、彼女のもつ姿態のすべてが創造の極致であり、彼女の到るところ、行くさきざきには、自づから一幅の畫面が構成されるのであつた。——たとへば夕暮ちかく、銅器の壺を頭にのせた彼女が噴泉さして急ぐ時、彼女をめぐる四邊のすべてはいみじき諸調に支配されて、アルバノ山脈の美しい輪郭はいとも淡く遙か彼方へ遠ざかり、羅馬の空の深奥は更に青みをまして、絲杉の樹はひときは眞直に高く聳え、南國の樹々の中なる美女、羅馬松はいまにも大氣の中へ融け入りさうな日傘に彷彿たるその梢をばいよいよ清楚に氣高く天際に描き出す。否、その他すべてのものが、たとへば當の噴泉にもせよ——そこには疾くもアルバノの街娘たちが、大理石の階段に或は高く或は低く群れつどうて、噴きあげる水がダイヤモンドの弧を描きながら、かはるがはる下に置かれる銅器を水音たかく滿たすあひだ、銀鈴をふるやうな甲高い聲で喋々としやべり交はしてゐるのであるが、その噴泉にもせよ、その群衆にもせよ——あたかもすべてが彼女のために、その勝ちほこれる美をひときは鮮明ならしめんがために、また、恰かも女王が後へに廷臣を率き隨へてゐるが如く、彼女が萬象を支配してゐるさまを際立たせんがために存在してゐるかの觀があつた。祭り日ともなれば、アルバノからカステロ・ガンドリフォへ通ずる黝んだ木の廻廊は、晴着をきかざつた民衆に充ちあふれて、その仄暗い拱廊の下には、天鵞絨の衣裳に華美な帶をしめ、柔毛の帽子には黃金いろの花

をさしたミネンチの伊達男たちの姿が見え隱れして、半ば眼を細めた驢馬が、遠くの方から白い頭飾りをきらきら光らせながらやつて來る容姿のすんなりして而も逞ましさうなアルバノやフラスカーチの女たちを恰好よく背に乘せて、ふらふら歩いたり、ぴよこぴよこ駈けてやつて來るかと思へば、豌豆いろの防水マントを着こんだ、長身でいつかうからだに動きのない英吉利人を甚だ不恰好に乘せて、ひよろひよろしたり躓いたりしてやつて來るのもあるが、乘つてゐる英吉利人の方でも、地面に足をひきずらないやうにと膝を窮屈さうに曲げてゐる始末、またブルーズを着て、革紐つきの繪具箱を肩にかけ、頤鬚を巧者にヴァン・ダイク型にととのへた畫家をのせてやつて來るのもあつて、陰影と陽光が交互に全群衆のうへをかすめて過ぎ去るのである——さういつた賑やかなお祭りさわぎの日に於てさへ、彼女がその場にゐるとゐないとでは、その華やかさに格段の相違がある。彼女がどんなに廻廊の奥まつたところにゐても、その光り輝やくやうなきらびやかな全身は、陰鬱な暗がりの中からくつきりと見わけられるのである。彼女のアルバノ風の衣裳の深紅の地色は、陽光をうけた紅玉のやうに、かつと燃えたつ。彼女に面とむかふとその顏からすべての人の胸に不思議なはしやいだ氣分が乘りうつるのである。それで、彼女に出會ふと誰でも、まるで足に根がはえたやうに立ちどまつてしまふ——帽子に花をさしたミネンチの伊達男も思はず歎聲をもらし、豌豆いろの防水マントを着た英吉利人もその動きのない顏に疑問

の色を浮かべて立ちどまるが、ヴァン・ダイク風に頤鬚をかりこんだ畫家にいたつては、誰よりも長く一つところに立ちどまつて、肚のなかで、『これこそ、あのダイアナや、驕慢なジュノーや人を魅惑する美の三神の、いや畫布にうつし得る限りの、あらゆる女性の素晴らしいモデルだ！』と考へるのであつた、それと同時に、こんな大それたことも思つてゐるのである。『もしもこのやうな素晴らしい美人が永久に自分のつづましやかなアトリエの飾りとなつてくれたなら、それこそ本當に樂園といふものだがなあ。』

しかし、いま彼女の後ろ姿にひたと喰ひ入るやうな眸を凝らしてゐる男はいつたい誰だらう？彼女の發する一言半句から、その一擧一動はいはずもがな、彼女の面に現はれる思想の動き一つ見のがさじと、じつと看まもつてゐるのはそも何者だらう？　それは二十五歳の青年で、嘗ては中世紀の名譽と誇りと惡名とを兼ね備へてゐた權門であつたが、今やむなしくグヴェルチノやカラッチイの筆になる夥しい壁畫を殘す壯麗な邸宅のうちに、光澤のさめた畫廊や、色あせた綾絹や、空いろの卓子や、禿鷹のやうに髪の白い maestro di casa（執事）などと共に、まさに燃え盡きんとしてゐる舊家の後裔なる羅馬の公爵である。肩に投げかけたマントの蔭から燃えるやうな視線を放つ黑い双眸と、古典的な輪郭をもつその鼻と、象牙のやうに白皙な額と、その額の上にそよぐ絹絲のやうな捲毛との持主を羅馬の街々が見かけるやうになつたのはつい最近のことである。彼はこの羅馬へ十五年ぶりで歸つて來たのである。——まだ程遠からぬそのかみの頑是ない稚な子とは打つて變り、ひとかどの青年紳士として彼は歸つて來たのである。

しかし、その經緯を先づ讀者に知つておいて貰はねばならぬから、取り急ぎ、まだ若年でこそあれ、すでに數々の强烈な感銘を豐富に刻みつけてゐる彼の經歷について一通りの考察を試みることにしよう。彼の幼年時代のそもそもの初期はこの羅馬でおくられ、まだ僅かにその餘命を保つてゐる羅馬貴族のあひだに殘存する慣例どほりの教育を受けたのである。彼には家庭教師であれ、養育係であれ、師傅であれ、何でもござれといつた一人の僧侶がついてゐたが、それは、嚴格な古典學者で、ピエトロ・ベンボーの書簡と、della Casa ジョヴンニの著作、それにダンテの詩五六篇の崇拜者であつて、さうしたものを讀む時には、いつもきまつてかう强く叫ぶのであつた。『Dio, che cosa divina！（神よ。これは何たる素晴らしさだ！）』そして、また二行も讀むと、『Diavolo, che divina cosa！（惡魔よ、何たる素晴らしさだ！）』と口走つたものである、彼の藝術に對する批評と評價とは殆んどこれに盡きてゐたのである。彼は何かといへば話の尾をすぐに自分の大好物である花甘藍や食用蔦のことへ持つて行つたが、また犢の肉はいつごろが食ひ頃だとか、仔羊は幾月めぐらゐから食ひ始めたらよいかなどといふことを非常によく知つてをり、往來で他の僧侶仲間に出會つてもさういふ風な無駄口を叩くのが大好きで、また、下に毛絲の靴下をはいた肥つた脹脛を絹の黑い靴下

でつつんでしまふのが大變上手であつて、月に一度はきまつて、olio di ricino（蓖麻子油）といふ藥を珈琲茶碗に一杯つかつてからだを淨め、すべての僧侶と同樣に、日ごと夜ごとにからだを肥らせてゐるのであつた。そもそもの基礎教育がこんな風であつたから、この若い公爵にとつて大して得るところがなかつたのも無理からぬことである。彼が知り得たことといへば、ただ羅典語が伊太利語の父であることと、猊下（モンシニオーレ）には三つの階級があつて、その一つは黑い靴下をはいてをり、もう一つは薄紫のをはいてゐるが、三番目のは樞機官（カルディナーレ）と殆んど同じやうな連中がそれである、といふぐらゐのことに過ぎなかつた。それから、ピエトロ・ベンボーが當時の樞機官に宛てた書簡の幾つかを教はつたが、それは主として賀狀であつた。だが、くだんの師僧とよく散歩をしたコルソーの大通りや、ボルゲーゼの別莊や、それから師僧が紙や羽根ペンや嗅煙草を買ふために立ち寄つた二三の店や、彼が例の olio di ricino（オリーオ・ディ・リチーノ）をいつも購める藥種店のことは大變よく知つてゐた。しかしこの教へ子の識見は決してこの範圍を出でなかつた。國外や異國のことに關しては この僧侶は一種漠然として不明瞭な概貌を仄めかすに留めた——たとへば、佛蘭西といふのは豐饒な國土であるとか、英吉利人は商賣が上手で、好んで海外へ出かけるとか、獨逸人は大酒飲みであるとか、また北方には莫斯科國（モスコウイヤ）といふ野蠻國があつて、そこでは寒氣があまりにきびしいために人間の頭が破裂することさへあるなどといふ類ひであつた。それで、もしこのまま、老公爵

の頭に突然、その舊式な教育法を革めて、わが子に歐羅巴風の教育をほどこして見ようといふ考へが浮ばなかつたならば、この僧侶の教へ子はたとひ二十五歳に達しても、恐らくこれ以上の學識を博めることは出來なかつたに違ひない。老公爵が不意にさうした考へを起すに至つた一半の原因は或る佛蘭西婦人の影響であつたと言ふことが出來る。公爵はその少し前あたりから、あらゆる劇場や園遊會の席上で、自分の顎を白い大きな襟飾（ジャボー）にうづめながら、鬘の黑い捲毛をなほしなほし、絶えず柄附眼鏡をその婦人に向けはじめてゐたのである。そこでこの若い公爵はルッカ*の大學へ送られて、そこに在留した六年のあひだに、それまでは例の師僧の退屈な監督の下に眠りつづけてゐた彼の潑剌たる伊太利魂がぐんぐんと伸展したのである。この青年は洗練された快樂を貪る魂と、洞察力の强い意志の持主であつた。學問といふものが未だに煩瑣哲學の型にはまつたまま、ずるずるに曳きずられてゐるやうな伊太利の大學は、既にアルプスの峯ごしに生きた學問の暗示を時をり耳にしてゐる新時代の青年をもはや滿足させなかつた。上部伊太利地方では佛蘭西の影響がやうやく顯著になりはじめてゐた。それは流行や、書物の駒繪や、一幕物の喜劇や、奇矯激越ではあるが、ところどころに天才的な閃めきの仄見える、放恣な佛蘭西音樂の張りきつた諸作品などと共に、澎湃として押し寄せてゐたのである。七月革命以來ジャーナリズムのうへに現はれた烈しい政治的活動が、この地にも反響を呼びおこしてゐた。人々は沒落せる伊太利

の國威回復を胸に描き、激憤のいろを面に現はして、墺太利兵の忌はしい白服を睨みつけた。しかし、穏やかな悦樂を好む伊太利人の天性は、あの佛蘭西人なら少しの躊躇もしない叛亂となつて爆發するといふやうなことは決してなかつた。ただアルプスの彼方なる本當の歐羅巴へ行つてみたいといふ罷みがたい願望となつてすべてが終つてゐた。絶えざる彼の地の動きと輝やきとが遠くからさし招くやうに明滅してゐた。そこには斬新な事物があつた、伊太利の老廢とは對蹠的なものがあつた。——そこには既に十九世紀が根をおろして、歐羅巴的な生活がはじまつてゐた。冒險と社交界の匂ひにあこがれながら、若い公爵のこころはひたぶるに歐羅巴の空へ飛んでゐたが、その希望はたうてい達すべくもないと思ふ度ごとに、彼はいつも重苦しい悲哀に心をとざされるのであつた。それは、老公爵の剛直一途な專横ぶりが彼にはよくわかつてゐて、自分には到底それに調子をあはせてゆくだけの力がなかつたからである。——ところが、その父から不意に手紙が來て、それには彼に巴里へ留學を命ずるから、そちらの大學の課程を無事修了したならば彼を巴里へ同伴する筈の叔父をルッカで待ち受けよといふ趣意が認めてあつた。若い公爵は欣喜雀躍しながら、友達といふ友達を片つぱしから接吻してまはり、一同を郊外の料亭へ招待したが、はやくも二週間の後には、あらゆる物象を悦ばしい感激をもつて迎へんとしながら、あこがれの巴里をさして旅だつてゐた。シムプロン*の峠を越えると共に彼の頭を、すでに自分はアルプスの

彼方なる歐羅巴に來たのだ！　といふ快よい思ひがさつと通りすぎた。瑞西の山々の重疊と折りかさなつて、少しも眺望を許さず、和やかな遠景をもたぬ峨峨たる醜貌は、あの伊太利の、いやが上にも穏やかな、人を甘やかすやうな自然美に馴れてゐる彼の眼にはいささかいかつい感じを與へた。けれど、歐羅巴の市々や、壯麗明美なホテルや、あらゆる旅客に家庭的（アットホーム）な氣分を抱かせるために整へられた諸設備などを目（ま）のあたり見るに及んで、彼は急に明るい氣持になつた。粹にも見える清淨さと、ピカピカ光る光澤——何から何まで彼には目新らしかつた。獨逸の市々では均整美を缺いた獨逸人の奇妙なからだつきが聊か彼を驚ろかせたが、さうした審美眼は既に伊太利人には先天的に具はつてゐるのである。また獨逸語も彼の音樂的な耳には思ひがけなく不快な響きを傳へた。けれど、彼の眼前にはすでに佛蘭西の國境が横たはつてゐた。彼の胸はぞくぞく震へた。歐羅巴の流行語の輕快な音聲が、愛撫するやうにやさしく彼の耳朶に觸れた。彼はひそかな滿足をもつて、その音聲の滑らかなささやきに耳を傾けるのであつた。それは、まだ伊太利にゐる頃から彼には何となく崇高なものに思はれて、己れの振舞ひの限度さへ知らぬ南方の民のいかつい國語には附きものの、あの發作的な、ぎごちない身振り手振りなどとは、緣もゆかりもないもののやうな氣がしてゐたのであつた。しかし、更に強い印象を彼に與へたのは、あの身輕に跳びまはつてゐる特殊な女たちであつた。柔かい曲線をほのかに匂はせつつ、小さい足で、ほ

つそりとしてさも輕やかな姿態を運びながら、燃えるやうな瞳で眴ぜに答へ、殆んど聲には出さぬ微かな言葉をかけておいて、すいと身をかはしてゆく女に彼は驚異の眼をみはつた。彼は待ちどほい氣持で巴里を待ちながら、その塔や宮殿を胸に描き、市の姿を心のうちで勝手に想像してゐたが、いよいよ首都も間近になつた證據に、貼りつけられた廣告だの、物凄く大きな文字だの、次第に數をまして來た驛遞馬車や乘合馬車だのを眼にした時、彼の胸はそぞろに戰のいた……やがて、郊外の家並も駈け寄つて來た。かくしてつひに彼は巴里に到着して、この都の巨大な外貌にそこはかとなく身を委せながら、街路の人ごみや、そのきらびやかさ、ごたごたした家の屋根や、林立した煙突、まるで建築學を無視して櫛比せる家並や、身動きも出來ないほど小切れをやたらに積みあげた切地屋の店、剝きだしのまま、何の蔽ひも施してない側壁の不體裁さ、壁から窓、屋根から煙突にまで出しやばつてゐる無數な金文字のごつた返し、鏡硝子だけで出來てゐるやうな一階の明るい見透し――かういつたものに惘然として見とれたのである。これこそ巴里である――永遠に鳴動する噴火口であり、斬新なるものや、文明や、流行や、洗練された趣味や、また微細なことではありながら、而もそれを非難するもの自身すらそれから離脱することの出來ない、力づよい法則――さういつたものの火花を絶えず噴きあげてゐる噴泉でもあるのだ。それは、あらゆる技能や藝術や、歐羅巴の何處か、見る影もない片隅にかくれてゐる天才の產み出す

一切のものの陳列場であり、二十代の青年にとつては心のおののきとあこがれの的であり、全歐羅巴の交易場であり、定期市でもあるのだ！　茫然自失したまま、彼は街頭を歩いて行つたが、そこに充ちあふれてゐる夥しい人波の中を織るやうにして乘合馬車が走つてゐた。まだ話に聞いたこともない豪華な裝飾に照り輝やいてゐる珈琲店の外觀に度膽をぬかしたり、有名な有蓋路にあふれる殆んど若人たちばかりからなる數千の雜沓の轟々たる跫音に耳を聾されたり、硝子天井から歩廊の中へ落ちる日光にきらきらと輝やく商店の反射に眼をくらまされたり、また到るところに無數に貼りめぐらされてゐて、絶えず眼につく廣告ビラのまへにも足をとめたが、それらは四六時中の芝居の出しものや、數かぎりない、あらゆる音樂會を大々的に紹介してゐるのであつた。が、最後に、やがて夕闇せまる頃、かうしたすべての夢幻的な集團が幻想的な瓦斯の光りをうけて、パッと輝やき初めた時、彼はまつたく面喰つてしまつた――家といふ家が下から赫つと強く輝やいて、店の窓や硝子は殘らず消えてなくなり、店の中にある程の商品といふ商品が鏡の底に反射して光りながら、まるで街路の眞中へそのままおいてけぼりを喰つてゐるやうに見えるのであつた。『Ma queste una cosa divina！（素晴らしいぞ！）』かう潑剌たるこの伊太利人は何度も繰りかへした。

かくして彼の生活は、多くの巴里人や、巴里にやつて來る大多數の若い異國人のそれと同じや

うに、潑剌として流れて行つた。朝の九時ごろ、床をはなれると、もう彼は硝子をはめた當世風の壁畫や金色燦然たる天井のある、豪壯な珈琲店の一隅にをさまつてゐた。そこには厖大な新聞雜誌が備へつけてあり、豪奢な銀製の珈琲壺を捧げた上品な給仕が客の間をすりぬけながら右往左往してゐた。そこで彼は、彈機(はね)の具合のいい、快適な長椅子に深々と身を沈めて、奢侈逸樂をたのしみながら、大型の珈琲茶碗から味の濃厚な珈琲をすするのであつたが、それと同時に、あの天井の低い、薄暗い、伊太利の珈琲店と、ろくに洗つてもない硝子のコップを運んで來る薄ぎたない給仕のことを想ひだすのであつた。それから彼は徐ろに厖大な雜誌をとりあげて讀みにかかつたものであるが、またしてもあの他愛もない政治記事や、十年一日の如くテルモピレ*の戰ひと波斯皇帝ダリウス*の逸話ばかり載せてゐる、Diario di Roma(ディアリイロ ディ ローマ)(羅馬日誌)とか、il pirato(イル ピラート)(海賊)といふ類ひの貧弱な伊太利の小雜誌を想ひ浮べるのであつた。それに反して、こちらの雜誌には、どこを開いてみても實にきびきびした記事が盛られてゐた。質疑に對するに質疑を以つてし、反駁に酬ゆるに反駁を以つてしながら――何れもが全精力を打ちこんで堂々の論陣を張つてゐるやうに見え、或るものは近く社會情勢が根柢から覆る惧れがあるといつて、國家の崩壞を豫言してをり、また各省各官房内に起るどんなささやかな動きも與黨間の大運動と化して、それが雜誌のうへに必死の叫びとなつて現はれてゐるのであつた。伊太利青年はさうした記事を讀みながら、明日に

も革命が勃發するのではないかといふ畏れをさへ感じながら、茫然として讀書室を出て行くのであつたが、ひとり巴里の華やかな街々のみが一瞬にして彼の頭からその重々しい氣分を吹き拂つてくれるのであつた。さうした重苦しい讀書のあとで、あの巴里にみなぎるきらびやかな輝やきと華やかな動きを眺めると、さながら深い溪谷にまつはる爽やかな花々を見るやうな心地がして忽ち彼は他の連中と同じやうに、何ものにもこだはらぬ、暢氣な街上の人になりきることが出來るのであつた。彼は、やうやく青春(はる)をむかへたばかりの明快な女賣子の前にぼんやり歩みをとめるのであつた。さうした女賣子は巴里の到るところの店に滿ちあふれてゐて、いかつい男の姿などはまるで無疵な硝子についた黑い汚點(しみ)のやうに目ざはりであつた。彼は今しも、さも蠱惑的にさまざまな石鹼で磨きあげられたらしい、いかにも粹でなよらかな手が、白魚のやうに輝やきながら菓子の紙袋を折りかへしてゐる樣に見とれてゐたが、その隙(ひま)にも女の眼は道行く人々の上に明るく凝つと注がれてゐるのであつた。また別の場所では、明るい金髮の頭が、まるで繪のやうな美しい傾斜をみせて描き出されながら、その長い睫毛を流行小說の頁の上へおとしてゐたが、もう自分のまはりに一群の若い男たちが集まつて、そのたをやかな雪を欺く頸筋や、その髮の毛の一筋々々に見入つたり、讀書のために引きおこされる彼女の胸のときめきにまで聽耳をたててゐるのには、いつかう氣がつかない樣子であつた。彼はまた書店の前でもぼんやり足をとめた――

そこには、白い模造紙の上にまるで蜘蛛のやうに眞黑な扉繪が奔放自在な筆致で描かれてゐたが、どうかすると一體それは何を描いたのかさつぱり見當がつかず、また奇妙な書體の文字はまるで象形文字のやうに見えた。彼はまた、店幅いつぱいにひろがつた一つの機械が、窓硝子のむかふ側で大きな圓筒(シリンドル)を廻しながらチョコレートをねつてゐる前にも足をとめた。また、巴里育ちの鰐どもが兩手をポケットにつつこみ、口をあんぐり開けたまま、幾時間でも油を賣つてゐる店さき——大きな伊勢海老が青物のあひだに眞赤な色をあざやかに見せてゐたり、松露の詰めものをした七面鳥が、《300fr.》と簡單に記した正札をつけて、高々とぶらさがつてゐたり、硝子の容器の中には黄や赤の魚が金色の鰭や尾をチラチラと動かしてゐる——店さきでも、ぼんやり歩みをとめた。彼はまた、建てこんだ巴里の全市を王者のやうに貫通してゐる廣々とした並木路の一角にぼんやり立ちどまりもした。そこには六階だての建物と同じ高さの樹木が市中に聳えてをり、その下のアスファルトの鋪道には、外來の觀光客の群れや、いはゆる土地つ子の獅子や虎どもといつた、小說などでは必らずしも的確な表現を與へられてゐると言へない手合が、うようよしてゐるのであつた。かうして彼は思ふ存分、暢氣にほつつきまはつた擧句、もうずつと前から瓦斯の光りを受けて煌々と輝やき渡つた鏡張りの壁に、大廣間ぢゆうに散在する小さい卓子をてんでに圍んで、べちやべちやと騷がしく喋り立ててゐる無數の男女の姿がうつつてゐる料理店(レストラン)へと入つ

て行くのであつた。晩餐をすますと、今度は劇場をさして急ぎながら、さてどれにしたものかと、彼はひたすら選擇に迷つたものである——實際、どの劇場にもそれぞれ有名な出しものがかかつてをり、それぞれ得意な作者と座つき俳優を控へてゐて、到るところに目新らしい劇が上演されてゐた。そこには潑剌として、まるで佛蘭西人自身のやうに輕佻な小喜劇(ヴォードヴィル)がやんやと喝采を博してをり、而も毎日、新らしい番組にかはつて、僅か三分間くらゐの暇に一幕がをはるけれど、際限もない役者の氣まぐれな道化で徹頭徹尾、見物に腹の皮をよらせるのであつた。そこにはまた情熱的な芝居もかかつてゐた。——ここで彼は又しても思はず、あの誰でも暗誦(そら)でおぼえてゐるやうな、相も變らぬ*ゴリドーニの古くさい脚本か、さもなければ、子供でもすぐに飽きてしまふやうな、他愛もない新作の喜劇より他には上演されることのない、貧弱で味氣ない伊太利劇壇を回顧して、その見る影もない一群をば、ひたすら新鮮味の失せることをのみ懼れて、人氣の冷めぬうち冷めぬうちにと新作を上演することにのみ腐心してゐる當地の生氣潑剌たる、めまぐるしいやうな演劇の氾濫と比べあはせてみるのであつた。さて、思ひきり腹の皮をより、心ゆくまで感動し、存分に見飽きると、それから受けたさまざまな感銘にすつかり壓倒されて、ぐつたり疲れはてた彼は宿へ戻るなり寢臺の上へごろりと身を投げるのであつたが、寢臺といへば、知つての通り、佛蘭西人にとつては己れの部屋で必要な唯一無二の道具であつた——といふのは、彼等

は書齋の代りにも、食事を攝るのにも、夜の燈火を得るのにも、いつさい公開の場所を利用するからである。とはいへ公爵は、かうしたさまざまな氣散じを己れの魂が性急に求めてゐる智能の啓發に結びつけることを忘れなかつた。彼はあらゆる著名な教授連の講義を熱心に聽講した。その生氣にあふれた動もすれば熱狂的な講演や、辯舌さわやかな教授たちによつて指摘される新らしい論證なり新生面なりが、この若い伊太利青年にとつてはひたすら驚異そのものであつた。彼は自分の眼から目隱しが除かれて行くやうな心持を覺え、前にはいつかう注意もしなかつた事象が、まるで別な、はつきりした相をとつて自分の眼前によみがへり、また、自から獲得しておきながら、大部分の人間がそれを何ら適用することなしに滅ぼし勝ちであるそこばくの些々たる知識までが呼び醒されて、今はまつたく別個の眼で眺められ、永久に彼の記憶のなかに確固たる認識として刻みつけられて行くのを感じた。彼はまた同じく、有名な傳道者や、政論家や、議會の討論辯士や、また巴里が以つて全歐羅巴に騷然たる反響を傳へてゐる、あらゆる論客を只の一人も聽きのがさなかつた。老公爵から送られる生活費は、公爵としての彼に對してではなく、學生としての彼に當てがはれたものであつたから、必らずしも十二分に餘裕があるといふ譯ではなかつたけれど、それでも彼は巧みに機會を捉へて、よく方々へ出かけたり、歐羅巴の諸新聞が相呼應して喧傳に努めてゐるやうな諸名士に接近したり、當時の流行作家たちにさへ親しく面接する

ことが出來たほどである——さうした作家たちも、他のもろもろの事物と同じく、その奇想天外な作品によつて燃えやすい彼の若い魂に感激をあたへてゐたから、彼等からもやはり、これまでまだ聽かれなかつた琴線のひびきや、まだこれまで捉へられなかつた情熱の曲節を聽かせてもらふことが出來るやうに思はれたのである。一口に言へば、この伊太利青年の日常生活はひろく多方面な形態をとつて、全歐羅巴的な活動のあらゆる巨大な光輝につつまれてゐたのである。同じ一日のうちに、一時に經驗する、暢氣な散策と不安な精神的覺醒、輕い眼のはたらきと頭腦の緊張、劇場の小喜劇と教會の傳道師、新聞雜誌や諸官衙に於ける政治的紛亂、講堂内の拍手、音樂學校管絃樂團の耳を劈くやうな演奏、踊り狂ふ舞臺面の窈窕たる華やかさ、街上生活の喧騷——二十五歳の青年にとつて、これはまた何たる厖大豐富な生活であらう！　まつたくこの巴里ほど素晴らしい土地はない。彼はこの生活を何ものにも見かへようとはしなかつたであらう。路を歩きながらも何かしら高所へ引きあげられてゆくやうな心持になり、自分が偉大なる國際的社會の一員であることの自覺される、この歐羅巴の核心に住むことは、何といふ愉しさ悦ばしさであらう！　彼の頭には、伊太利のことなどは全く拒否してしまひたいやうな考へすら渦卷いてゐたほどで、今や彼には祖國が、あらゆる活動と生命の火を搔き消してしまつた、妙に薄暗い、黴のはえたやうな、歐羅巴の片田舎としか思はれなかつたのである。

かうして彼の生涯における赫々たる四年の歳月は流れて行つた――その四年はこの若者にとつて餘りにも意味深長な歳月ではあつたが、しかしその末期に於いては、はやくも多くのものが初期のそれとは全く趣きを異にしたものとして彼の眼に映じてゐた。彼は多くのものに幻滅を感じたのである。恒に異邦人どもを己れの懐ろへひきつけてゐる、あの巴里が、あの巴里人の永遠の情熱が、もはや彼の眼には、以前にさう考へてゐたのとは著しく異つたものとして映り出したのである。彼は自分の生活が如何に多方面に亘つてゐても、どのやうに活動的であつても、つまるところは何らの歸結にも達せず、有益な精神的成果を齎らすこともなく、空しく消え去つてしまふことに氣がついたのである。今や彼は己れの絶え間なき熱中と活躍の中に怖るべき無爲を發見し、行動に代つて嚴めしく君臨する空虛な言葉を發見したのである。彼はどうやらすべての佛蘭西人が、むやみに熱狂した頭だけで動いてゐるらしいことに氣がついたのである――あの厖大な厚みの雜誌に眼をとほすだけにまる一日を喰はれてしまつて、實際生活のためには一時間の暇も割り當てることが出來ないこと、また佛蘭西人は猫も杓子も、書物や印刷物の上だけに渦まいてゐる、あの奇態な政治の嵐に培はれて、まだ自己の屬してゐる階級にも没交渉なら、自己の一切の權利なり態度なりについても實際的には何らの認識を持ちもせで、輕々に一黨一派に加擔して、あらゆる利害得失を矢鱈に氣にかけながら、その實、自他の利害關係をよくも辨まへず、闇くも

に他派と對立してゐることに……。それでしまひには、この『政治』といふ言葉がわが伊太利青年にとつてはひどく厭はしいものになつて來たのである。

商業的活動といひ精神的動向といひ、一切合切がひたぶるに新らしいものへ新らしいものへと緊張これ努めてゐるのに彼は氣づいたのである。すべてが互ひに相競うて、たとひ一分間のあひだでも何らかの形において他を凌駕せんことに努力を傾倒してゐた。商人はその全資本を店舗の裝飾にのみ注ぎこみ、その華麗と壯觀によつて顧客をひきつけようとしてゐた。文藝書は挿繪や豪奢な印刷にのみ力をそそいで人氣の挽回をはかり、稗史小說の類ひは前代未聞の情事や、人間性を度外視した畸形變態をもつて讀者を釣ることに憂身をやつしてゐた。つまり、一切のものが、夜の街上で人をつかまへて放さぬあの娼婦と同じやうに、呼びもせぬのに圖々しくつきまとつて自から水を向け、萬事があの煩さく寄りたかる乞食の群れと等しく、互ひに人の前へ高々と自分の手をさしのべてゐるやうに思はれた。他ならぬ學問や、彼がその價値を認めざるを得なかつたあの生氣潑剌たる講演の中にすら、自己を誇示したり、法螺を吹いたり、自家廣告をしようといふ氣色の隨所にひそんでゐることが今や彼には明らかになつた。到るところに絢爛なエピソードはあつても、首尾一貫せるものの堂々として嚴肅なプロセスを發見することは出來なかつた。いづこを見ても、これまで知られずにゐた新事實ばかりを好んで取りあげ、ややもすれば全體の調

和を害ふやうな法外な權威をそれに付與して、ひたすら發見の榮譽を贏ち得んとする努力ばかりが眼についた。結局、向ふ見ずな妄信ばかりあつて、自己の無知に對するつつましい自覺などはどこにも見られないのである——ここで彼はゆくりなくも伊太利の詩人*アルフィエーリが、極めて辛辣な調子で佛蘭西人をこきおろした歌を想ひ浮かべた。

Tutto fanno, nulla sanno,
Tutto sanno, nulla fanno;
Gira volta son Francesi,
Piu gli pesi, men ti danno.

やつてゐながら、何にも知らぬ、
知つてゐながら、何にもしない、
佛蘭西人といふやつは、
面倒なことには知らぬ顏。

彼はすつかり憂鬱なふさぎの蟲に取りつかれてしまつた。どんなに氣分の轉換に努めてみても無駄なら、尊敬してゐる人たちに親炙しようと骨折つても駄目であつた。結局、伊太利魂と佛蘭西氣質とは根本に於いて一致しなかつたのである。なるほど交遊關係に入ることは容易であつたが、佛蘭西人といふ奴はその日のうちにすつかり自分の肚の底までさらけだして見せてしまふため、翌る日にはもう何ひとつその人柄に珍らしいところを殘してもゐなければ、或る一定の深さ以上に問題をその魂に沈潛させることも出來ず、尖鋭な思想を貫徹させることも出來なかつた。しかも伊太利人の感覺は、あまりにも强烈であつたため、さうした輕薄な天性を全面的に許容することが出來なかつたのである。今や彼は、崇敬おく能はざる底の佛蘭西人の精神にすら、一種奇態な空虛を見出した。はては、そのあらゆる輝やかしい特質なり、高潔な熱情なり、騎士的な發奮にも拘らず、國民全體が何かひどく蒼白めた、不完全な、彼等自身の所產にかかる例の小喜劇と同樣なものに思はれて來たのである。そこには莊重、嚴肅な觀念の宿る餘地とては更になく、思想の暗示のみあつて思想そのものはなく、半ば情熱らしいものはあつても、情熱そのものはなく、一切が未完成で、間にあはせで、俄か仕込みである——つまり國民全體があの美しい駒繪ではあつても、巨匠の手になる名畫ではあり得なかつた。

不意に襲つて來た憂鬱が彼に一切のものをこんな風に見るやうにさせたのか、それとも伊太利

人としての生一本な穢れのない感情が抑もの原因であつたのか、それはともあれ、この繁華で賑やかな巴里が忽ち彼にとつては堪へ難い沙漠と化してしまつたため、自然に彼の足は最も邊鄙な市はづれへばかり向くやうになつた。それと今ひとつ伊太利歌劇へだけは出かけて行つた。僅かにそこで自分の魂が安息を得るやうに思はれて、祖國の言葉の響きが今や彼の前にあらゆる偉力と充實をもつてそそり立つたのである。そしてこれまでは忘れ勝ちであつた伊太利の姿が、ともすれば、遠くの方で手招きするやうな光りの中に思ひうかべられ、日ごとに故國の呼聲が大きくなつて來たので、つひに彼は、もはやこれ以上巴里に留まつても詮ないことであるから羅馬へ歸ることを許して頂きたいと、思ひきつて父に手紙を書いたのである。ところが二月たつても彼の許へは何の返事も來なかつたばかりか、もう遠の昔に着いてゐなければならない筈の、いつもの爲替手形すら屆かなかつた。尤も父の斑氣な性質はよく心得てゐたから、最初のあひだは彼も辛抱づよく待つてゐたが、しまひにはひどく心配になつて來た。一週間に何度となく銀行の係りに問合はせてみたけれど、その都度いつも同じやうに羅馬からは何のたよりもないといふ返事しか聞かれなかつた。彼は今や絶望のどん底へ突き落されさうな氣持であつた。生活費がもうとつくに切れてしまつたので、銀行の係りから信用借りをしてゐたけれど、その金もずつと前に使ひ果してしまひ、もうよほど前から彼は、朝夕の食事代も室料も借りにして、かつかつに暮してゐた。

他人がちよいちよい變な流眄で彼を眺めだした——せめて誰か友達からでも便りがあればよいのに、それもなかつた。かうなると、いよいよ痛切に彼は身の孤獨を感じた。不安な期待を抱きながら、彼はもうすつかり鼻についてしまつた市内を的もなくさまよひ歩いた。さなきだに夏の巴里は彼にとつて堪へがたいものであつた。すべての居留民が鑛泉地や、歐羅巴のホテルへと、それぞれ旅に出てしまつた。空虛の幻影が到るところに姿を見せてゐた。巴里の家並や、街々は堪へがたかつた。公園はどれもこれも、太陽に灼きつけられた建物のあひだに挾まつて、氣息奄々として喘いでゐた。打ちのめされたやうになつた彼はセーヌの河畔や、あのどつしりして重苦しい感じのする橋のうへや、蒸暑い河岸どほりに足をとめては、何かに眼をとめて暫らくでも心を紛らはさうと、空しい努力をしたものである。限りもない憂愁が彼を鵜呑みにし、名も知れぬ蛆蟲が彼の心を蝕ばんだ。しかし、運命はつひに彼の上へ惠みを垂れて——ある日、くだんの銀行の係りが彼の手へ一通の手紙を渡してくれた。それは叔父からの來信で、その中には、もはや老公爵がこの世の人ではなくなつたこと、從つて遺產の整理をするために彼に歸國して貰ひたいこと、その遺產がひどく亂脈になつてゐるから是非、彼の立會を必要とすること等が認ためてあつた。なほ手紙の中には小額の小切手が同封してあつたが、それから旅費を差引くと、辛うじて債務の四分の一の支拂ひにしか足りなかつた。しかし、若い公爵は一刻も躊躇したくなかつたので

借金の方は返濟の期限を少し延ばしてくれるやうにと、銀行の係りを兎も角も納得させて、さつそく急行馬車に座席を取つた。巴里の市街が視野から消え失せて、爽々しい原野の空氣が彼の頰をそつと撫でた時、彼は初めてあの怖ろしい心の重荷から解放されたやうに感じた。二晝夜の後すでにマルセーユに到着した彼は、一時間の暇も休まうとしないで、その晩さつそく汽船に乘りこんだ。彼には地中海が肉親のやうに感じられた——この海は祖國の岸を洗つてをり、その果しない波を一目ながめただけで、彼はもう清々した氣持になつたからである。はじめて伊太利の市を見たときの彼の心境を説明することは困難である——それはかの、莊麗なゼノアの市であつた。その市のきらびやかな鐘樓や、白と黑の大理石でだんだら模樣になつてゐる教會堂や、汽船が靜かに埠頭へ横づけになつたとき、不意に四方八方から彼を抱きすくめた、あの塔の澤山ある圓形劇場の全貌が水陸二重の美はしさをもつて彼の面前に聳え立つたのである。彼はこれまで一度もゼノアを見たことがなかつた。あの不思議な空いろに輝やく微妙な大氣の中に家屋や會堂や宮殿が遊び戯れてゐる、目もあやに五彩燦爛たる眺めはたしかに無類なものであつた。上陸すると共に、彼はいつの間にか、ただ上の方に一筋の細い青空の縞が見えてゐるだけの、あの石を敷きつめた、仄暗い、不思議な、狹い通りへ足を踏んごんでゐた。建の高い大きな家と家のあひだに挾まれた街幅の狹さや、馬車の轍の音の少しも聞えないことや、三角の小廣場の數々や、その間を

まるで挾い廊下のやうにうねりくねりながら、ゼノア名物の金細工師や銀細工師の小店をずらりと並べてゐる街筋など、すべてが彼を驚嘆させた。溫かい南東風にひらひらと煽られる、女たちの美しいレースの面紗、彼女たちのしつかりした足どり、通りに響きわたる甲高い話し聲、開けはなしになつた會堂の扉、そこから洩れて來る香の匂ひ——すべてかうしたものが、遠い過去の思出を彼の胸によみがへらせた。彼は不圖、もう久しいあひだ教會へ行かなかつたことを思ひ出した。彼がゐた歐羅巴のあの賢しげな國々では、教會もその清く氣高い意義を失つてゐたのである。彼は靜かに中へ入つて、壯麗な大理石の圓柱の傍らに默々として跪くと、自分でも何のためやら分らないままに、永いこと祈りをささげるのであつた——彼は伊太利が自分を迎へてくれたことや、祈りを捧げる氣持になれたことや、自分の心が晴々してゐることなどを感謝して祈つたのであるが、その祈りは確かに快よいものであつた。つまり、彼は伊太利の最初の接吻をこの市から受けて、素晴らしい宿驛としてゼノアを通過したのである。同じやうに明るい感じをもつて彼はリヴルノを見、さびれ行くピザを見、前からわづかに知つてゐたフローレンスを眺めたのである。どつしりと重々しい感じのする大伽藍の陵角を持つた圓頂閣や、壯麗な建築樣式の、黝んだ宮殿や、そのあまり大きくもない市の嚴然たる威容が堂々たる姿で彼を見おろした。それからやはり同じ明るい氣分で彼はアペニン山脈を越えた。そして遂に六日の行程の後、遙かにくつき

りした地平の彼方から、澄みわたつた大空へ、いみじくも美しき半圓を描きながら一つの圓頂閣が姿をあらはした時——おお！……その時、いくばくの感懷が一時に彼の胸に押し寄せたことであらう！　彼はそれを表現する術もなく、言葉も知らず、あらゆる小丘や傾斜地を飽かず見まはすばかりであつた。はやくも羅馬の市の關門、Ponte Molle があらはれ、ついで美しい廣場 Piazza del Popolo（民衆廣場）が彼を抱擁し、臺地や石段のある Monte Pincio の丘の頂きを逍遥してゐる人の姿や彫像まで見えだした！　ああ、彼の胸は如何ばかり轟ろいたことであらう！　まだ初心で、羅甸語は伊太利語の父であるといふことより他には何も知らなかつたやうなあどけない彼が、嘗て例の師僧と共によく歩いたことのあるコルソーの通りを、今や、彼の乘つた馬車は疾走して行つた。やがて彼が諳記でも憶えてゐる、いろんな建物——宏大な珈琲店のある Palazzo Ruspoli（ルスポリ宮）、Piazza Colonna（コロンナ廣場）、Palazzo Sciarra（スカラ宮）、Palazzo Doria（ドリア宮）等が再び彼の前に姿をあらはすと、つひに彼の乘つた馬車は横町へとまがつた。それはよく外國人から惡口を言はれる、活氣のない横町で、そこではただ疎らに、入口の上に百合の繪をかいた髮理店とか、鍔の廣い樞機官の帽子を扉口からのぞかせた帽子店とか、通りへ持ち出して細工をしてゐる籐椅子屋の店といつたものが眼につくだけであつた。馬車はつひにブラマンテ風の堂々たる邸宅の前に停つた。生地のままで何の飾りもない玄關には誰ひとりゐなかつた。階段のうへ

で彼を迎へたのは例の老いぼれた maestro di casa（執事）であつた。それといふのも、門番はいつものやうに自分の職杖を持つたまま珈琲店へ入りぴたつて終日、暇つぶしをしてゐたからである。老人は急いで鎧扉をあけてまはり、幾つもの古風で壯麗な廣間に次ぎ次ぎと灯りをともした。公爵はうら悲しい氣分にとらへられた——それは誰でも、何年か家鄕を離れてゐた後わが家へ戻つて來た人には憶えのある、あの何から何までがひとしほ古めかしく、ひとしほ空虛に感じられ、少年時代から知つてゐたすべての物象がありし日を悲しく物語る時のあの心持で、そのかみの思ひ出が樂しければ樂しいほど、一層その哀愁は胸を嚙むものである。公爵はずつとつづいてゐる廣間を一つ一つ通り拔けて、まだつい先頃までは、この家の老主が總や定紋のついた蓋帳の下の寢臺で眠つた寢室や、眼ざめると寢衣のまま上靴をつつかけて、肥滿する目的で驢馬の乳を一杯のみほしに入つて來た書齋や、同じ老主が從僕を隨へて、馬車でボルゲエゼの別莊へドライブしながら、やはり同じやうにそこへ散策に來る或る英國婦人にひつきりなく柄附眼鏡を向けに出かける前に、まるで年增の蓮葉女がするやうな丹念な心づかひで身じまひをした化粧室等を見まはした。卓の上や抽匣の中にはまだ紅や白粉や、その他、老人が若返りに用ゐたいろいろの顏料が殘つてゐた。maestro di casa（執事）の語るところでは——父公爵はこの世を去る二週間まへに既に結婚しようといふ固い決意を定め、如何にして con onore i doveri di marito（良人としての正當なる權利）

を確保すべきかについて、外國の博士たちとわざわざ協議を凝らしたほどであるが、ある日、樞機官や、さる修道院長の許など、二三の訪問をすまして、ぐつたり疲れて家へ歸るなり、安樂椅子へ腰をおろしたまま大往生をとげてしまつたとのことである。けれど maestro di casa（執事）の言葉によれば、この父が若しも、その二分間まへに氣がついて、已れの聽悔僧たる il padre Benvenuto（神父ベンヌート）を迎へにやつてゐたならば、更に立派な大往生であつたらうにと言ふのであつた。そんなことには別に注意も拂はず、若い公爵はぼんやりと上の空で耳をかしてゐた。旅と異常な印象に疲れた心身を少し休めると、彼はいよいよ遺産の整理にとりかかつたが、それが恐ろしく亂脈をきはめてゐるのに一驚を喫した。事の大小に拘らず、悉くが手のつけやうもなくこんぐらかつてゐた。フェルララとナポリにある崩れかかつた邸と地所のことでおこされてゐた何時が果てしともつかぬ四つの訴訟事件、向ふ三年間は全く收入の途の杜絶えてゐること、表面豪奢らしく見せてゐながら夥しい借財と火の車のやうな窮乏狀態——さうしたものが彼の眼前にさらけ出されたのである。老公爵の性格には吝嗇と豪奢が不可解な結合をなしてゐた。彼は夥しい僕婢を召抱へてゐたが、それらに對して仕着せ以外には一文の給金も拂はなかつたので、彼等はただ時をり畫廊を參觀に來る外國人の心づけだけに甘んじてゐた。老公爵には獵官や給仕や從僕が附いてゐたが、その從僕の中には、馬車の後ろに乘つてお供をするのと、何處へも連れて行かれずに、終日、近くの珈琲店か酒場に入りぴたつて、くだらぬお喋りに時を過してゐるのとがあつた。若い公爵は早速さうしたやくざな連中や獵官どもを殘らず馘首して、ただ maestro di casa（執事）だけにし、つひぞ使はれずにゐた馬匹は賣り拂つて、厩をほとんど全部とりこはしてしまひ、辯護士を招いて、例の訴訟事件に鳧をつけ、ともかくも四つの事件を二つだけものにしてあとは役に立たぬものとして取りさげてしまひ、萬事緊縮を旨として、嚴重な節約をもつて生計を立てることに心を決めた。だがそれは彼にとつて別段むつかしい問題ではなかつた。といふのは、すでに緊縮生活には前もつて慣れてゐたからである。また同族との一切の交際から手をひくこともさして困難ではなかつた。尤も、同族といつても、たかだか二三、由緒ある家があるばかりで——それは若干、佛蘭西式教育の名殘をとどめてゐる人たちや、いつも自分のぐるりに外國人の一團を集めてゐる富豪の銀行家や、いつも垂れこめて自分の侍僕か、お抱への理髮師を相手に tresette（骨牌戯『馬鹿』の一種）に耽つてゐるが、容易に人を寄せつけない例の樞機官連といつた、無愛想で情の硬い手合であつた。つまり、若い公爵はさうした社會から孤立して、羅馬の觀察に沒頭しはじめたのであるが、この限りに於いて彼はあたかも外國の觀光客のそれに彷彿たる地位に立つた譯である——外國人といへば先づ初めて羅馬へ乘りこんで來ると、その外觀の少しもきらびやかでなく、一向につまらないことや、汚點だらけで、どす黑い建物にすつかり驚ろいてしまひ、

横町から横町へと拔けながら、さも怪訝さうに、『一體どこにあの巨大な古代羅馬があるのだらう？』と疑問をおこすのであるが、やがて、その狹苦しい横町にある黝んだ弓形門や、壁につくりつけた大理石の蛇腹や、雲斑石の黝んだ圓柱や、生臭い魚市場の眞中にある破風や、あまり古くない敎會堂の前に殘つてゐる完全な柱廊玄關のあひだから、少しづつ古代羅馬が顏をのぞけはじめ、さてはずつと離れた、現在の市街のつき果てるところ、千年の劫をへた常春藤や、蘆薈や廣漠たる地平や、厖大なコロセウム*や、郊外のところどころに散在する凱旋門や、皇帝の宏大無邊な宮殿の遺跡や、帝室浴場や、神殿や、陵墓等のあひだから、累々として巨大な姿を現はして來る――すると、この異邦人は、すつかり古への世界に抱きすくめられてしまつて、もはや狹苦しい現代羅馬の街路や横町には眼もくれなくなる。彼の心には巨人のやうな皇帝（シーザー）たちの像（すがた）がまざまざと蘇り、そのかみの群衆のあげる拍手や喝采の音がその耳をつんざくのである……。

しかし彼には、よくある外國人たちのやうにひとりチータス・レヴィアス*やターチッス*にのみ心を打ちこんで、他の凡てを顧みず、ただ古事にのみなづんで、新市街を悉く否定し去る底の高邁な衒學者流（ペダンチスム）の發作に驅られるといふ風なところはなかつた――いな、彼はすべてを同樣に素晴らしいものと感じたのである――薄暗い軒緣の蔭からちらほらと覗く太古の世界、到るところに藝術的巨匠の足跡と羅馬法皇の壯麗豪奢な遺跡をとどめる雄大なる中世紀、さてはそれらのもの

に密接な關係をもちながら新らしい民草に群れ集はれてゐる近代。彼には、それらのものがいみじくも一つに融合してゐる樣が氣に入つた。宮殿、圓柱、雜草、壁にまつはる野生の蔦、下部を塞がれたどす黑い默々たる大建築物のあひだにどよめいてゐる市場、柱廊の傍らに立つて潑剌たる呼聲をあげてゐる魚屋、パンテオン*の前に綠いろのペンキを塗つた吹けば飛びさうな屋臺店を出してゐるレモン水賣り――かういつた年若い首都と廢墟の面影とが、同時に氣に入つたのである。彼にはごたごたして陰氣な街筋の醜貌そのものや、家々に黃いろや明るい色彩のないことや街中に感じられる牧歌氣分が氣に入つた。街の鋪道の上で休息してゐる山羊の群れや、童べたちの喚き聲や、眼には見えねど凡てのものの上に漂つてゐる、明るく、嚴そかな、人を抱きしめるやうな靜寂――かうした羅馬の市街で絕えず不意打ちを喰はされる、思ひもかけぬ突拍子なさが彼には氣に入つたのである。早朝から狩りに出かける獵師のやうに、また冒險を探しもとめて歩く古への騎士のやうに、彼は來る日も來る日も、次ぎ次ぎと新らしい奇蹟を探しに出かけるのであつた。そしてつまらない横町などで不意に、陰氣で嚴然たる威容をもつて息づいてゐる宮殿が眼の前にそそり立つとき、彼は思はず足をとめるのであつた。そのどつしりした堅牢無比な壁は暗色の擬灰岩で積みあげられて、その頂きには見事に仕上げられた巨大な蛇腹がかぶさつてをり、大きな扉のまはりは大理石の枠で圍まれ、窓々は豪華な樣式の裝飾を施こされて、いかめしく下

を見おろしてゐる。——或ひはまた、思ひもかけず、出しぬけに小さい廣場とともに、繪のやうな噴泉が、自身にも水を浴び、苔むしてすつかり形の變つた花崗岩の階段にも飛沫をふりかけながら姿を現はすかと思へば、陰氣な、きたない街路(たほり)の端れで思ひがけなく、*ベルニニ式の戲れるやうに美しい建築的裝飾や、屹立した方尖塔(オベリスク)や、墨繪のやうに黑々とした絲杉の立木と共に紺靑の空に太陽の光りをうけて照りはえる修道院の壁や敎會堂などにぶつかることもある。また街々へ奧深く入りこめば入りこむほど、ブラマンテ、*ボルロミニ、*サンガルロ、*デラポルタ、*ヴィニョーラ、*ボナロッティ等の樣式(スタイル)を持つ宮殿や各種の建築物がいよいよ頻繁に姿を現はした。そこでつひに彼は、建築學といふものが現存して、藝術としてその威觀を示すのは、ただこの國、伊太利を措いて他にないことを今はつきりと悟つたのである。だが、寺院や宮殿の內部へ一歩足を踏みいれた時の彼の心の悅びは更に更に大きかつた。そこには、あらゆる種類の大理石から成る弓形門や、平たい支柱や、圓柱が、玄武岩や天靑石の蛇腹や、雲斑石や、黃金や古代の石材と相錯綜し、練りに練つた工夫に支配されて、渾然たる諧調を保つてをり、而もそれらのすべてより更にすぐれて立ち勝つてゐるのは、かの不滅の壁畫であつた。なるほど工夫に工夫を擬らした大廣間の裝飾はいとも高尙優美で、皇帝の威力と建築の豪奢に充ちあふれてはゐるが、その豪奢も、藝術家といへば同時に建築家でもあり、畫家でもあり、剩さへ彫刻師ですらあつた、あの豐饒な

世紀の壁畫に對しては常に甘んじて一籌を輸するのであつた。もはや現代においては反覆することの出來ない雄渾な名畫が、未だに理解されず模倣を許されぬ筆力をもつて黝んだ壁面から仄ぐらく彼の眼前に押し迫つて來るのであつた。かうしたものの觀照に一層ふかく沒頭するにつれて既に彼の內心にその萌芽を宿してゐた好尙がめきめきと開發して來るのを覺えるのであつた。今やこの壯麗きはまりなき美を前にしては、十九世紀の華麗さなどは如何にもけちくさく、あれはたかだか店頭を飾るだけにしか役立たぬ俗惡低級な、いはば鍍金師や、家具工や、經師屋や、指物師等、十把一絡げの職人の活動分野に屬して、ラファエルやチチアンやミケランジェロの世界とは凡そ緣の遠い、藝術を卑しい職業に引きさげた、實に卑俗なものにしか見えなかつたのである！　永久に滅びることなき繪畫をもつて壁面を飾るといふ、この莊嚴な思想に對する時——また、邸宅の所有者が、仕事の合間々々に騷々しい俗塵を避け、すべてから遠ざかつて、ただ獨りあの片隅なる古風な長椅子に腰をおろして、じつと視線をそそぎながら、まなこと共に精神を深くその靈筆の神祕の底に沒入させ、人間の精神的意圖の美しさに心眼をもつて見入らんがためにその愉樂の恒久的な對象を獲得せんとした、この美しい思想にくらべて、あの最初の一目だけは俗眼を驚ろかせもするが、間もなく無關心に見すごされてしまふやうな、當世風な華麗さなどは彼にとつては如何にも卑しいものにしか見えなかつたのである！　蓋し、藝術とは、人間の精神

活動に氣品と微妙な美しさを添へながら、人間を高く押しあげて行くものだからである。この精神を啓發し進歩せしめる對象をもつて人間を圍繞する確乎不拔にして豐饒なる豪壯美に對する時現代の取るに足らぬ裝飾的美術などは、如何にも俗惡なものとして彼の眼に映じたのである。それは奇怪な、譯のわからぬ十九世紀の所產になる落つきのない流行といふものによつて年々歲々打ち壞され、拋棄されて行くのであるが、しかもあらゆる偉大なるもの、莊重なるもの、神聖なるものの破壞者なる、この流行の前に、多くの學者や賢人が默々として拜跪してゐるではないか。かう考へて來ると、自然に彼の頭にはこんな考へが浮かぶのであつた——今世紀をつつんでゐるこの冷淡なよそよそしさや、商略的なさもしい打算や、まだ開發することも、いな發生することもなし得ない感情の早發性痴呆ともいふべき症狀は、なるほどその原因をここに發してゐるのではなからうか？　神殿の中から本尊が持ち出されてしまつて——もはや神殿が神殿ではなくなりその中には蝙蝠や惡靈が巢くうてゐるのである。

つらつらと眺むれば眺むるほど、この中世紀の稀有な豐饒さにいよいよ驚ろかされて、彼は思はず、かう感嘆の叫びを洩らすのであつた。『そもそも何時どうして、この夥しいものが作りあげられたのであらうか？』と。かうした羅馬の持つ素晴らしい一面が、恰かも彼の眼前に日ごとに增大して行く觀があつた。畫廊また畫廊と——それには果てしがなかつた。こちらの寺院の中

に某の靈筆が跡を留めてをれば、あちらの古色蒼然たる壁のうへには、今にも消滅しさうな壁畫が尙も人の眼を驚ろかせてゐる。また、太古の異敎の神殿から蒐められて、高く聳え立つた大理石や支柱の上には、未だに色褪せぬ天井畫が輝やいてゐる。何れもかうしたものは、さながら平凡な地下に埋沒されてゐながら、鑛夫以外には知る者のない金鑛に彷彿たるものがあつた。いつもわが家へ立ち歸る度ごとに、彼の精神が如何に滿たされてゐたことだらう！　この靜寂の嚴そかな平和につつまれた感情と、巴里にゐた頃、ぐつたりと疲れ果てて宿へ戻る度ごとに無闇に彼の心を一杯にして、その總勘定をする元氣すら殆んど彼に與へなかつた、あの不安な印象とは何といふ大きな距たりであらうか！

今や彼には、羅馬のかうした內在的な寶物と、かくまで外國人から嘲罵される醜く黝んで汚れた羅馬の外觀とが、いよいよぴつたりと調和して來るやうに思はれるのであつた。さうと知つてからは、彼にはもう、あのけばけばしい店舗や粹な行人や馬車の充滿した當世風な街頭へなど足踏するのが不愉快で堪らなかつたのは當然で、それは何かかう佚樂的な冒瀆のやうに感じられたからに違ひない。彼には何より往還のつつましやかな靜けさが、羅馬市民の特異な表情が、そしてあの、三角帽をかぶり、黑の靴下に黑の半靴をはいた黑裝束の僧侶や、車軸と車輪と蛇腹と定紋とに金鍍金を施こした古風な樞機官の緋色の馬車などによつて未だに街頭にその面影をとどめ

てゐる十八世紀の幻影が氣に入つたのである——これら一切のものが何かかう羅馬の重厚さとびつたりしてゐるのであつた。半マントを羽織つたり、短上衣を肩に投げかけたりして街々を繪のやうに靜々と漫ろ歩きしてゐる悠揚として生氣にあふれた國民の顏には、あの巴里の青いブルーズや、すべての市民が彼を困惑させたやうな重くるしい表情が少しも見られなかつた。ここでは乞食たちまでが何やら明朗な容子をして、いかにも暢氣さうで、心の惱みや涙などにはいつかう緣がなささうに、無頓着らしく優美に手をさしのべてゐる。白か黑の長い衣をまとつて街りを歩いてゆく修道僧の繪のやうな行列。日向へ出ると不意に明るい駱駝いろに照りはえる薄ぎたなく赤茶けたカプシン僧。さては、世界のあらゆる方面から集まつてゐる美術修業の人々——彼等はここでは歐羅巴風の窮屈な襤褸服をかなぐりすてて、ゆつたりした繪畫的な衣裳をつけてゐるが、あの佛蘭西人が一月に五度も形を變へたり、刈りこんだりする不態で小つぽけな頤鬚とは似ても似つかぬ、レオナルド・ダ・ヴィンチやチチアンの肖像畫からとつて來たやうな、威風堂々たる頤鬚をたくはへてゐる。また畫家たちは波うつた長髮に美を感じて、長い縮れ毛を房々と垂らしてゐる。ここでは、あの脚まがりの、からだにしまりのない獨逸人ですら、金髮の捲毛を肩に散らばして、褶の輕やかな希臘風の寬衣か、またはあの、羅馬の美術家だけにぴつたり身につくcinquecento（チンクエチエント）（五百の意）といふ名で通つてゐる例の天鵞絨服に威儀を正して、ひどく勿體らしく納ま

つてゐるのである。彼等の顏にはおごそかな沈着の色と平和な勞作の跡とが反映してゐる。街頭や、珈琲店や、料亭などで耳にする會話や巷說にしても、あの歐羅巴の都市で彼が耳にしたそれとは似ても似つかぬ全然對蹠的なものであつた。ここでは公債の下落とか、議會の論爭とか、西班牙問題とかに關する風評は聞かれず、聞かれるのは近ごろ發見された古代彫刻や、偉大なる巨匠の筆になる名畫の價値についての議論で、また新進畫家の出品作についての兎角の批評が喧傳されたり、國民的祭日の噂さが取り沙汰されたりして、最後には人間性を剝き出しにした內輪話が飛び出して來るのであるが、かうしたものは歐羅巴では退屈な社會的論議や政治的意見といつた、衷心からの表情を隱したもののために除け者あつかひにされてゐるのである。

彼はよく市街を離れて、その近郊を見に出かけたが、さういふ折にはまた別の奇蹟が彼の心を打つた。古代の神殿の遺跡が散在し、言ひ知れぬ靜けさをもつて四方にひろがつてゐる、この物いはぬ羅馬の荒廢せる原野は實に美しかつた。そこには黃一色に融けあつた花々が黃金を敷きつめたやうに燃え立ち、眞紅の野罌粟の花が、灼熱した炭火のやうに赫々と輝やいてゐた。この原野は四つの方角にそれぞれ一つづつの美しい景觀を展開してゐた。まづ一方を望むと——野は眞直に、くつきりした直線となつて地平線につながつてをり、水道の拱弧が宙に浮いて、燦然たる銀の空に貼りつけられたもののやうに見えてゐる。次ぎに、今一方の方角を眺めると——今度

は、原野の上に山々が輝やいてゐる。しかし、それはあの瑞西やチロルの山々のやうに峻嶮峨峨たる聳え方ではなしに、なだらかに浮動するやうな曲線をなして起伏しながら、妙なる空氣の清澄さに照らし出されて、まさに天空へ沒し去らんとしてゐるが、その麓に長い礎石を敷きつめたやうな水道のアーケードが蜒蜿とつらなつてゐるので、山の頂きがさながら素晴らしい建物の空中に浮かんだ樓閣のやうに見え、大空もその上ではもはや銀いろではなくて、春の紫丁香花（むらさきはしどい）のやうな、何とも形容の出來ない色調を呈してゐる。更に眼を第三の方角へ轉じると――原野はやはり山脈を頂いてゐるが、それはぐつと身近く、高々と聳え立つて、前面の褶は強く浮き出し、後方の褶は輕やかな段階をなして遠のいてゐる。仄かにうす青い大氣は微妙な色調の濃淡を山々に添へ、そのふんはりとした空いろのベールを通して、辛うじてそれと認められるフラスカーチの家々や別莊が光つてゐるが、中には微かに陽光を受けてゐるのもあり、また中には遙かに煙つてやうやくそれらしく見える林の明るい靄の中に姿を沒し去らんとしてゐるのもある。最後に彼が急に後ろをふりかへると、今度は第四の景觀が展開して、野原は羅馬の市街によつて遮られてゐる。家々の角や線や、圓頂閣のまるみや、ラトラン宮の聖ヨアンの彫像がくつきりとして輝やき聖ピエトロ寺院の莊嚴な圓頂閣は、そこから遠く距たれば距たるほど、いよいよ高く聳え立つてつひには羅馬の全市がすつかり隱れてしまつてからも、それだけはひとり地平線上に泰然として

姿をとどめるのである。更に彼は日沒の頃ほひフラスカーチやアルバノあたりの別莊の露臺から平野を俯瞰するのが好きであつた。その際この平野は、輝やきながら露臺の黑い欄干の蔭から磊りあがつた涯しない海のやうに思はれ、斜面や線は光りに呑まれて消え去るのである。初めのあひだは、それらは尙いくぶん綠いろを帶びて、あちこちに散在する陵墓やアーチもまだそれと認められるが、やがて古代の遺跡の影を僅かに示しながら、光りの虹いろの中の明るい黃に染まり、つひにはだんだんと紫紅色に變つて、あの巨大な圓頂閣をも丸呑みにして、ただ濃い茜の一色に融けあひ、ひとり遙か彼方に輝やく黃金いろの海の縞のみが、同じく深紅の地平から平野を區切るのである。彼は未だかつて空と同じやうに平野が焰と化すのを見たことは一度もなかつた。彼は永いあひだ、名狀しがたい感激に打たれて、その景觀の前に立ちつくしたものである。程へてやがてその感激が去つてからも、彼はやはり、じつと一切を忘れて佇んでゐた。太陽がすつかり沒し去ると、地平線は逸はやく翳（かげ）り、黃昏れた野原は更に速く、見る見る暗くなつて、到るところに夕べがその暗影を落して行くのである。すると、ぴかぴか光る螢（ほたる）子の群れが、まるで火の粉の噴水のやうに廢墟の上に舞ひあがる――この翼のある不思議な昆蟲は、惡魔といふ異名で知られてゐるが、まるで人間のやうに直立して翔びながら、彼の眼さきへ無闇にぶつかつて來る――やうやくこの時になつて、忍びよる南國の夜の冷氣が身うちに浸みわたつて來るのを感じた彼は

かの南方に特有な熱病にかかることを恐れて、急いで市内へひきあげるのであつた。

このやうに彼の生活は自然と藝術と古代を觀察する中に流れて行つた。かうした生活に於いて彼は、いつ如何なる時よりも一層つよく、伊太利の歴史をより深く研究してみたいといふ衝動に驅られた――これまでの彼は、挿話や斷片によつて僅かにそれを知つてゐたにすぎなかつたから。この歴史の研究なくしては、眞實を十分に把握することが出來ないやうに思はれて、彼は貪るやうに古事記や年代記や記錄の類ひを渉獵しはじめたのである。今や彼はそれらのものを、あの外(そと)へ出ぎらひの伊太利人がよくするやうに、讀んでゐる事柄に身も心も打ちこんでしまつて、己れを圍繞する人物や事件の混亂のために全體の動きを觀察するゆとりもないのとは全然趣きを異にした讀み方をすることが出來た――今や彼は恰かもヴチカン宮殿の窓からでも見渡すやうに、すべてを平靜に眺めることが出來た。彼が祖國を離れて、現に活躍しつつある國家や國民の喧騒と進展とを眼のあたり見て來たことが彼のあらゆる推理に對して嚴格な檢證として役立ち、彼の觀察眼に多面性と抱擁性とを附與した。いまや彼は多く讀めば讀むほど、それと共にますます公平に伊太利の過去の世紀の威容と光輝に驚ろかされるのであつた。このやうな狹隘な地球の一角において、あのやうな強烈な力の活動によつて、かくも速かに人文が多樣な發展を遂げたといふことは確かに驚歎に値した。彼は曾てこの地で人類が盛んに奔騰したことや、一つ一つの市がめいめい

の言葉を使つてゐたことや、どの市にもそれぞれ浩瀚な歴史の存在したことや、市民權と統治の全形態が一擧にしてここに發生したことを會得した。不屈の強い性格をもちながら動搖してゐた共和國と、その間にあつて覇權を握つてゐた專制君主たち。執政官の權力が唯一のやうに見えながらその實、隱れた政府の絡繰(からくり)によつて縛られた、王者のやうな商人階級の市。招聘されて土著民のあひだに介在した異邦人たち。取るにも足らぬ小都市の内部における烈しい壓迫と反撥。猫額の地に於ける王族や君主の、殆んど童話的な威光。多くのメッエナート*や、擁護者や、迫害者たち。同時代に輩出した一列の偉人傑士たち。立琴(リラ)とコンパスと劍とパレット。罵詈と動亂のただ中に建立された數々の神殿。敵愾心、血みどろな復讐、寛容な特性、政治的、社會的旋風のさ中における私生活のさまざまなロマンチックな出來事と、その間の微妙なつながり――公私の生活全般にわたる、かくも驚ろくべき發露と、他の國々では廣範圍にわたつて僅かに部分的にしか完成されなかつた、あらゆる人間的要素の、この狹い地域に於ける素晴らしい覺醒！――しかもそれらのすべてが一瞬にして終熄して、冷めた熔岩のやうに冷えきつてしまひ、あたかも古くなつて何の役にも立たぬ廢物(がらくた)のやうに、歐羅巴から忘れ去られてしまつたのである。政治的意義を失ひ、それと同時に世界への影響力を失つた哀れな伊太利は、もはや何處へも、雜誌の中へすら、その王冠を褫(は)がれた額をのぞけようとはしなくなつたのである。

（もはや二度と彼女の榮光の甦へる日はないのだらうか？　もはや過ぎし日の伊太利の光輝を回復する手段はないのだらうか？）かう彼は考へてみた。そして、ふと、まだルッカの大學にゐた頃、過去の伊太利の光榮の復興について夢想したことを想ひ起した。それは若者にとつて如何にも懷かしい夢であつた。酒杯を手にしながら正直一途な眞心からどんなに彼等がそのことを夢想したであらう。今にして彼は、その青年時代の無知と、國民を無關心と懶惰の故に非難する政治家たちの見解の皮相さ加減を知ることが出來たのである。彼は擾亂しながら今、ある『偉大なる指』の存在を感得するのであつた――それに對する時、人間はまつたく身の自由を失ひ、唯々として平伏するより他はない――その『偉大なる指』が天上から全世界の動行を指揮してゐるのである。その『指』に呼ばれて逆境から身を起した、かの哀れなるゼノア*の一市民が、未だ世に知られざりし新大陸と、廣々とした航路を全世界に指し示したがために、その祖國ゼノアは衰亡に歸したけれど、世界の地平は押しひろげられて、歐羅巴は目覺ましい活動をはじめ、諸の船舶は强力な風伯を動員して世界中を馳せまはつた。それと共に地中海は空しく寂れはて、置き去りにされた伊太利は、恰かも水深の淺くなつた河床のやうに、その使命を失つてしまつたのである。ヴェニスの市は火の消えたやうな宮殿の影をアドリア海の波に映しながら、首うなだれたゴンドラの船頭が荒れはてた壁や、崩れかかつて物いはぬ大理石の露臺の欄干の下へ異邦人を誘ひゆく

時、引き裂くやうな哀愁をその胸に滲みこませる。フェルララの町も寂れはてて、今はただ、その領主館の荒涼たる物凄さで人を脅やかすばかりである。傾斜せる塔や建築上の諸名作が、已れに情なき時世に身を曝しつつ、さびしげに伊太利の全土を眺めてゐる。曾ては喧騒をきはめた街街に今は木靈のみ空しく響きわたり、見窄らしい辻馬車がそのかみの壯麗な邸宅のなれの果てなる穢くるしい料亭へと乘りこんでゆく。伊太利は今や乞食の纏ふやうな粗布に身をくるみ、どす黑く色褪せた豪奢な衣裳のきれはしを、埃りにまみれた襤褸の如くぶらさげてゐるのである。

哀惜の情に胸せまつて彼は危く落涙するところであつた。しかし、それを慰めるやうに一つの素晴らしい思想が自づと彼の心に湧きあがつて來た。彼は一段と高い、別個の感性をもつて、伊太利はまだ決して死滅したのではなく、彼女の全世界に對する嚴として破り難い久遠の支配權は存續して、彼女の上には永久に偉大なる叡智が立ち罩めてゐるのだと感じた。その叡智が、そもそもの初めから彼女の胸に歐羅巴の運命を結びつけてゐたのである。それは歐羅巴の暗澹たる森林の中へ十字架を持ちこんだり、その僻遠の地で豪猪のやうな人間に公民としての鍬を打ちこんだりする一方、この伊太利を先づ最初に全世界を市場とする商業や、巧妙な政治や、公民的原動力の合成をもつて沸き立たせ、次いで、あらゆる智性の閃めきとなつて自から立ち、已が額を聖なる詩の冠で飾り、やがて伊太利の政治的勢力がやうやく下火となるや、美術といふ莊嚴な奇蹟

の花を世に咲かせて、それまでは人間の魂の奥底に祕められたまま發露しなかつた未知の悦びや神々しい感情を人々に賦與したのである。その美術の世紀が去つて、人々が打算にのみ沒頭して美術に對する情熱を失つた時、今度はそれが咆哮するやうな音樂の響きとなつて世界に傳播された。セーヌや、ネワや、テムズや、モスクワの河畔にも、地中海や、黑海の沿岸にも、アルジェリアの城壁の中にも、またついこの頃まで未開の地であつた遠隔の離れ小島にまでも、朗々たる歌ひ手たちにおくる熱狂的な拍手の音がとどろきわたつたのである。ところが今はそれが、古色蒼然たる廢墟の姿で全世界に君臨してゐるのであつて、この莊嚴なる建築の華は、あの歐羅巴の持つ、けちくさい支那趣味の華麗さや、兒戲に等しい支離滅裂な思想を非難するための幻影として存在するのである。またこの素晴らしい過去の世界の集成そのものも、またそれが永遠に花咲く自然と結合しての魅力も――すべてが世界を覺醒せしめて、『北方』の住民の胸に時々、あたかも夢のやうにこの『南方』の姿が浮かびあがり、その幻想によつて、ともすれば魂を硬化させる勞作に捧げられた冷たい生活の渦中から彼等を救はんがために――遠く心を誘なふ展望や、月明の夜のコロセウムや、美しく死に瀕しつつあるヴェニスや、眼に見えぬ天來の輝きや、得もいはれぬ空氣の溫かい接吻となつて不意に彼等の心に閃めき、落莫たる生活から彼等を救はんがために存在してゐるのである――縱ひ一生に一度でも彼等を眞人間たらしめんがために……。

彼はかうした嚴肅な瞬間には祖國の荒廢を諦めることも出來れば、同時に永遠の『創造者』によつて絕えずこの世に準備されてゐる、よりよき未來、卽ち永遠の生命の萌芽を一切のものの中に見ることも出來た。また、さういふ瞬間に彼はともすれば、羅馬人の今日に於ける使命にまで思ひを及ぼすのであつた。そして羅馬人のあひだに、まだ手をつけないで殘されてゐる素材を發見したのである。彼等は伊太利の光輝ある繁榮時代にも何らの役割をもつとめず、歷史の頁の上にも法王や貴族の名前こそ留められてゐるが、市民に關しては何ひとつ記載されてゐないのである。彼等の內外を席卷した利害の步みも彼等を置き去りにし、敎育も彼等には何ら關はるところなく、彼等のうちに潛める力を旋風として捲きあげたことは一度もなかつた。彼等の本性の中には何かしら子供らしい氣高さがあつた。市の一部には已れを古へのクヰリート*の後裔だと考へて決して局外者と婚姻を結ばぬ者のあるほど、羅馬といふ名前に對する高い誇り、その明朗な天性を示す、あの人の好さと情熱とのまじり合つた特質、(羅馬人は決して善と惡とを混同しない。彼等は善人でなければ、惡人であり、浪費者でなければ守錢奴である。彼等のもつ善惡はまつたく本然の相のままで、すこしも混りけがなく、かの敎養ある人々が利己主義に唆かされて少しづついろんな煩惱を取りまぜて漠然たる態度を持してゐるのとは同一に談ずべくもない)あの放恣な性質、ありたけの金を湯水のやうに使はねば氣のすまぬ熱情、强い國民らしい慣習――これらは

皆それぞれ、彼等にとつて重要性を持つてゐた。今ではかうした明るい、僞りのない朗らかさは他國民には見られず、どこの國へ行つてみても、ひたすら國民を樂しませようと大童になつてゐる觀があるが、こちらではそれとは反對に、國民が自から樂しんでをり、自から發起者たらんとしてゐる。謝肉祭のをりなどに彼等を引きとめておくことは、たうてい不可能で、一年ぢゆうに貯へた金をこの一週間半ばかりのあひだに殘らず使ひはたしてしまふのである——彼等は全部の金を衣裳ひとつにかけて、道化役者だの、女だの、詩人だの、醫者だの、伯爵だのに假裝し、人が聽かうが聽くまいが、そんなことには頓とお構ひなしに、くだらない減らず口を叩いたり、講釋をしたりする——その陽氣なはしやぎが、まるで旋風のやうに、分別ざかりの四十男から腕白少年に至るまで、一同をとりこにしてしまふのである。著けて出る衣裳もない文なしの素寒貧になると、不斷着の上衣を裏がへしに着こみ、墨を顏にぬたくつて、同じやうにあの目もあやなる人混みの中へ飛びこんでゆくのである。而もかうした陽氣さも畢竟、彼等の天性から來てゐるのであつて、決して一杯機嫌のさせる業ではない。だから、この同じ人間が街路で醉漢に出つ喰はしでもすると、さつそく口笛を吹いて彌次りとばすのである。次ぎに、その生れながらの藝術的本能と感覺の特性である——彼はよく、無學な女が畫家にむかつてその繪の缺點を指摘してゐるのを見かけた。また、その感覺が美術的な衣裳や會堂内の裝飾などに自然に現はれてゐるのを見

た。チェンサノの祭りには人々が街路を花の毛氈で飾つた。色とりどりの花瓣が顏料となり陰影となつて、鋪道の上にさまざまな模樣や、樞機官の定紋や、法王の似顏や、組合せ文字や、鳥や獸や、唐草模樣などが現出するのであつた。復活祭の前夜には食料品を商なつてゐる連中、つまりピッィカローレたちが、てんでに店を飾り立てる——鹽豚や腸詰や白い膀胱やレモンや木の葉などが、モザイクとなり、天井畫を形づくつてゐるかと思へば、パルマ產、その他の乾酪の球が、だんだん積みあげられて圓柱になつてゐる。内側の壁に掛けられたモザイク模樣のカーテンの總が脂蠟燭から出來てゐるかと思へば、雪のやうに白い牛脂では、基督教やバイブルから主題を取つた歷史的場面を現はす一連の群像がつくられてゐて、その出來ばえに驚嘆した見物たちは、てつきりそれが雪花石膏で出來てゐるものと思ひこむのである——店ぢゆうがきらびやかな神殿に變り、鍍金の星がチカチカと輝やき、あちこちに吊られた裝飾燈で巧みに照明が施されて、無數の鷄卵の堆が鏡に反射してゐる。萬事かうしたことには豐かな趣味の持ち合せが必要であるが、食料品商たちがこんなことをするのも、何ら利益を目的としてではなく、他人の眼を娛ませ且つ己が眼を娛ませんがために他ならないのである。最後に、人々の胸に息づいてゐる特殊な尊嚴の情である——ここでは、彼等は歷乎とした ニ popolo (國民)であつて、斷じて賤民ではなく、その資質の中にそもそも、初期のクヰリート時代の溢觴を保持してゐて、あの安逸を貪ぼる國民を往々に

して墮落させる外國の遊覽客——彼等のために酒樓や街道筋に最も賤しむべき階級の人間がうようとはびこり、ともすれば旅行者はこれらの人間より推して全國民を律しがちであるが——さうした遊覽客も斷じて國民の尊嚴を犯すことは出來ないのである。また不合理きはまる政府の法令や、いつ如何なる時代にも、あとからあとから發布されて、今日に至つても容易に廢棄されぬばかりか、古い羅馬共和政時代の布告までがその中に殘つてゐようといふ、あの辻褄のあはぬ法規の山も、この國民の胸奥にひそむ高邁な正義の感情を滅ぼすことは出來ないのである。彼等は不當な强制者には容赦なく非難の聲を浴びせ、死者の棺に對しても愚弄を辭さないが、さりとて國民に愛慕された人の屍を運ぶ靈柩車には唯々として繫がれるのである。ややもすれば挑發的で他國でなら風敎をみだす惧れある僧侶階級のいかがはしい行狀にしても、こちらでは國民に殆んど何の影響も及ぼさない。彼等には僞善の遂行者と宗敎とをはつきり區別することが出來るため冷たい無信仰な思想に感染するやうなことがないのである。最後に、停滯せる國家には免れ難い窮乏と貧困も、彼等はいつも朗らかにすべてを堪へ忍んでゐるから、街頭に於ける刃傷沙汰などに至つては、あれはただ稗史小說に出て來るだけに過ぎないのである。さて如上のすべての事實が、まだこの先きに何か或る活舞臺を約束されてゐるところの、手つかずの、力强い國民的要素を彼に暗示したのである。歐羅巴文明は、まるで故意とのやうに羅馬人の前を素通りしてしまつ

365633

て、その冷たい完成を彼等の胸底におほしたてなかつたのである。過去の世紀の遺物として完全に殘存してゐる、あの不思議な幻影、法王廳そのものまでが、恰かも羅馬人を他國の勢力から護つて、野心滿々たる隣邦をして羅馬人の個性を犯さしめないがために、また時節の到來するまでその誇りかな國民性を平靜に匿まつておくがために殘つてゐるかの觀があつた。のみならず、この羅馬では、滅亡せし或るものの氣配を聞くことも出來なかつた。羅馬の廢墟や壯麗な困窮の中には、生きながら滅亡しつつある民族の記念碑を眺める時おのづから人の心を領する、あの胸をつんざくやうな痛ましい感じが少しもなかつた。ここで感じられるのは、それとはまるで反對な氣持で、晴々とした嚴そかな靜寂である。公爵はかう考へる度ごとに、いつも知らず知らず深い物思ひに沈んで、かの『永遠の羅馬』なる言葉には何か神祕な意義があるのではないかと怪しみはじめるのであつた。

かうしたすべての總決算として、彼はいよいよ深く自國民の本質をつきとめようと努力しはじめたのである。彼は街々の珈琲店を軒別にまはつて、羅馬人の後をつけまはしたが、さうした店店には各々その常連がやつて來てゐた。一つの店にはいつも古物商がとぐろを捲いてをり、第二の店には射手と獵師が、第三の店には樞機官の從僕たちが、第四の店には美術家たちが、第五の店には羅馬の青年たちや羅馬の伊達者たちが陣どつてゐた。彼はまた料亭にも——外國人などの

立ち入らぬ純羅馬式の料亭にも、彼等の後をつけて行つた。そこには羅馬の nobile（貴族）が時にはミネンチの男娼と並んで坐つてゐることもあるが、この連中は暑い日には上衣もネクタイもかなぐりすててしまふのである。また郊外の繪畫的に見窄らしい小料理店へも彼等をつけて行つたが、そこには硝子戸をはめぬ吹きとほしの窓がついてゐて、家族づれや、仲間同士の羅馬人たちが午餐をしたためたり、また彼等の言ひ草のやうに far allegria（いい氣持になりに）に集まつて來てゐるのであつた。彼は一同と共に坐つて食事をしたため、談話へも進んで加はりながら、目に一丁字なき單純な町人の話の素朴な常識と潑剌たる獨創性に屢ば一驚を喫したものである。しかし、彼等を知るのに最も都合のいいのは、儀式や祭禮のをりで、さういふ時には羅馬のあらゆる住民が表面へ浮かびあがり、つひぞこれまでは思ひもかけず、わづかに薄肉彫か古代の詞華詩集のなかにその容姿を留めてゐるに過ぎないやうな素晴らしい美女が數かぎりなく姿を現はすのである。あのぱつちりした眼差や、雪花石膏のやうな肩、頭の上へ束ねあげたり、後ろへ押しさげたりして黄金の笄をさした、さまざまな形の漆黒の髪、兩の手、誇りかな歩調——そのどれもこれもが莊重な古典的な美の特徴と閃めきであつて、單に愛嬌のいい女のもつ輕い魅力とは凡そ違つてゐる。ここの女たちは、あたかも伊太利の建築物と同じく、宮殿でなければ陋屋であり、美女でなければ醜女であつて、その中間に位する、ちよつと小綺麗だといふやうなのは見當らない。彼は

かうした女たちを見て心に悦びを覺えた。それは美しい詩作の中で、一際すぐれた一句に出會つて、魂に爽々しい戦慄を感じる時の悦びに等しかつた。

しかし、間もなくこの悦びは、他のすべてに對して烈しい闘ひを宣言する一つの感情とむすびついた——その感情が一段と高い靈の獨裁に對して自由主義的な謀叛をおこす、あの烈しい人間的な情熱を心の底から呼びさましたのである。彼はアンヌンツャータを見初めたのである。かくして今や、われわれはやうやく、この物語の冒頭を照らしたところの、あの輝やかしい麗容に辿りついたのである。

をりしも謝肉祭のさなかであつた。『今日、わたくしはコルソーへは出かけますまい。』と、maestro di casa（執事）が出がけに主人に向つて言つた。『わたくしはもう、謝肉祭なんぞ飽き飽きいたしました。まだしも夏祭か儀式のやうなものなら我慢も出來まするけれど……。』

「したが、あれが謝肉祭でござりませうか？」さう老人はつづけて言つた。「あれは子供だましの謝肉祭でござりますよ。手前のおぼえてをりまする謝肉祭は、まだあのコルソーの通りに一臺の馬車もなかつた頃のことでしてな、夜つぴて街々には音樂が轟ろきわたりまして、畫家ぢやの、建築師ぢやの、彫刻家ぢやのが、いや、さまざまな由緒いはれのある假裝を思ひつきをりましたわい。そして民衆がな——（公爵にはその意味がよく分かつた）——もうみんなの民衆がな、

いや、まつたく猫も杓子も、鍍金師でござれ、額縁屋でござれ、寄木細工師でござれ、素晴らしい別嬪でござれ、どんな夫人方でござれ、nobili（貴族）でござれ、みんながみんな、まつたく猫も杓子も……O quanta allegria！（何と浮かれたことでござわせう！）それこそほんとに謝肉祭らしい謝肉祭でございましたわい！　したが、今どきの謝肉祭と來た日には、ありや何の眞似でござりますやら！　ちえつ！……」さう言つて老人は肩をすぼめたが、もう一度『ちえつ！』と舌うちをして肩をすぼめてから、吐き出すやうに、『E una porcheria！（まつたく、恥ざらしですわい！）』と言つた。それから、ma estro di casa（執事）は、さも感慨無量さうに、いつになく烈しい手振をして見せたものであるが、いつの間にか、もう彼の前に公爵の姿が見えなくなつてゐるのに氣がつくと、遽かに默つてしまつた。公爵はもうその時分には街頭へ飛び出してしまつてゐた。彼は謝肉祭に參加するつもりではなかつたので、假面も、顏にかける金網も用意せず、無雜作にマントの裾を肩へ投げかけたまま、市内の別の方角をめざして、コルソーの通りを横ぎらうとしてゐたのである。しかし、人出があまりにぎつしり混んでゐたため、彼が辛うじて二人の人間のあひだへ割りこんだばかりのところで、もう上から彼にぱつと打粉*がかけられて、けばけばしい服裝をした道化役者が相手の女道化と共にすつと脇をすり抜けながら、がらがらで彼の肩を一つぶつた。『コンフェッティ*』や花束がやたらに彼の顏へ飛んで來た。兩脇から彼の耳もとへ何か騷々しい音が聞えだした。それ

は、一方からは伯爵が、一方からは醫者が擦りよつて、その醫者が自分の胃の腑の中には何が入つてゐるかといふことを長々と講釋してゐるのであつた。もはや彼等のあひだから脫出するだけの力もなかつた。といふのは、人の波がひつきりなしに增して來て、馬車の列も今は行進することが出來ず立往生をしてしまつたほどであつたからだ。ちやうどその時、群衆の注意は、家の高さほどもある竹馬に乘つて、今にも足をふみはづして、鋪道の上へぺしやんこに叩きつけられはせぬかと、見る者をはらはらさせてゐる一人の向不見の方へ向けられてゐた。しかし、そんなことには當人はいつかう平氣らしい樣子であつた。彼は張子の巨人を肩に擔いでゐたが、それには十四行詩を書いて、凧の尾のやうな紙の尻尾をくつつけた紙がぶらさがつてゐた。その男は大聲を張りあげて、かう喚き立ててゐた――『Ecco il gran poeta morto！ Ecco il suo sonetto colla coda！（これは死せる大詩人だ！　茲に彼のものせる尻尾を持つた十四行詩がある！）』*と。この向不見の後ろには大變な人だかりが出來てしまつたため、公爵は息も碌々つけない有樣であつた。やがて群衆がその死せる詩人の後について前進しはじめると、馬車の列も徐々に動きだした。すると彼は、人波にもまれて帽子を振り落されながらも、すつかり嬉しくなつてしまひ、急いで帽子を拾ひに飛び出したものである。彼は帽子を拾ひあげると同時に眼をあげたが、思はずその場に立ち竦んでしまつた。彼の面前に一人の稀世の美人がただずんでゐたからである。彼女は目もあやなアルバノ風の衣裳をつけて、二

人の女と並んでゐた。その女たちもやはり美人ではあつたが、彼女に比べては、まるで月と鼈(すつぽん)ほどのちがひがあつた。それは誠に類ひまれなる絶世の佳人であつた。その輝やきを前にしては如何なるものも影をひそめたことであらう。彼女を眺めてゐると、自づから伊太利の詩人たちが美人を太陽にたとへる理由がはつきりわかつて來る。これこそ眞(まこと)に太陽であり、まぎれもなく美の極致であつた！　世界ぢゆうの美人たちのあひだに、ばらばらに分れて、一つ一つ光つてゐるところのものが、殘らずここに集合してゐたのである。彼女の胸もとと上半身を一瞥すれば、他の美人の胸なり上半身なりに缺けてゐるのが何であるかが一目瞭然に分つた。彼女の濃い艶やかな髪を前にしては、他の如何なる髪も、疎(うす)い貧弱なものにしか見えなかつた。また、彼女の手は見る人を悉く美術家に變へてしまふやうな美しい手であつたから、誰もが畫家のやうに、息をするのも忘れて、その手を永久に見つめてゐたことであらう。また彼女の足と比べたならば、英吉利女や、獨逸女や、佛蘭西女や、その他あらゆる國々の女の足などは、まるで木片(こつぱ)も同然のものにしか見えなかつたであらう。ただ獨り古代の彫刻師のみが、彼女の足の美の崇高な觀念をその彫像の中に留めてゐるばかりである。實際これこそは、萬人を等しく眩惑させるために創られたところの美の極致であつた。何人もここでは或る特別の好尚を持つ必要は全然なかつた。ここではあらゆる趣味好尚が合致し、萬人が平身低頭しなければならなかつた。さながら忽然として出

現した神性を仰ぎ見るが如く、信ずるものも信ぜざるものも等くしこの美の前には平伏(ひれふ)したことであらう。公爵はそこにゐる限りの群衆がすべて彼女に見惚れ、女たちは女たちで、その顏に思はず喜悅を混へた驚異の色をあらはして、『O bella！(オー ベーラ まあ綺麗だことよ！)』と、しきりに繰りかへしてゐるのを見た。そこにゐるほどの者が、誰も彼も殘らず、畫家に變つてしまつたものの如く、じつと彼女ひとりを見つめてゐた。しかし、その美女の顏にはただ謝肉祭に對する關心が現はれてゐるだけで、彼女自身の方へそそがれてゐる無數の視線には注意も拂はず、自分の後ろに佇んでゐる多分いつしよにやつて來た緣者のものに違ひない、天鵞絨の上衣をつけた男たちに懂かに耳をかしながら、ひたすら群衆の波と、さまざまな假面を眺めてゐるのであつた。公爵は傍らに立つてゐる人々に向つて、一體あの素晴らしい美人は何者で、どこからやつて來たのかと訊ねてみたが、誰も彼もみな同じやうに一種の身振をして肩をすぼめながら、『知りませんねえ、きつと外國女(よそもの)でせう。』と答へるだけであつた。身動き一つせず、ぐつと息を殺したまま、公爵は貪るやうにその美女を見つめた。やがて彼女はぱつちりしたその眼(まなこ)を公爵に向けたが、遽かに狼狽して視線を外らしてしまつた。その時ひとつの叫び聲が彼を呼び醒ました。見れば、彼の眼のまへには巨大な一臺の馬車がとまつてゐる。それに乘つてゐた、薔薇いろの寬衣(ブルーズ)をつけた假面の群れが彼の名を呼んで、『よう、よう、よう！……』といふ一つの長たらしい喚き聲をあげながら、一齊に彼を

めがけて打粉を振りかけはじめた。彼は忽ち、頭の天邊から足の爪先まで白い粉だらけにされてしまひ、ぐるりを取りまいてゐた連中から、どつとばかりに哄笑を買つた。全身、雪達磨のやうに眞白になり、睫毛まで白く染められた公爵は這々の體で、着物をきかへるためにわが家をさして駈け出した。

彼が邸へ駈けつけて、やうやく着換をしただけの隙に、Ave Maria の鐘まであと一時間半ぐらゐの時刻になつてゐた。コルソーからは空の馬車が續々と歸つて行きつつあつた。それに乘つて來た連中は露臺へ乘り移つて、まだ、あとからあとから押しよせて來る人の波を眺めながら、駈馬のはじまるのを待つてゐた。コルソーの通りへ出る曲り角のところで彼は一臺の馬車に出會つたが、それには短衣を着た男たちと共に、きらびやかな女たちが、頭に花の冠をいただき、手にチンパノ*やタンバリンを持つて、ぎつしり乘りこんでゐた。その馬車は今や賑々しく歸途についてゐるところらしく、兩脇に花輪を飾り、車輪の輻と輪緣には、綠の小枝が捲きつけてあつた。その馬車に乘つてゐた女たちのあひだに、さきほど自分を驚嘆させた例の美人が坐つてゐるのを發見した時、公爵の心臟はぎくりと震へた。彼女の顏は輝やくやうな微笑に照り映えてゐた。馬車は嬌聲や歌ひ聲を撒きちらしながら一散に疾走して行つた。公爵は逸はやくその跡を追つて駈け出さうとしたけれど、ちやうどその時、音樂者たちの途轍もなく大きな行列が彼の行手を塞いで

しまつたのである。彼等は六つの車輪をつけた物凄く巨大なヴァイオリンを引つ張つて行くところであつた。一人の男が絃の上へ馬乘りに跨がつてをり、もう一人の男が片脇をてくてく歩きながら、弦の代りに張られた四本の綱を、すばらしく大きな弓でこすつてゐるのであつた。恐らくこのヴァイオリンは莫大な勞力と費用と時間とを要したものに違ひない。先頭に立つて、これも亦すばらしく大きな太鼓が行進してゐた。民衆や腕白どもの群れがこの音樂者の行列の後ろから犇々と押しよせて來たが、その殿には肥滿漢として羅馬ぢゆうに知れわたつてゐる食料品商が鐘樓の高さほどもあらうかと思はれる灌腸器を擔いでやつて來た。やうやくこの行列が通りすぎてしまつた頃には、くだんの美人の乘つてゐた馬車の跡など、今更おつかけてもはじまらないし第一もう遲いと公爵は思つた。のみならず、一體あの馬車はどの路を疾走し去つたのか、それが皆目わからなかつた。それでも、あの美人の在所をつきとめようといふ考へは、どうしても諦らめることが出來なかつた。彼の空想の中を、あの輝やかしい微笑と、美しい齒並を見せて解けかかつたあの脣とがぐるぐると旋回した。『あれはきつと女ではなく、電光の閃めきだつたのだ！』さう彼は何度も繰りかへしてひとりごちたが、それと同時に誇らしげにかうつけ加へるのであつた。『あれこそ生粹の羅馬女だ。あんな女の生れるのは、この羅馬より他にはない筈だ。おれは是が非でもあの女に會はねばならない。おれがあの女に會ひたいのは、別にあの女を手に入れる

ためではない――そんな下心があるのではなく、ただあの女をしげしげと見たいだけだ、あの女を隈なく觀察したいだけだ、あの女の眼が、あの女の手が、あの女の指が、あの女の艶やかな髪の毛が見たいだけのことだ。接吻などしなくても、おれはただあの女を眺めることが出來さへすれば澤山なのだ。だつてさうではないか？　それが當然で、自然の法則にも適つてゐるのだ。自然には己れの美をかくしたり、それをどこかへ持ち去つたりする權利はないのだ。完全な美といふものは、萬人にそれを見せて、永遠に美の觀念を人々の胸底にとどめしめんがために世におくられた賜物なのだ。もし、あの女がただの美人といふだけで、あれほど素晴らしい美の完成を示してさへゐなければ、彼女は一人の男のものになることも出來、その男も彼女を世間の眼から遠ざけるために沙漠の果てへ連れて行かうとどうしようと勝手であるが、完全な美といふものは萬人の眼につき易くしておかなければならないのだ。建築師にしてからが、壯麗な殿堂を果して狹くるしい横町などに建てるだらうか？　否、彼はそれをあらゆる方角から人に見せて感心させるために廣々とした大廣場に建てるに違ひない。神の子もかう說いてゐるではないか――燭臺といふものは卓の下へかくしておくために灯されるものであらうか？　否々、燭臺は卓の上に据ゑられて、人々の眼につきやすく、且つその明りによつて人皆が起居をするために灯されるものであると。いや、おれは是が非でもあの女に會はなければならない。』　公爵はこんな風に判斷すると、

それから長いあひだ、どうしてその目的を達したものかと、ありとあらゆる手段について仔細に熟慮を重ねてゐたが、そのうちにどうやら一つの方策に肚がきまつたらしく、彼はさつそく、何の猶豫もせずに、羅馬にはざらにある邊鄙な裏街の一つをさして出かけたのである――それはあの楕圓形をした木の楯に色とりどりな定紋を描いたのが揭げてある樞機官の邸などといふものは一軒もなくて、狹くるしい荒ら家の窓や扉口の上にめいめい番號がついてをり、まるで瘤のやうに凸凹した鋪石道がずつとつづいてゐようといつた場末で、その邊へ足踏みをする外國人とては更になく、せいぜい姿を見せるのは、三脚と繪具箱をかかへた、通りすがりの獨逸人の繪かきかさもなければ羊群からおいてけぼりを喰らつた山羊が、『へつ、何といふ街だ、つひぞこんなのにはお眼にかかつたことがないぞ。』　と言はぬばかりに呆れ顏で立ちどまるくらゐが關の山である。またこの邊ではいつも、あの騷々しい羅馬女の喋り聲ががんがんと響いてゐて――四方八方の窓といふ窓から言葉のやりとりや、談議の節々が入り亂れて飛んで來るのだ。ここでは何もかもが明けつぱなしで、往來を通つてゐる人々にあらゆる家庭内の祕密がすつかり晒け出されてゐるのだ。そればかりか、母親と娘ですら、まるで二人きりの差向ひと同つに、てんでに街路へ顏を突きだして内輪ごとを話しあつてゐるのだ。ここでは男の姿はあまり眼につかない。朝まだきやうやく戸外が明るくなりかかると、もうスザンナの女房が窓をあけて、ぬつと顏を出す。する

と今度は別の窓から、グラーツィヤの女房がスカートを穿かうとしてゐるのが見える。それについでナンナの女房が束ね髪を櫛で梳きながら半身を乗り出す。最後にチェチリヤの女房が窓からぐつと手を伸ばして、張り渡した綱に懸けてある下著を、やつとの思ひで掴むと、それがさつそく自分の手にとどかなかつた腹癪に、いきなり揉みくちやにして、床へ叩きつけて、その上『che bestia！（ケ ベスティア えええ、忌忌しい！）』と口汚なく罵るのだ。ここでは一切萬事が潑剌として沸きかへつてゐる——腕白小僧が姿を見せたり、搖籃へ近よつた山羊が當歳の赤ん坊のにほひを嗅ぐついでに首をうつむけてちよつと角の威力を示さうとでもしようものなら、いきなり窓から、今まで穿いてゐた半靴が投げつけられるのだ。ここでは何ひとつ人に知られない事實といふものがなく、一事が萬事、あからさまであつた。女房連は何から何まで、例へばヂェヂッタの女房がどんな冠布（プラトク）を買つたとか、誰それのうちでは晝飯のおかづが魚らしいとか、バルバルーチヤの情夫が誰だとか、どのカプシン僧に懺悔をするのが一番いいとか、そんな風なことを一から十まで知り拔いてゐた。ところが、亭主の方はごく稀（まれ）にしか口を出さず、短かい煙管をくはへながら壁に片肘ついて、たいてい街路（おもて）に立つてゐるが、カプシン僧の噂を小耳にはさみでもすると、きまつて、『みんな山師どもさ！』と、義務のやうに一こと應酬しておいて、それからまた再び、つづけざまに自分の鼻の先きへパッパと煙りを吐き出しにかかるのであつた。ここへは箱馬車などといふものの

入つて來る例しは更になく、ただわづかに、騾馬に曳かせて麵麭屋へ麥粉を運搬する、ガタガタの二輪馬車が一臺と、腕白どもから鈍感な脇腹へやたらに礫を見舞はれて、追ひたて急きたてされながら、花甘藍の入つた背負籠を、よろよろと、やつとの思ひで運んで來る、睡さうな眼をした驢馬の姿を見かけるくらゐが關の山である。またここには、硝子壜などと一緒に麵麭や細引のやうなものを賣つてゐる貧弱な小店と、街の片隅にある狹くるしい陰氣な珈琲店のほかには、商店と名のつくほどのものは一軒もなく、その珈琲店からはアウロラといふ名前でとほつてゐる給仕が、山羊の乳でいれた珈琲かココアを賦力製の小さな珈琲壺に入れて、いつも町内の女房連のところへ出前に持つて行くのが眼についた。また、この邊の家作といふ奴が變で、各々の家に家主が二人から三人、時には四人もついてゐて、その中の一人だけに終身所有權があり、第二の家主はただ一つ一つの階を所有して、二年間だけそこからあがる利益を享受する權利を持つてゐるが、その期限がきれると、遺言によつて、その階は向ふ十年間、彼の手から padre Vincenzo（パドレ ヴィンチェンツオ 神父）の手へ移ることになつてゐる。ところが、今度はその手から、それをフラスカーチあたりに住んでゐる、前の居住者の親類かなんかが、うまく横取りしようと思つて、もう前以つて訴訟をもくろんでゐるのである。また、或る家の窓ひとつだけとか、別の家の窓ふたつだけの所有權を握つてゐたり、一つの窓からはいる所得を、兄弟で半々に分けあつてゐるといつた風な連

中もあるが、だらしのない借主のこととて、窓料なんて碌に拂ひつこないのだ――かういふのがつまり、あとからあとからと果てしもない訴訟沙汰の對象となつて、羅馬にはざらにある辯護士や Curiale（クリアーレ）（三百代言）の食ひものにされてゐる譯である。先ほど言及したばかりの女房（かみさん）連はといへば歴乎とした名前で呼ばれてゐる一流どころの者から、侮蔑的な名前で呼ばれてゐる二流どころのテッタだの、トッツタだの、ナンナだのといつた手合に至るまで、どれもこれも同じやうに、皆その大部分が何ひとつ手に職を持つてゐなかつた。彼女たちはそれぞれ、辯護士や、下級官吏や小商人や、運搬夫や、赤帽といつた連中の細君であつたが、一番おほいのは何といつても、あの一向に見ばえのせぬマントを小綺麗に着こなすことだけ上手な遊び人の女房であつた。

細君連の多くは畫家のモデルにやとはれてゐた。ここには、どんなモデルでも好み次第のがあつた。それで懐ろさへ温かければ、彼女らは亭主をお供に大勢づれで料理屋などへ出かけて面白をかしく時を過すが、金がなくても――いつかう淋しさうでもなく、暢氣に窓から外を眺めてゐるのである。それはさて、今この街は何時になくひつそりとしてゐた。といふのも、女たちの誰彼がコルソーの通りへ、辮髪に加はつてそめきに行つてゐたからである。公爵は一軒のかなり慘めな家の古色蒼然たる扉口へ、つと立ちよつた。その扉にはやたらに孔があいてゐたので、この家の主人（あるじ）ですら、その孔へ一々鍵を突つこんで長いこと手間どらないことには本當の鍵穴が見つ

からないといつた代物であつた。公爵が將に扉の環に手を掛けようとした時、ふと、『あの公爵樣はペッペ爺さんに會ひたいんだらうか？』といふ聲が耳に入つた。彼は顔をあげて上を見た。すると、三階の窓からトッツタの女房（かみさん）が、からだを乗り出すやうにして見おろしてゐた。

「まあ、そんな大きな聲を出して！」と、反對側の窓からスザンナの女房（かみさん）が咎めた。「公爵（プリンチーペ）樣はきつと、ペッペ爺さんなんかに會ひにいらしたのぢやないのよ。」

「ううん、屹度さうよ、ペッペ爺さんに御用がおありなんですすわねえ、公爵さま？　ペッペ爺さんに御用がおありなんですわねえ？」

「なんの、ペッペ爺さんなもんか、ペッペ爺さんなもんか！」と、スザンナの女房（かみさん）は、兩手で化粧をしながら、言ひはつた。「公爵さまが今時分、ペッペ爺さんのことなんか考へていらして堪るもんかだ！　今は謝肉祭の最中なんだもの――公爵さまは屹度、お從妹（いとこ）ごのモンテーリ侯爵夫人や、お友達と御一緒に、お馬車に召して、花束を投げにいらつしやるなり、郊外へ Fara（ファラ）ogna（グリーナ）（お嬶（しみ））にいらつしやるのさ。どうしてペッペ爺さんなんぞに、構つていらつしやれるもんかだ！」

公爵は日ごろ自分が暇つぶしにやつてゐることを、かうまで詳しくすつぱ抜かれて、いささか度膽をぬかれた形であつたが、このスザンナといふ女は何から何まで知つてゐたのだから、別に

驚くにはあたらなかつた。

「いや、親切なおかみさん方、」と公爵が聲をかけた。「實はお察しのとほり、そのペッペに用があるんだがね。」

その言葉に應じて、さつそく公爵に返事をしたのは、二階の窓から半身を乘り出して、もうさつきから聽耳を立ててゐた、グラーツィヤといふ女房であつた。彼女は先づ、ちよつと舌を鳴らしながら、指で輪を描いてみせた——これは羅馬女がよくやる否定の標しである——その後で『留守なんですよ。』と言ひ足した。

「しかし、多分あなた方は、何處へ行つてるのか爺いの居どころを御存じだらう?」

「ふん、何處へ行つてるものですか!」と、首をちよつと一方の肩へ傾げながら、グラーツィヤがくりかへした。「おほかた居酒屋か、廣場か、それとも噴水の邊にゐますよ。きつと誰かに誘ひ出されて何處かに神輿をすゑてるんですよ——Chi o sa!(だれにわかるもんですか!)」

「何かお言傳でもありましたら、」と、それを引きとつて、反對がはの窓からバルバルーチヤが自分の耳たぶへ耳環をはめながら言つた。「わたしに仰つしやつておいて下されば、あの人にさう申しますわ。」

(いや、それにも及ぶまい。) と公爵は思つたが、その好意に對しては感謝した。ちやうどそ

の時、四つ辻になつてゐる横町の角から、埃りまみれの恐ろしく大きな鼻が、ひよつこり覗いて、それに次いで現はれた唇と顔全體を蔽つて、まるで斧のやうに、にゆつと前へ差し出された。それが他ならぬペッペであつた。

「あら、ペッペ爺さんよ!」と、スザンナの女房が喚き聲をあげた。

「ほんに、ペッペ爺さんが戻つて來ましたわ Sior principe!(公爵様!)」と、グラーツィヤが自分の家の窓から急いで叫んだ。

「戻つて來たわ、ペッペ爺さんが戻つて來たわ!」と、通りの片隅から、チェチリヤの女房がかん高く喚きだした。

「公爵様、公爵様、ほら、ペッペの小父さんがやつて來たよ。ほら、ペッペの小父さんがさ! (ecco Peppe! ecco Peppe!)」と街路にゐた子供たちも叫んだ。

「わかつたよ、わかつたよ。」と、その凄い叫び聲に耳を塞がれて公爵が悲鳴をあげた。

「はい、手前でございますよ、eccelenza!(閣下)はい手前で!」と、帽子をとりながらペッペが言葉をかけた。どうやら彼は、もう謝肉祭の人混みの中へ、揉まれに行つて來たものと見えて、何處か横あひからでも強たか打粉を浴せかけられたらしく、背中や脇腹をすつかり眞白にし帽子を揉みくちやにして、顏ぢゆうに白い斑點をつけてゐた。このペッペといふ男は、生涯ペッペと

いふ愛稱で通つて來たといふことからして、既に一風變つた人物であつた。もうすつかり白髪になつてゐながら、何としてもデュゼッペといふ本名に返ることが出來なかつた。これでも、もとは素性の正しい、富裕な貿易商の息子として生れたのであつたが、今では最後の荒ら家まで訴訟の結果、まきあげられてしまつてゐた。彼の父親といふのも、名前こそちやんと、SIOR ジョワンニ（ジョアンニの旦那）と呼ばれてはゐたものの、やはりペッペと同じ型の人間であつたため、根こそぎ身代をすつてしまつたので、今ではペッペは、多くの人々と同じやうに、つまり、ゆきあたりばつたりの、慘めな暮しをしてゐるのであつた――たとへば、どこかの外國人のところへ下男に住み込むかと思へば、辯護士の家の小使にやとはれ、何とかいふ畫家のアトリエ掃除をやつてゐるかと思へば、今度は葡萄園や別莊の番人になつてゐたりして、その都度、身につけてゐる着物が絶えず變つて行つた。時には、ペッペは圓い帽子をかぶり、だぶだぶのフロックを着て、街路へひよつくり姿を現はすことがある、かと思ふと、時には、二個所も三個所も裂けたところのある窮屈な百姓外套を著てゐることもあつて、そのまた袖がひどくつまつてゐるので、長い兩手がまるで二本の箒のやうに、そこからにゆつと突き出てゐるといふ爲體であつた。時には坊さんの穿く靴下と半靴とを足につけてゐることもあり、時には、ちよつとには見當のつきかねるやうな着物を著てゐることもあるが、それも決して正當な著かたをしてゐないのだから尙更へんである。どう

かすると彼は、てつきり、ズボンの代りに上衣に脚を突つこんで、いい加減に後ろでそれを寄せて括りつけてゐるのではないかと思はれるやうな恰好をしてゐたものである。彼はまた、出來ることならどんなことでも、往々にしては全く何の利益にもならないやうなことでも、頼まれれば何でも二つ返事でしてのけた。たとへば、町内の女房連に頼まれたいろんな古著類だの、零落した坊さんや古物商から委託された羊皮紙の書物だの、畫家から預かつた繪だのを持ちまはつて賣り歩いたりした。さうかと思へば、毎朝、坊さん連のところをまはつて、ズボンだの半靴だのを、家へ持つて歸つて手入れをしてやるために寄せ集めて來るのだが、その後でひよつこり出會つた誰か第三者に何か用足をしてやらうなどといふ餘計なおぜつかい氣をおこすことから、つい約束の時間に品物を屆けることを忘れてしまふ、それがために坊さんたちは、靴とズボンを取りあげられて、終日、まるで囚人のやうに引き籠つてゐなければならない羽目に陷ることも度々あつた。彼はときどき相當な金を手に入れることもあつたけれど、金の始末はいはゆる羅馬式にやつてのけた――つまり、宵越しの金は殆んど持つてゐなかつたが、それは、自分に無駄づかひをしたり、飲み食ひに使ひはたすのではなく、彼はいつもそれを、好きで好きでたまらない富籤のためにすつかり拂いてしまふのであつた。まつたく彼がまだ一度もためしてみなかつたといふやうな富籤の番號はちよつとありさうになかつた。彼にとつては、何でもないやうな日々のあらゆる出來ご

とが、實に重大な意義を持つてゐたのである。彼はたまたま何かくだらないがらくたを街なかで見つけたりすると、さつそく占ひ本を開いて、そのがらくたが其處ではどういふ番號になつてゐるかを調べあげて、早速その番號の富籤を買つてみるのであつた。或るとき、彼は夢に悪魔を見た――さうでなくても彼は、どういふ譯か必らず春の初めには悪魔の夢を見るのであつたが――その悪魔が彼の鼻をひつ摑んだまま、家といふ家の屋根を曳きずりまはして、先づ聖イグナーチイ寺院からはじめて、コルソー街の上を一渡り通り、the Ladroni（三人追剝）横町を過ぎ、ついでvia della stamperia（活版通り）を越えて、最後にあの Trinita（三位一體）の鐘樓のところで立ちどまつてこんなことを宣告するのであつた。『思ひ知つたか、ペッペ、これといふのも聖パンクラーチイに願がけなんかしくさるからのことよ――手前の富札なんかが當つてたまるもんか。』この夢はチェチリヤの女房や、スザンナの女房の間はもとより、殆んど町内ぢゆうに大きな話題を提供したが、しかしペッペはこの夢を自己流に解決した――といふのは、さつそく例の占ひ本に嚙りついて、悪魔は十三番であり、鼻は二十四番、聖パンクラーチイは三十番であることを知ると同時に早速その朝、この三つの番號の富籤を買つたのである。それからこの三つの數を加へあはせると六十七になるといふので、その六十七番のも買つた。だが例によつて例の如く、それは四本とも見事にはづれてしまつた。また或るとき、彼は葡萄栽培者のラファエリ。トマチェーリといふ、

よく肥つた羅馬人と摑みあひをおつ始めたことがあつた。いつたい何が原因で喧嘩になつたのか――それは知る由もないけれど、二人は兩手をはげしく振りまはしながら、大聲で怒鳴りあつてゐたが、たうとうしまひには二人とも眞青な顏になつてしまつた――これは怖ろしい徴候で、かうなると大抵、窓といふ窓からは女たちが殘らず、びくびくしながらからだを乘り出すし、通りすがりの者はなるだけ遠くへ身を片よせる――つまり、事態がつひには双傷沙汰にまで及ぶといふ前兆なのである。果せるかな、肥つちよのトマチェーリは疾くもその太い脹脛につけてゐた革の脛當へ猿臂をのばしざま、そこに差してあつた短刀を拔かうとしながら、『よおし、吠え面かくなよ、この犢のど頭め！』と言つた。が、それを聞くなり、ペッペはぽんと一つ自分の額を叩いて、そのまま喧嘩場からとつとと逃げだしてしまつた。彼はまだ一度も犢の頭といふ番號の富札を買つた例しのないことに氣がつくと、早速その番號をさがし出して、大急ぎで富籤屋の店へと駈け出してしまつたのである。それで血まみれな一幕を見物しようものと待ちかまへてゐた一同の者は、この豫想外な行動にすつかり呆氣にとられてしまひ、當のラファエリ・トマチェーリも短刀をもとの脛當へしまひこんだものの、しばらくは引つこみがつかずに茫然としてゐたが、しまひにやつと、『Che uomo curioso！（何ちう變な奴だ！）』と言つたきりである。富籤が當らずじまひになつても、ペッペはいつかう平氣であつた。彼はいつかは自分が金持になれるものと固く信じて

ゐたので、店の前を通る時には大抵いつでも、いろんな品物の値段を手あたり次第に訊ねてみたものである。或る時などは、大きな家が一軒賣り物に出てゐることを知ると、彼は賣手のところへわざわざその交渉に出かけて行つたりしたくらゐである。ペッペのことをよく知つてゐる連中が彼を嘲笑ひだすと、ペッペは極めて無邪氣らしくこんな風に答へたものである。『けど、何を笑ふことがあるだね？　何も可笑しいことあねえだらう？　おらは何もいま買はうたあ言つてやしない、その中に時を見はからつて、金が出來たら買はうと思ふだけのことよ。何も笑ふことなんかちつともありやあしないさ……誰でも、末に子供たちのために殘したり、お寺へ寄進したり、貧乏人に惠んでやつたり、その他いろんなものを買ふために、財產を拵らへておかにやあなんねえのさ……chi lo sa！（お前らの知つたことがい！）』彼は公爵とはもうずつと前からの知りあひで、曾て老公の召使として公爵邸に住みこんでゐたことさへあつたが、その折には、仕着せを一と月で著やぶつてしまふといふことと、うつかり老公の化粧道具を殘らず肘で窓の外へつき落したといふ理由でお拂ひ箱になつたのである。

「あ、ちよつと頼みたいことがあるんだよ、ペッペ！」と、公爵が聲をかけた。

「どんな御用でございませうか、ecce lenza？（旦那様？）」と、禿頭を見せながら、ペッペは答へた。

「公爵樣はただ、『こりや、ペッペー』と、さう仰つしやつて下さりますればよろしいのでござり

ます。さうしますればわたくしめは『はい、御前にをりまする！』と申しあげるでござりませう。そこで公爵樣が、『ペッペ、な、よいか！』と、仰せられますれば、手前は、『ecco me, ecce eccenza！（はい、畏りました。閣下！）』と申しあげるでござりませう。」

「ペッペ、實はお前にかういふ用が頼みたいんだがね……。」かう言ひながら、公爵は一わたりぐるりを見まはしたが、その時、女房といふ女房が、グラーツィヤだの、スザンナだの、バルバルーチヤだの、テッタだの、トゥッタだのといふ——そこにゐる限りの女房連が殘らず、物珍らしさうに窓からからだを乘り出して覗いてをり、可哀さうにチェチリヤの女房などは、今にも街路へ轉げ落ちさうな恰好をしてゐるのを見て取つた。

（（うん、これあいけない！））公爵はさう思つたので、「ペッペ出かけよう、僕について來てくれ！」

さう言ふなり、彼が先に立つて歩きだすと、ペッペも首をさげて、ひとりでこんなことを呟やきながら、その後に隨つた。『ちえつ！　女つて奴は、だから穿鑿ずきだつていふのさ、穿鑿ずきだからまた女でもあるんだし、女だから穿鑿ずきでもあるんだよ。』

長いあひだ二人は、それぞれ勝手な想像をめぐらしながら、通りから通りへと歩を運んでゐた。ペッペはこんなことを考へてゐるのだつた。『きつと公爵には何かおれに頼みがあるんだが、人

前でしやべるのを憚かつてござるところを見れば、どうやらよつぽど大事な用事らしいぞ。從つて、よつぽどうまい褒美が出るか、たんまり金が貰へるに違ひない。ところで、もし公爵から金が貰へたとしたら、一體それをどう始末したものかな？　だいぶあの借金もながくなるから、珈琲店の亭主のセルビリオどんに返してやるかな？　あのセルビリオどんは、精進週間の初期には屹度このおれに金を請求するにきまつてるからなあ——何しろセルビリオどんはあの化物みたいな大きなヴァイオリンに有金を全部つぎこんで、謝肉祭にあれを曳つぱつて街ぢゆうを遷りまはすために、三月もかかつて自分の手で拵らへあげたんだから——珈琲でまた一儲けするまでは、どうせこの先きしばらくは、仔山羊の串燒の代りに水煮の花甘藍ばかり食つてゐるに違ひないのだから。いや、それともセルビリオどんの拂ひの方は見合はせて、その代りにあの人を午餐に料理屋へ招ぶことにするかな？　何しろ、あのセルビリオどんは——Il vero Romano（生粋の羅馬人）だから、さういふ招待をうけた限り、借金の方は當分我慢してくれるに違ひないし、それに富籤が間違ひなく精進期の二週間めからは始まるにきまつてるのだからなあ。ただ、それまで貰つた金をどうして安全にしまつておくかが問題だて。必らず貸せといふにきまつてゐるヂャコモや、研師のペトゥルーチオ親方に知られないやうにするには、いつたい、どうしたらいいかな？　何しろヂャコモの奴は猶太區の猶太人に自分の着物を著ぐるみ質に入れてるし、ペトゥルーチオ親方の

方もやつぱり猶太區の猶太人に自分の着物を入質してからに、女房のスカートや一枚看板の冠布まで著やぶつて、まるで女みたいな服裝をしてゐるんだからなあ……奴らに借金をされないで濟ますにはどうしたらいいか知らん？』ペッペが思案にくれてゐたのはこんなことであつた。

一方、公爵は公爵で、こんなことを考へてゐた。『ペッペなら屹度、あの美人が何といふ名前で、何處に住んでゐて、何處の生れで、いつたい何者かといふことを探り出してくれることが出來るだらう。第一、彼は顏がひろいから、人混みの中で仲間に出逢ふことも、他のどんな人間よりずつと多いわけで、さういふ連中を通して聽き出すことも出來れば、珈琲店や料亭を一々覗いて歩くことも出來、風體から人に怪しまれることもなく他人に話しかけることだつて出來る。なるほど彼は時々よけいなお喋りをしたり、へまなことをしてのけたりはするけれど、眞實の羅馬人の言葉で釘をさしてさへおけば、よもや外へ洩らすやうなことはないだらう。』

通りから通りへと拔けながら、公爵はそんな風に考へて歩いてゐたが、やがてのことに、もう疾つくに橋をわたり、いつしか羅馬のトランステーヴェル側へ足を踏みこみ、大分まへから坂を登つて、S. Pietro in Montorio（モントリオの聖ピエトロ大伽藍）もついぞ眼と鼻の先であるのに氣がついて足を停めた。路の眞中に突つ立つてもゐられないので、彼は廣場へ入つて行つたが、そこからは羅馬の全市街が一望の下に見渡された。そこで公爵はペッペの方へふりかへつて口をきつた。『實はねえ、

ペッペ、お前に一つ骨折つて貰ひたいことがあるんだよ。』

「どういふ御用でござりませうか eccelenza？（エッツエレンツア 旦那様？）」

しかし、ここでふと羅馬の市街に眼をとめると、公爵はそのまま默つてしまつた。彼の眼前には永遠の都、羅馬が美しく輝やくパノラマとなつて、展開したのである。今しも、無數の家屋や寺院や、圓頂閣や、尖塔の明るい累積が、西に傾いた太陽の光りに赫つと照らされてゐる。家や屋根や、彫像や、幻（まぼろし）のやうな露臺や廻廊が、或は群れとなり、或は群を拔いて孤立しながら現出したのである。そこには夥しい鐘樓や圓頂閣が、目も綾なる燈籠をつけた頂きを見せて賑やかに立ちならび、またそこには陰暗な宮殿が全容を露呈してをり、また、パンテオンの扁平な圓屋根があり、裝飾柱頭と使徒パウロの彫像をつけたアントニノ圓柱の頂きが眺められた。なほそれより右手には、カピトリウム*の建物が彫像の馬や人物と共に高く聳えてをり、更にその右には、きらきらと輝やく家並や屋根の集まりのうへに、巨大なコロセウムの黑々とした集塊（かたまり）が莊重嚴肅に聳え立つてゐる。そこにも亦、まばゆく輝やく陽光を受けた城壁や露臺や圓頂閣の群れが戲れてゐる。その燦然たる全集團のうへに、遠くリュドヴィージやメディチスの別莊の石櫛の梢が、その黑々とした青葉で勵んでをり、そのまたうへには一群れの羅馬松が、細い樹幹にささへられた圓屋根のやうな頂きを空中たかくもたげてゐた。それから、この全景觀の總バックとして、透き

とほるやうな山々が大氣のやうにうつすりと、あだかも燐光にも似たひかりにつつまれて、仄青く浮きあがつてゐた。この大畫面に取り入れられたあらゆる構圖の調和と、その配合の素晴らしさは、筆舌のよく傳へ得る底のものではなかつた！　空氣はいやが上にも清く澄みわたつて、程遠く離れた建物の一線一角までがはつきりして、すべてのものが手をのばせば掴むことも出來るかと思はれるほど間近に見えた。極めて微細な建築的裝飾から、蛇腹の飾り模樣に至るまで――すべてが、得も言はれぬ清らかさの中に、くつきりと認められるのであつた。この時、一發の砲聲がとどろくと共に、遠くであげる群集の喝采のどよめきがわつと聞えた――それは、今や謝肉祭の一日の結びとして、騎士の乘らぬ駿馬が走りすぎたしるしである。太陽は地平に近く春（うすつ）き、あらゆる建築物に反射するその光りはひときは赤みを帶びて、一層かつと眼を射る。市街はいよいよ生氣にあふれ、ますます身近にせまつて來る。松はいやが上にも黑みを增し、山々はひときは青ずんで一層、燐いろを深めて來た。天際はいよいよ嚴そかに、いよいよ美はしく、將に消え去らんとしてゐる……。ああ！　何たる景觀であらう！　公爵はこの景觀につつまれたまま、己れを忘れ、アンヌンツャータの美しさを忘れ、羅馬市民の神祕を忘れ、地上にある限りのすべての物象を忘れ果てて立ちつくした。

――一八三九年作――

譯註

狂人日記

譯註

一三 『蜂』（ブチエラ） これは恐らく、そのころ露西亞で發行されてゐた『北方の蜂』(„Severnaya Pchela.") といふ雜誌をさして言つてゐるのであらう。

一七 ルチェフ 當時の有名な裁縫店。

三六 マッソン 世界主義的運動をなす一種の祕密結社。一七二三年、石工のギルドを母胎として倫敦に成立した政治的及び宗教的色彩のない精神修養團體で、各國に支部を置き理想社會の實現を目指してゐる。フリーメーゾン。

三九 フィリップ二世（一五二三―一五九八） 十六世紀の國運隆盛時代の西班牙王で陰欝な宗教的迷妄に囚はれた暴君として知られてをり、當時西班牙領であつたニザーランド（和蘭陀）のプロテスタントを迫害したことから叛亂が起り領土の一部を失つた。ムーア人に壓迫を加へたり、佛蘭西の内政に干渉して佛土戰爭を起させたり、葡萄牙を攻略した他、英吉利へ大艦隊をもつて入寇を企てたこと等で有名である。

〃 カプシン僧（カプーチノ） フランシス派から分離した羅馬加特力の一宗派（(Cappuccino)）の僧。先の尖つた頭巾をかぶつてゐるので、Cappuccia（カプーチア）（玉葱）から、この名が出たものといはれる。

五〇 アルジェリア 亞弗利加の西北部、地中海に沿ふ佛蘭西領。

羅馬

五三 アルバノ　羅馬の南東二十基米の山中にある同名の湖の南岸にある小都會。

五四 カステロ・ガンドリフォ　前項のアルバノの近くにある古城。

五五 フラスカーチ　アルバノ湖の北岸に位する別莊地。

五六 ダイアナ　羅馬神話のジュピターの娘で、月と狩獵と森の女神。

〃 ジュノー　羅馬神話中の最高神ジュピターの妻にして妹。

〃 グヴェルチノ（一五九〇—一六六六）　伊太利の畫家。

〃 カラッチイ（一五六〇—一六〇九）　伊太利の畫家。著名な作品として、羅馬のファルネーゼ宮の壁畫が殘つてゐる。

五七 ピエトロ・ベンボー（一四七〇—一五四七）　伊太利の學者にして司教。一五二一年羅馬法王レオ十世の秘書となり、法王歿後樞機官に任ぜられた。詩作、書簡その他の著述を殘す。

〃 della Casa（デラ カーザ）ジョヴンニ（一五〇三—一五五六）　伊太利の詩人にして司教。

五八 樞機官　羅馬加特力教會に於ける最高の僧位で、法王選擧の權利を有し、七十人より成る法王廳の最高諮問機關を形成するもの。

五九 ルッカ　伊太利のゼノア灣沿岸の都會。

六〇 シムプロンの峠　瑞西と伊太利の國境に跨がるアルプスの一山地にナポレオンが約六年を費して開設した峠。今はこの下を世界最長のトンネルが通じてゐる。

六一 テルモピレ　希臘に於ける有名な狹隘の險路。紀元前四八〇年、スパルタ王レオニダスが此處で波斯の大軍を阻止せんとして、內通者のため腹背に敵を受けて戰死した處。

〃 ダリウス　古代波斯のアケメネス王朝の皇帝で第一世（在位、紀元前五二二—四八六）は王位簒奪者ガウマタを殺して卽位し、アケメネス王朝の基を開いた。バビロンを征服したり、二回に亘り希臘に大軍を差しむけたが、戰ひ利あらず、埃及遠征中に歿。第三世（在位、紀元前三三五—三三〇）はアレクサンダー大王に大敗し、內廳者の手にかかつて死んでゐる。

六二 ゴリドーニ（一七〇七—一七九三）　伊太利の劇作者。

六三 アルフィエーリ（一七四九—一八〇三）　伊太利の劇作者にして詩人。古代悲劇の改革者として有名なる伯爵。

六四 リヴルノ　リグリヤ海に面した伊太利の港市。

六五 ブラマンテ（一四四四—一五一四）　正確にいへばドナト・ラッザリ。文藝復興期に於ける伊太利の建築家で畫家。羅馬の聖ピエトロ寺院の建立に携つてゐる。

六六 コロセウム　古代羅馬帝國の野外圓形劇場の巨大な遺物。

〃 チータス・レヴィアス（紀元前五九—紀元一七）　有名な羅馬の歷史家。百四十二卷より成る浩瀚な羅馬史の大著述あり。

〃 タ—チッス（五三又は四—一一七又は一三六）　羅馬の歷史家。十四卷の歷史、十六卷の年代記の著あ

り。特に彼は歴代羅馬皇帝の暴政に就いて直言してゐる點で名高い。

八三 パンテオン　萬神殿の意で、古代羅馬帝國創業の成つた西暦二十七年にアグリッパによつて建立され、一度燒失して西暦一二〇—一二四年に再建されたもの。現今は諸名士の棺を安置してゐる。

八四 ベルニニ（一五九八—一六八〇）　伊太利の建築家で畫家で彫刻家。聖ピエトロ寺院廣場の柱廊を造つた人。

〃 ボルロミニ（一五九九—一六六七）　伊太利の建築家。ミケランジェロ、ヴィニョーラ等に引きつぎ、羅馬の聖ピエトロ寺院の建立にあたつてゐる。

〃 サンガルロ　伊太利の有名な建築家の三人兄弟。ジュリアノ（一四四五—一五一六）はフローレンスに幾つも寺院を建立し、ゼノアの宮殿やピザの城砦を築き、アントニオ（一四五〇—一五三四）は羅馬に天使城を築き、小アントニオ（一四八五—一五四六）は羅馬に Madonna di Loreto（マドンナ・ディ・ロレト）寺院や、サケッティ宮殿を建てた。

〃 デラポルタ（ヂャコモ。一五四〇—一六〇四）　伊太利の建築家。ミケランジェロ及びヴィニョーラの弟子。

〃 ヴィニョーラ（一五〇七—一五七三）　伊太利の美術家にして建築家。ミケランジェロの後繼者として知られ、羅馬の聖ピエトロ寺院に遺作を留む。

〃 ボナロッティ　ミケランジェロ（一四七五—一五六四）のこと。

八八 青いブルーズ　菜葉服——勞働者の意。

九三 メツェナート　古羅馬帝國の政治家で、學問や藝術の擁護者として名高かつたため、その名が學問藝術の擁護者を意味する總稱名詞に化したのである。

九四 ゼノアの一市民　ここではコロンブスのことを言つてゐるのである。

九七 クキリート　古代羅馬の公民で、武家に對立してゐた階級。

九九 ヂェンサノ　アルバノ地方の町。花祭で有名なところ。

〃 ピツィカローレ　伊太利語にて肉や食料品を商なふ人間の意。

一〇四 打粉　謝肉祭の折に群衆がお互ひに投げあふ白い粉。

〃 コンフエッティ　石膏や紙で作つた玉で、謝肉祭に群衆が互ひに投げあふもの。

一〇五 尻尾を持つた十四行詩　伊太利の詩の形式の一つで、ソネットの十四行に思想が納まりきらない場合には餘分の行が補足されて、往々ソネットそのものよりも長くなるから、凧の尾をもつ十四行詩などといはれるのである。

一〇七 外國女　羅馬人はすべて羅馬市内に居住せぬものを外國人と呼ぶ習はしがあるから、かう言つたのである。

一〇八 チンパノ　樂器の一種。半球形の眞鍮製の胴に皮を張つた太鼓。

一二五 トランステーゼル　字義上『テーゼルの河むかふ』の意で、羅馬市の西寄を南北に貫流するテーゼル河の西岸、ギヤニコロの丘一帶を指す名稱である。

一二六 カピトリウム　羅馬にあるジュピターの神殿で、ミケランジェロ及びその弟子によつて建立されたもの。

解題

ニコライ・ゴーゴリ（Nikolai Vasilievitch Gogoli, 1809—1852.）の作品中、これ以上に深刻で悲劇的なものはないと言はれてゐる『狂人日記』（„Zapiski Sumashedshawo.“）は、處女作集『ディカーニカ近郷夜話』（前編一八三一年、後編一八三二年）に次いで、一八三五年の一月『ミルゴロド』に僅か一ヶ月先だつて刊行された著作集『アラベスキ』（„Arabeski.“）の中に收められてゐるから、これが制作されたのはその前年、即ち一八三四年にあたり、この年の七月にゴーゴリは彼得堡大學の萬國史講座の助教授として採用され、その十月にはプーシキンやジュコフスキイの參列する前で最初の講義を試みてゐる、彼が二十六歳の頃である。

『狂人日記』は、それまでにゴーゴリが世に問うたところのロマンチックな所謂『ウクライナ物語』から一轉して、彼得堡を舞臺とした官吏生活の描寫に寫實的な新生面を開いた最初の作品で、彼が身をもつて體驗せる首都に於ける小官吏社會の實生活を主題として、それに藝術的具象化を施こした所謂ゴーゴリの『官吏物』——『鼻』、『檢察官』、『外套』等のトップをなすものである。

この小説には、薄倖な下級官吏ポプリシチンをして遂に發狂せしむるに至る、空想と現實とのギャップが表現されてゐるが、同じく悲慘な宿命に翻弄される『外套』の主人公に比して、この『狂人日記』の主人公の悲劇は更に深刻である。それにも拘らず、その最も悲慘でロマンチックな主題がゴーゴリ一流の諧謔と、透徹せる寫實主義によつて、人間の思慮分別に對する容赦なき嘲笑をもつて發展してゐるため、讀者はこれを讀みながら、思はず哄笑を禁じ得ず、その巧みな諷刺のために、ともすればこの物語の悲劇性を忘れ勝ちにさへなる。

主人公ポプリシチンは、現實的に何らの根柢をもたずして、己れの屬する環境に於いて目覺ましい役割を演じようといふ野望に驅られてゐるが、彼自身は己れの無價値のために責め苛まれるところの、自尊心と功名心を抱く一個の蟲けらに過ぎないのである。そしてその苦惱が痛烈になればなるほど、彼の空想は理性の權限から解放され、ファンタジイが理性を打ち負かして徐々に空想を幻覺に變へて行く、そのプロセス——思慮分別が漸次混迷の境に陷ちてゆく過程が、作者ゴーゴリの驚ろくべき心理描寫の的確さをもつて表現されてゐる。またこの小説には、まだこれまでのゴーゴリの作品には見られなかつたところの社會的諷刺の鋭い閃めきが現はれてゐる。即ち下僚より見た長官への辛辣な批判や、將官とか侍從といふ顯職に對する揶揄の思想で、これはその頃としては非常に大膽きはまる試みであつたから、當時の官權が作中よりさうした(危險な)

個所を容赦なく抹殺したのも無理からぬことであつた。

この可笑しくて而も悲痛きはまる物語が、いたましくも狂へる主人公の母を呼ぶ聲で結末となつてゐるくだりに到つて、讀者の胸は深い感動に打ち震へるであらう。

この小説はプーシキンの『青銅の騎士』と一脈相通ずる類似性をもつてゐる。兩作とも等しく主人公として、非常に大それた野心を抱き、それがために己れの運命に意地惡く小突きまはされ愚弄される『小役人』が取扱はれてをり、どちらの主人公も同樣に自己の價値を誇大に妄想して、而も實生活に於て滿足が得られないばかりに、遂に發狂してしまふのである。ただその同じアイデアがプーシキンに於いては、ひたすら悲劇的色彩をもつて發展してゐるのに對し、ゴーゴリにあつては悲劇的な半面に喜劇的な面貌をもつて表現されてゐるだけの相違がある。

『羅馬』(G. Rim.)は一八三九年の作で、ゴーゴリは一八三六年からこの年まで足掛け四年のあひだ露西亞を離れて外國旅行に出てゐたが、その大部分を伊太利、特に羅馬で送つてをり、彼が伊太利を如何に愛したかは、彼が多くの知友に宛てた書簡によつて明らかである。例へば彼が一八三七年の十月三十日附で羅馬から畏友ジュコフスキイに宛てて出した書簡の一節にかう書いてゐる——《……私がどんな悦びを抱いて瑞西を振りすてて、愛しい私の戀人、美しいこの伊太利へ飛んで來たかを貴方が御存じになつたなら！　彼女(伊太利)は私のものです！　世界ぢゆ

うに誰ひとりとして彼女を私の手から奪ひ取ることの出來る者はありません。私は正しくここで生れたのです。露西亞も、彼得堡も、雪も、あの卑劣漢どもも、官省も、講座も、劇場も――そんなものはみな一場の夢に過ぎませんでした。私は再びこの心の故郷で目覺めたのです……)と。誠にゴーゴリにとつて伊太利は正しく心の故郷であり、終生忘れることの出來ない戀人であつた。彼は該博な歴史的素養と熱烈な憧憬の心をもつて伊太利を隈なく眺め、羅馬を飽くなく鑑賞した。その伊太利及び羅馬に對する情熱が凝つて一篇の小説となつたのが、この『羅馬』である。これは小説といふよりは寧ろ美しい詞藻をもつて綴られたエッセイである。ゴーゴリはこの一篇に於て羅馬に對する讃嘆と渇仰と驚異のありたけを盡してゐる。作中の主人公たる伊太利青年が作者自身の變貌であり、女主人公たる絶世の美女アンヌンツィータが羅馬そのものの象徴に他ならぬことは言を俟たないところである。作者が持に(斷章)と傍題を附してゐるとほり、成程これを一篇の小説として見れば未完成なものに過ぎないけれど、一個の散文詩として鑑賞すれば實にすぐれた藝術であり、殊にゴーゴリの社會觀、人生觀、藝術觀等を窺ふ點に於ても、見逃すことの出來ない貴重な文獻である。

この作のものされた一八三九年の前後は、かの最大の傑作『死せる魂』の前編もやうやく完成に近づきつつあつて、ゴーゴリの創作的圓熟期の最高峯ともいふべき時代に當つてゐる。ゴーゴ

リはこの年の九月に一旦母國に歸り、翌一八四〇年、雜誌『莫斯科人』の三月號にこの『羅馬』を發表したのであるが、それに先だつて同年の二月、兩度にわたつて莫斯科の朋友知己の前でその原稿を朗讀してゐる。

昭和十二年五月

譯者

納本

昭和十二年六月十五日　第一刷發行
昭和三十年四月三十日　第七刷發行

狂人日記

定價四拾圓

譯者　平井肇

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎

東京都板橋區板橋町十丁目二四八四番地
印刷者　白井知一

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

本製井永・刷印社陽三社會式株

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自已の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自已の欲する時に自已の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫新刊・近刊書（三月～五月）

既刊二三〇〇點　戰後復刊一六〇〇點

梅澤本古本說話集　川口久雄校訂　★★
好色一代男　井原西鶴作　横山重校訂　★★
歌よみに與ふる書　正岡子規著　★
都會の憂鬱　佐藤春夫著　★★
高村光太郎詩集　高村光太郎著　★★
初すがた　小杉天外作　★★
俳諧大要　正岡子規著　★★
一兵卒の銃殺　田山花袋作　★★
古代への情熱　シュリーマン著　村田數之亮譯　★★
魅せられたる魂（二）　ロマン・ロラン作　宮本正清譯　★★
ラムンチョ　ピエール・ロティ　新庄嘉章譯　★★
居酒屋　下　エミール・ゾラ　田邊・河內譯　★★★
萬人の道　下卷　サミエル・バトラー　今西基茂譯　★★★
山のかなた・幸福の船　他三篇　シュミットボン作　關泰祐譯　★★
リルケ詩集　星野慎一譯　★★★
玉臺新詠集　中　鈴木虎雄譯解　★★★
水いらず・メヌエット　モーパッサン作　川口篤譯　★
ブヴァールとペキュシェ　下　フロベール作　鈴木健郎譯　★★

文庫解說目錄

「解說目錄」を御希望の方は最寄の書店でお求め下さい。

ペルリ提督日本遠征記（四）　土屋・玉城譯　★★★

ハムレットとドンキホーテ　ツルゲーネフ著　河野・柴田譯　★

ブルーノ　シェリング著　服部・井上譯　★★

哲學の方法　ベルクソン著　河野與一譯　★

素朴文學と情感文學について　シラー著　高橋健二譯　★★

藝術哲學　ジンメル著　齋藤榮治譯　★★

ローマ帝國衰亡史（六）　ギボン著　村山勇三譯　★★★

プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神　上　マックス・ウエーバー著　梶山・大塚譯　★★

政治算術　ペティ著　大内・松川譯　★★

金融資本論　上　ヒルファディング　岡崎次郎譯　★★★

☆近刊☆

大寺學校・ゆく年　久保田万太郎作　★★

怪談牡丹燈籠　三遊亭圓朝作　★★

蜂　アリストパネース　高津春繁譯　★★

ゲーテ傳（一）　ハイネマン著　大野俊一譯　★★★

ペルル孃　他七篇　モーパッサン作　杉捷夫譯　★

われらの海　上卷　イバーニエス作　永田寛定譯　★★★

プルターク英雄傳（八）　河野與一譯　★★

植物の育成（二）　ルーサー・バーバンク　中村爲治譯　★★★

リカアドオのトラワアへの手紙　中野正譯　★★★

岩波